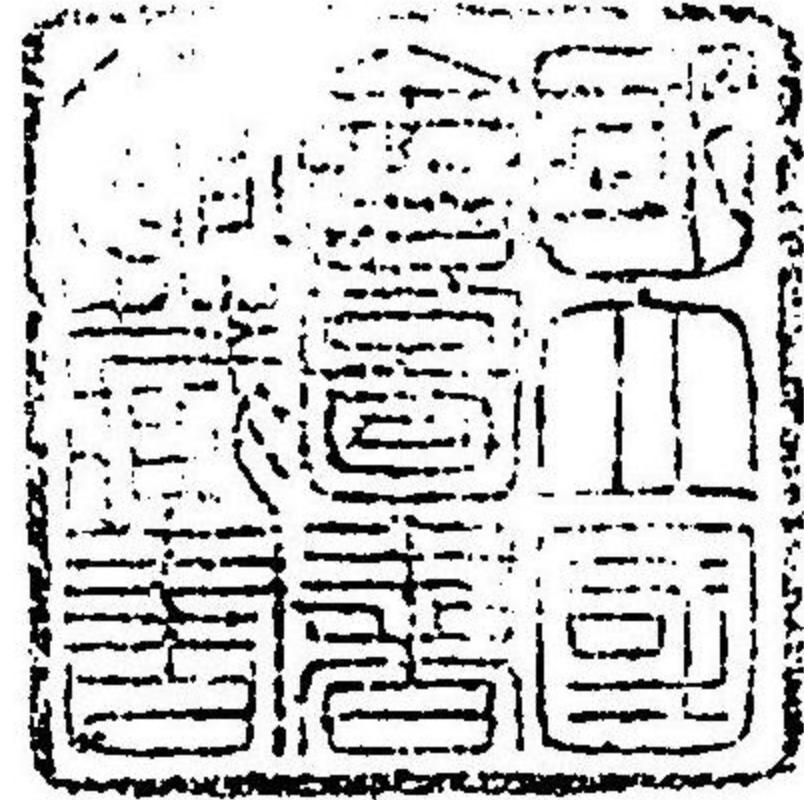


藤山豐編著

莊內史
完

誠信堂藏版



212.5
H995R

本史引用書目

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|------|-----|-------|------|--------|--------|-----------|------|--------|-------|-----------|--------|-------|
| 日本書紀 | 續日本後紀 | 類聚國史 | 太平記 | 神皇正統紀 | 義經記 | 日本史學提要 | 筆の餘り | 鶴岡昔雜談 | 心耕錄抄 | 御世紀管窺 | 奥羽越軍記 | 出羽國大社考 | 戊辰出羽戰記 | 大泉地名考 |
| 續日本紀 | 文德實錄 | 大日本史 | 野史 | 東鑑 | 和名抄 | 史海 | 莊内物語 | 後藤筆記 | 大泉通誌 | 大泉叢誌ノ内 | 郷政錄 | 芭蕉翁奥の細道の記 | 莊内藩學制錄 | 吹浦神跡誌 |
| 日本後記 | 三代實錄 | 前太平記 | 延喜式 | 職官志 | 日本鹿子 | 史學會雜誌 | 出羽國風土記 | 寛文以來大日記呼出 | 御年譜 | 耳口錄 | 義光物語 | 莊内古蹟物語 | 莊内神跡考 | |

莊内史
引用書目

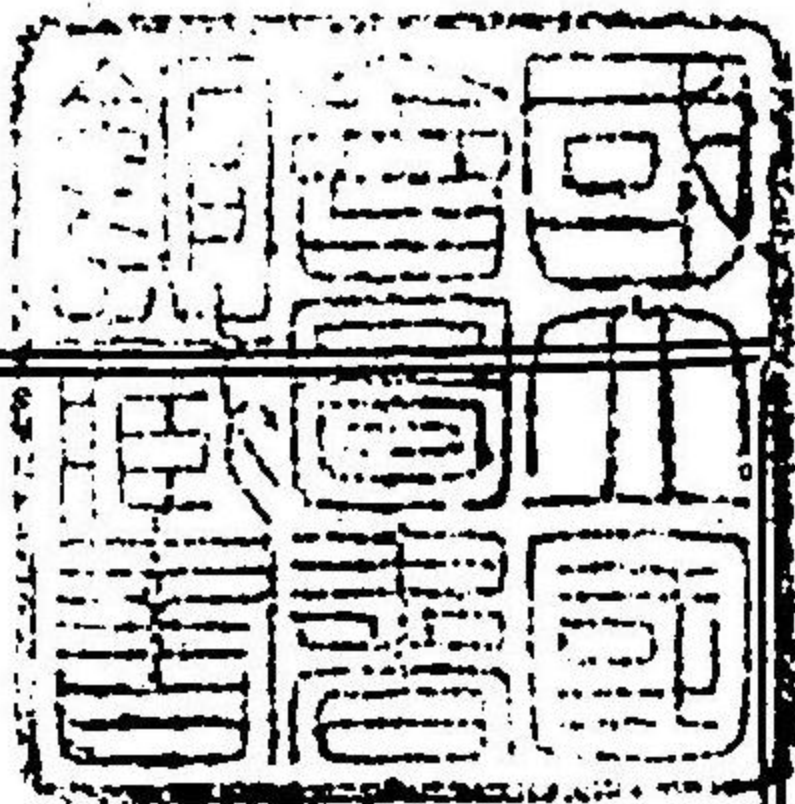


261933

城書
莊内記

招尾社祭神考
莊内要覽

百物語
夏日記



莊内史

例言

一本史第五章ニ至ル迄ハ事概出羽國一般ニ關スル記述ノ如シ是蓋史料ノ寡少ニシテ莊内ノ局所ニ限リテ輯集シ能ハザルガ故ナリ然レモ一般ヨリ推シテ局部ニ及ボス史眼ノ缺クベカラザルヲ認メテ敢テ推歩ノ勞ヲ厭ハズ

一記事ノ出所ハ皆卷首ニ現ス所ノ書目ニ依ル此ノ數書ニ採ラザルモノハ概皆文中ニ出所ヲ現ス今一々記事ノ出所ニ就キテ表示セザルモノハ之ガ煩累ヲ恐レテナリ然レモ時ニ或ハ卷首書目ヲ文中ニ表スコトアリ是文勢ノ止ムヲ得ザルガ故ナリ

一古蹟遺趾ノ口碑ニ存シ或ハ記録ニ存スルモノ其ノ確據ヲ得ザルモノハ本史概之ヲ畧セリ一概ニ之ヲ塗殺シ能ハザルモ然カモ尙之ヲ謬傳セムコトヲ恐レテナリ

一文中或ハ編者ノ評論ヲ挾メリ史家願クハ答ムル勿レ這般固ヨリ歴史ノ本體ニアラズトスルモ編者ノ心情或ハ時ニ同ジ人ニ同ジ或ハ時ト人トヲ怨ム餘途ニ此處ニ及ビシモノナレバナリ只其ノ行文ノ拙ナル

ハ敢テ大方ノ寛恕ヲ請ハンノミ

一本史下巻考證ノ部ハ主トシテ安倍親任氏著筆の餘リニヨル氏ハ特更
 ラニ異説ヲ立テントスル癖ナキニアラネド立證精確議論詳密ニシテ
 先輩ノ云ハザル所ノ卓見ヲ吐ク編者ハ其ノ涉獵ノ廣キ遠ク小寺信正
 氏ノ上ニ出ヅトナス況ンヤ進藤泉氏ノ出羽國風土記オヤ是レ固ト後
 世ニ出デ、比較對照スル利便ヲ得タルニヨルト云ヘル博學多識全力
 ヲ盡シテ其ガ編纂ニ從ヒシニアラズバ何ゾヨク此處ニ至ランヤ今本
 史ノ編著モ益ヲ此ノ書ニ得タルヲ大ナリ敢テ深ク氏ノ靈ト氏ガ後昆
 トニ謝スル所ナリ

一編者本史ヲ草スルニ當リテ先ヅ史料ノ草案ヲ作レリ然レ本史ノ浩
 瀚ニ至ルヲ恐レテ草案中ノ主眼ノミヲ拾ヒテ輯集セシノミ故ニ記事
 ノ多ク異端ニ亘リ居ラザルモノハ概之ガ考證ヲ略ス讀者若異説ヲ懷
 カバ願クハ一封ヲ賜ヘ編者ハ敢テ記事ノ出所ト之ガ考證トヲ答フル
 ニ吝ナラザルベシ

一本史ノ編著ニ於テ最心ヲ苦メシハ川北ノ記事ナリ一般史家ノ弊トシ
 テ住所ノ記載ヲ詳密ニシ比較的ニ他ヲ省畧ス編者ハ務メテ此轍ヲ蹈

マザラムコトヲ期セシガ如何セン在來ノ隨筆漫録ト著老ノ傳説講話
 トハ川南ノ事多クシテ川北ノ事甚渺ケレバナリ從ツテ此ヲ密ニシ彼
 ヲ粗ニセシトノ非難ヲ免カレザルベシ是レ蓋編者ノ好惡ヨリ出デタ
 ルニアラザランコトヲ諒察セラレバ可ナリ

一編者郷里ノ史料ヲ蒐集セントノ希望ヲ起シ得ルニ從ツテ之ヲ拔萃シ
 置キタルハ四五年前ヨリナリ然レハ大方ノ叱正ヲ請ハントノ素望
 ハアラザリキ故ニ未閱覽ヲ經ザル所ノ書籍渺カラズ越州軍記、會津軍
 記、奥羽永慶軍記、武家盛衰記、兵家茶話最上陳實記、逸史、王代古遷記、奥羽
 舊蹟聞老志、羽源記、奥羽道程記等ハ皆讀マント欲シテ未ダ讀ムヲ得ザ
 リシモノナリ其他借覽ヲ請ヘテ遂ニ能ハザリシモノモ亦渺カラズ近
 比書肆本史ノ出版ヲ督責スルヤ急ナリ故ニ先ヅ得シ所ノ史料ニヨリ
 テ這般一編ノ書籍ヲ草ス記述ノ錯誤蓋渺カラザルベシ謹ンデ讀者ノ
 是正ヲ請ヒ吾莊内ノ史料ヲシテ湮滅ニ歸セシムルナクバ幸焉レヨリ
 甚ダシキハナシ

一民間地圖ノ傳ハルモノ渺シ河流ノ變化等凡ベテ地理上ノ沿革ハ全ク
 冥瞭ノ中ニ存ゼリ編者若シ地質學ニ通ズレバ地質ノ調査ヨリ大凡ノ

變遷ヲ推考シ得ザルナキニアラザルモ全ク這般ノ智識ナシ而シテ莊内ノ地質ハ明治廿五年七月農商務省ニ於テ飽海郡ノ調査ヲナセシニ過ギズシテ(其成果未ダ判ラズ)川南ノ部ハ未ダ着手ヲモナサレバ他ニ之ヲ研究スルノ途ナキナリ編者ハ實ニ遺憾トナス

一本史ヲ草スルニ當リテ或ハ史料ヲ供給セラレ或ハ遺聞ヲ講話セラレ編者ノ淺見ヲ輔ケラレタル士亦尠カラズ特ニ交友中村正雄君ノ如キハ東奔西走編者ノ爲メニ史料供給ニ盡力セラレ吾ガ奥羽人類學會幹事羽柴雄輔君及飽海郡酒田町長濱藤四郎君本間惣太郎君ノ如キハ編者ノ爲メニ抄カラザル材料ヲ給セラレキ敢テ此處ニ是等ノ諸君ト巨多ノ書類ノ借覽ヲ許サレタル諸士ニ向ヒテ深ク謝スル所ナリ

明治廿五年八月

編者 識

莊内史目次

上卷

總說

第一章	考古學上ニ於ケル莊内	一頁
第二章	蝦夷人ノ住居トシテノ莊内	十五頁
第三章	和銅時代	二十一頁
第四章	寛治時代	三十三頁
第五章	鎌倉時代	三十七頁
第六章	大寶寺屋形	四十四頁
第七章	川北ノ變遷	五十四頁
第八章上	武藤義氏	五十七頁
第八章下	武藤義興—義勝附越羽合戰	六十二頁
第九章	檢地騷動—上杉領	六十五頁
第十章	最上領	六十九頁
第十一章	酒井侯入部	七十七頁
第十二章	延寶時代	八十三頁

第十三章	享保時代	八十八頁
第十四章	文化時代	九十五頁
第十五章	天保時代	百二頁
第十六章	戊辰之亂	百十頁
第十七章	明治維新	百十四頁
下卷		
第一章	大梵寺城考	百十七頁
第二章	東禪寺城考	百二十三頁
第三章	尾浦城考	百三十頁
第四章	手向橋考	百三十六頁
第五章	東田川郡廢城考一 藤島城 古郡橋 廻橋 余目城 千河原橋 遊摺部橋 宮會根橋 新井堀橋	百四十一頁
第六章	東田川郡廢城考二	百四十八頁

第七章	東田川郡廢城考三 科澤橋 三ヶ澤橋 添川橋 狩川城 清川橋 九岡城 高坂城 瀧澤橋 金谷橋 熊出橋 名川橋 田澤城 大鳥橋	百五十四頁
第八章	東田川郡廢城考四 松根城 前橋 東岩本橋 西岩本橋 越中山橋 西荒屋橋 東荒屋橋 黒川橋 勝福寺橋 松尾城 後田橋 狩谷目橋 細谷橋 赤川橋 助川橋 荒川橋 谷地橋 柳久瀬橋 和名川橋 東田川郡廢城考五	百六十二頁
第九章	平形橋 西袋橋 横山城 大淵橋 金沼橋	百七十頁

第十章 西田川郡廢城考一 百七十六頁

田川城 出張坂城 中清水城
上清水楯 神樂館 加茂楯 小
國城 小鍋城 菅野臺城 神馬
澤楯 峠ノ山楯 木俣楯

第十一章 西田川郡廢城考二 百八十二頁

關根城 大机楯 鼠ヶ關楯 葎
野楯 三瀬楯 觀音楯 廣濱楯
谷地楯^中 金山楯 高楯 今泉楯
青山楯 道寺山楯 藤澤楯

第十二章 飽海郡廢城考一 百八十七頁

大楯 平津楯 新田目楯 宮内
楯 北目楯 菅野城 吹浦館
笑輪楯 宮田楯 小服部楯 上
寺館 觀音寺城

第十三章 飽海郡廢城考二 百九十六頁

下黒川楯 芹田楯 朝日山城
砂越城 漆會根楯 檜橋楯 山
楯 山谷楯 本宮楯 進藤楯
荒川楯 盤井出館 中村楯 中
ノ俣楯 松山城 土淵楯 田尻
楯^竹 山寺楯 野澤楯 一條楯

第十四章 雜誌上 二百四頁

第十五章 雜誌下 二百十頁

第十六章 風俗說 二百十四頁

第十七章 學事說 二百十九頁

外章 吹浦神跡誌 二百三十頁

附錄

孝子 與惣兵衛 慶玉 彌右衛門 彦太郎
五郎兵衛夫妻 しげ 志田喜平治
貞女 みや 城主安兵衛ノ妻 まんこ 彌
右衛門ノ妻 久兵衛ノ妻

偉人 大館藤兵衛 藤崎藤藏

莊内史

上卷

藤山豊 編著

總說

史論

等シシ是レ地方ナリ古ヨリ英雄輩出シテ國ノ治亂興廢ニ大影響ヲ與ヘシモノアリ或ハ唯々寥寥々人後ニ踪若シテ國ノ運命ト共ニ消長シ輪截的國史ニ一ノ材料ヲモ供セザルモノアリ今夫地方ノ史料ヲ蒐集シ地方ヲ地方トシテ研究スルノ曉ニ於テハ國史ニ材料ヲ供スルト供セザルトハ敢テ問フ所ニアラズト雖モ然レモ人文變轉ノ狀態ヲ探究シテ一ノ連鎖ヲ造ラントスルニハ地理隔絶中央政府ノ脈管ト僅ニ毛細管ニ依リテ連絡ヲ通ズルガ如キ地方ニ於テハ事固ヨリ國史ニ材料ヲ得ルコト難シ安ゾ奕世沿革亂離興廢ノ中ニ輾轉シ來リシ地方ニ於テ之ガ材料ヲ求ムルヲ得ンヤ數十或ハ數百年前ノ事蹟ニ就キテハ或ハ口碑ノ據トスベキモノアルベシト雖此處ニ居住スル所ノ人民ハ葉々累々其統ヲ享ケシモノ

ニハアラズシテ彼ノ歐洲ニ於ケルガ如キ人種ノ移轉ハ何地如何ナル處ニモ是レアリシ以上ハ何ゾ其所謂口碑ナルモノヲ據トシテ過去ノ判斷ヲナスヲ得ン若夫國防場裏ノ主點トナリテ常ニ中央政府ノ注意ヲ惹キシ彼ノ九州對馬ノ如キハ地固ヨリ邊陲僻遠ナリト雖普ク世人ノ眼ヲ引キテ歷乎タル國史ニ瞭々其記事ヲ遺ス吾人其風土人文ノ沿革ヲ研究スルニ際シテ大ニ煩苦ヲ減ズベキモ然レモ日本ノ開化ハ西方ヨリ東漸シ來リ吾ガ東北地方ノ如キハ最開明ノ後驅ヲナシテ徳川幕府ト共ニ其歴史ノ曙光ヲ放チシガ如キ觀アルニ於テハ安ゾ精確ナル調査ノ其中ニ成リ立ツヲ得ン況ンヤ出羽ノ南陲ニ位シ山ニ燒キ海ニ煮テ一ノ世界ヲ形成セシ吾ガ大泉ノ莊内ヲヤ

莊内ノ形勢

吾ガ莊内ノ地タル山形縣ノ西方ニアリテ日本海ニ枕ミ出羽山脈東ヲ限リ北ヲ包ミテ鳥海ニ盡キ南ニ繞リテ山地ヲナシ中ニ發スル所ノ數多ノ川流ハ縱横ニ部内ニ流通シ多クハ莊ノ中央ニ至リ東西ニ横貫スル所ノ最上川ニ合シ相携ヘテ西海ニ入ル其河口ヲ酒田トス蓋一ノ海港ナリ要スルニ吾ガ莊内ノ地勢ハ東南北ノ三面ニ重疊スル所ノ山岳ヨリハ木材薪炭ヲ出シ是等ノ山岳ヨリ發スル所ノ數多ノ川流ハ中央ノ平野ニ灌漑

莊内ノ遺史

シテ穀類野菜ヲ供シテ餘リアルナリ只是ノミニ止ラズ西岸ヲ洗フ所ノ海水ハ實ニ魚介鹽藻ノ無盡藏ヲ開ケリ代若交通ノ繁カラザリシ時ナリセバ代若人口ノ多カラザリシ時ナリセバ實ニ這般ノ地程住ミ好キ處ハアラザリシナラム既ニ住ミ好キ地タル以上ハ何ヲ苦ンデ險惡ナル山坂ヲ越ヘ危殆ナル波濤ヲ渡リテ他ニ交通スルヲ是レセムヤ吾莊内ノ遺史ノ他ニ求ムル能ハザルハ是ヲ以テノ故ナリ然レモ此住ミ好クシテ交通ノ不便ナルヲ以テ古來政治ニ不平ヲ懷キ或ハ時論ニ容レラレズ政府ニ嫌疑ヲ受ケタル人ニシテ身ヲ仙境ニ托セムトセシモノ足ヲ此地ニ止メタル跡カラザルベシ或ハ公家ノ末裔或ハ武家ノ庶流或ハ相家ノ墳墓莊内實ニ其跡ニ乏シトセズヨシ其事ガ實說ニアラズトスルモ虛ノ現ハルハ所其中幾分カ實ノ分子ヲ合蓋スルモノナルハ諸般ノ事物ノ通情ナレハ是等ノ傳説ヲ度外視シ之ヲ抹殺シ去リテ可ナラムヤ只憾ム斷簡片紙今ヤ漸ク亂離ヲ極メテ之ヲ考證スルニヨシナキノミ否管ニ考證ノ材料ヲ缺如スルノミナラズ實ニ其傳説ノ徒ニ口碑ニ唱和セララル、ニ止マルヲ如何セム今若古紙堆裏ニ片簡ヲ求メテ之ガ點綴ノ繁ヲ厭ハズハ吾ガ莊内ト雖史料ノ材料ニハ豊富ナリト云フベキモ然レモ慶長以前ノ記事

ノ如キハ眼前ノ憑證一モナクシテ史料批評ノ眼ヲ以テ觀察スベキモノナキヲ如何セム博眼達識ナル坂尾氏ハ莊内ノ群書類聚ヲ作り大泉叢誌ナルモノヲ編成シ置キテ大ニ吾人後學者ニ利便ヲ與フト雖今執リテ些細ニ之ヲ批評セバ概テ皆後世ニナリタルモノナリ而シテ爾時存在シテ著者自ラ之ヲ檢閲セシテフ材料モ現時殆ト支離滅裂大ニ之ヲ得ルニ窮セリ加之眞偽疑惑ノ中ニ於テ點々散在セル材料ヲ蒐集シ眞偽ノ證明ヲナサムトスルモ何ノ時代ニ於テ何ノ處ニ之ヲ唱ヘ始メタルヤヲ知ラズ已ムコトナクンバ國史ニ據ラムカ國史ニ於テハ只天災地變ヲ記シテ殆ト全ク事ノ連絡ヲ發見スルコト能ハザルナリ嗚呼未來ヲ豫想シ能ハザルガ如ク過去ヲ探究スルコトモ亦容易ノ業ニハアラズ吾人僅カ數十年前ノ出來事ヲ研究スルニモ尙異說百端ナルヲ認ムルニ於テハ數百千年ノ穿鑿ハ如何ニ至難ナルカヲ悟了スルヲ得ム修史ノ業亦容易ノコトニハアラザルナリ

第一章 考古學上ニ於ケル莊内

考古學

地質

正當ニ考古學ナル文字ヲ解釋シテ之ガ定義ヲ作ルニ於テハ現時ヨリ以前ハ皆之ガ範圍ニ屬スト雖モ普通ノ稱呼ニ從ヘバ原史以前即チ人類學研究ノ範圍内ヲ以テ之ガ領分トナスガ如シ然ラバ耶吾人修史ニ志スモノニ於テハ考古學ノ必要ナク總テ之ヲ人類學者ノ握中ニ放任シテ可ナリ況ンヤ原史以前ノ考古學ニ就テハ一局部ノ穿鑿ニテ之ヲ満足セシムルコト能ハザルニ於テオヤ太古ニ於ケル人類ノ變遷ト現時ニ於ケル野蠻人ノ生活トヲ比較對照シテ眼前ノ認證ヲ作ラザルベカラズ今此處ニ考古學上ヨリ莊内ヲ記述セムトスルハ其梗概ニ止メザルヲ得ズ

吾莊内ノ地タル彌彦火山脈系ト出羽火山脈系トノ間ニ孕マレ大部ハ近古紀沖積層ノ重疊ヨリナルト雖モ間々太古紀ニ於ケル煤層ノ露出スルアリ又所々山麓ニ沿フテ鍍泉温泉ノ涌出スルヲ認ム固ト我日本ハ亞細亞大陸ニ屬スル陸島ナレバ遠洋中ニ噴出シタル火山島ト異ナリテ地殼ノ發達自然ノ階段ヲ蹈ミ來ルガ如シ今莊内ニ産スル礫石ノ種類ヲ探究セバ其數饒多ナレバ太古第四紀以前ノモノヲ見ザルガ如シ然リ而シテ

人種ノ分布

西方高館山ノ内側ト東方月山ノ内側トニ海中ニ生存スル介類ノ化石ヲ認メ東田川郡黒川村ノ東方大峯ノ半腹ハ一面近古紀鮮生系ニ屬スル泥砂岩ヨリ成リテ中部一面沖積層ヨリ成ルヲ見レバ或ハ莊内ノ原野一面ハ昔時海洋ナリシモ幾多年處ヲ經ルニ從ヒ遂ニ一帯原野ヲ成生スルニ至リシナラムカ地史ノ發達ハ暫ク措キテ既ニ人類ノ生活ヲナシ來リシヨリ以來此地地方ニ如何ナル人種ガ住居シタルカヲ究メン

神武紀元ノ頃ニ於テ吾日本ニ於ケル人種分布ノ狀況ヲ探究スレバ常陸及越後ノ中部以北ハ概シテ蝦夷人ノ住居シタルモノ、如シ其後次第ニ今ノ日本人ノ爲メニ追ヒマクラレテ今ハ北海道ノ山地ニ其蹟ヲ止ムルノミトナレリ然レモ以前ヨリシテ蝦夷人ガ住居シタルヤ否ヤ學者ノ說ニヨレバ蝦夷人種ナルモノハ北方ヨリ侵入シ來リテ内地ニ蔓延セムトセシモ西方ヨリ跋扈シ來リシ日本人ニ追ヒマクラレテ遂ニ其蹟ヲ縮ムルニ至リシナリ其以前ニ本土一面ニ繁殖シ居リタル人種アリ之ヲ土蜘蛛又ハ國栖トモ又ハ狗腰トモ云ヒ之レ即チ日本ノ土蕃ニシテ所謂穴居ノ土民ナリ此土民ハ遠ク北部ニ蔓延セシガ北方ヨリハ蝦夷人ニ攻メラレ西方ヨリハ日本人ニ攻メラレテ遂ニ全ク其蹟ヲ斷ツニ至リシナリ

穴居

大峯ノ横穴

其穴居ノ狀態ヲ究ムルニ概シテ海岸又ハ河岸ナリシト覺フル山ノ半腹ニ横穴ヲ穿チテ四五相集リ又ハ數十部落ヲナシ晝ハ出デ、山海ヲ涉獵シ夜ハ入リテ穴内ニ寢臥ス食料ハ山野ノ果實海岸ノ魚介ニシテ用ヒシ所ノモノハ土器石器ナリ火食ノ法ハ未ダ之レアラザリシガ如シト之ハ即チ土蜘蛛社會ノ概況ナリ北海道ニモ亦穴居ノ遺跡アリ然レモ内地ノ穴居ト全ク異ニシテ地面ニ窟穴ヲ穿チテ居住シタルナリ學者之ヲ内地ノ土蜘蛛ト全ク別人種ト認メテ蝦夷人ヨリ以前ニ居住シタル「ゴロボク」トナス然レモ其遺跡ハ北海道ノ中部以北ニ限レルガ如シト云フ

莊内ニモ亦穴居ノ遺跡アリ即チ世ニ云フ所ノ横穴ニシテ土蜘蛛人種ノ住居ナリシガ如シ其穴口ノ方向南ヨリ東南ニ向フガ通例ナレモ此處ニアル處ノモノハ東北ヨリ北ニ向ヒ又其近傍ニ介城ノ存在スルヲ例トナセドモ此處ニアル處ノモノハ未ダ是等ノ探究ヲナセシコトナク而シテ其内部ノ結構ニ於テ少シク異ナル處アルモ蓋シ穴居ノ遺跡ニ相違ナキナリ余明治二十二年中之ガ探究ヲ遂ゲタリ記アリ

羽前國西田川郡鶴ヶ岡ノ東南凡四里餘ノ山中ニ(月山ノ西麓)寶谷ト稱スル小村落アリ其東方十餘町ヲ隔ツル所ニ大峯ト名クル一峯アリ其頂敢

テ高キニアラザルモ大梵字川ノ東岸黒川村寶谷ヲ去ル一里九丁餘ヨリ漸次山又山ニ連レルガ故ニ可ナリノ深山ニシテ此邊ヲ通行スルモノハ只樵夫牧童ノミ

抑莊内ノ地タル古ヨリ石鍬石具ヲ出シ石器時代ノ痕跡瞭々徴スベキモ未ダ横穴ノ存スルヲ耳ニセザリキ此頃フト或人ノ話シニヨリ大峯山腹ニ人穴ナルモノアルヲ聞知シ好奇ノ念禁シ難ク遂ニ今回ノ探究ヲ想起セシメタリ

此人穴(即横穴)ノ存スル所ハ只大峯ノミニアラズシテ寶谷村ノ東北ニ一箇所穴數七同村ノ西ニ一箇所穴數二アレモ今回ノ探究ヲ遂ゲシハ只大峯ノモノノミナリ其横穴ノ存スル所ハ山ノ中部ヨリ少シク下ニシテ其數七箇アリ十二間ノ間ニ並列シ穴口ハ山雜ニ沿フテ東北ヨリ北ニ向ヘリ穴前大凡三尺ノ間ハ平坦ナレモ以外ハ斷岸削ルガ如ク四五十尺ノ下ハ深々タル溪谷ニシテ清水潺々トシテ流ル今其七箇ノ横穴ヲ東南ヨリ叙シ來レハ

- 第一、 前部七分通り類境セリ
- 第二、 口部少シクカケ第三トノ隔壁方二尺位ノ處破壊シ居レリ

第三、 先ツ完全ナルモノハコレノミナリ此ノ穴以前ニ行者ノ籠リ居リタルコトアリト土人ハ云ヘリ尙下ニ詳述スベシ

第四、 穴内尤壯大他ノ諸穴ヨリ一層高地位ヲ取ル後壁及右側ノ後部ヲ除クノ外壤類シ居レリ

第五、第六、 ハ全ク破壊シ只其痕跡ヲ止ムルノミ

第七、 前部全ク破壊シ後部ノ上方少シク存ス

既ニカク大塊セシモノナレバ各穴ノ詳細ヲ調査スルコト能ハズト雖モ其殘部ニヨリテ之ヲ推究スレバ大抵同一構造ノモノニシテ只其大小廣袤ヲ異ニスルノミ故ニ今其最完備セル第三ノモノニ就テ詳述セバ餘ハ類推セラルベシト信ズ殊ニコレヲノ穴ノ最モ奇ナルハ後壁ニ於テ上方ニ直立シ上部ニ至リテ少シク曲折セル圓筒ヲ切半セシ如キ深穴ヲ認メシコトナリ

今第三穴ノ床ヲ圖解セバ殆ト第一圖ノ如キ形ヲ有ス

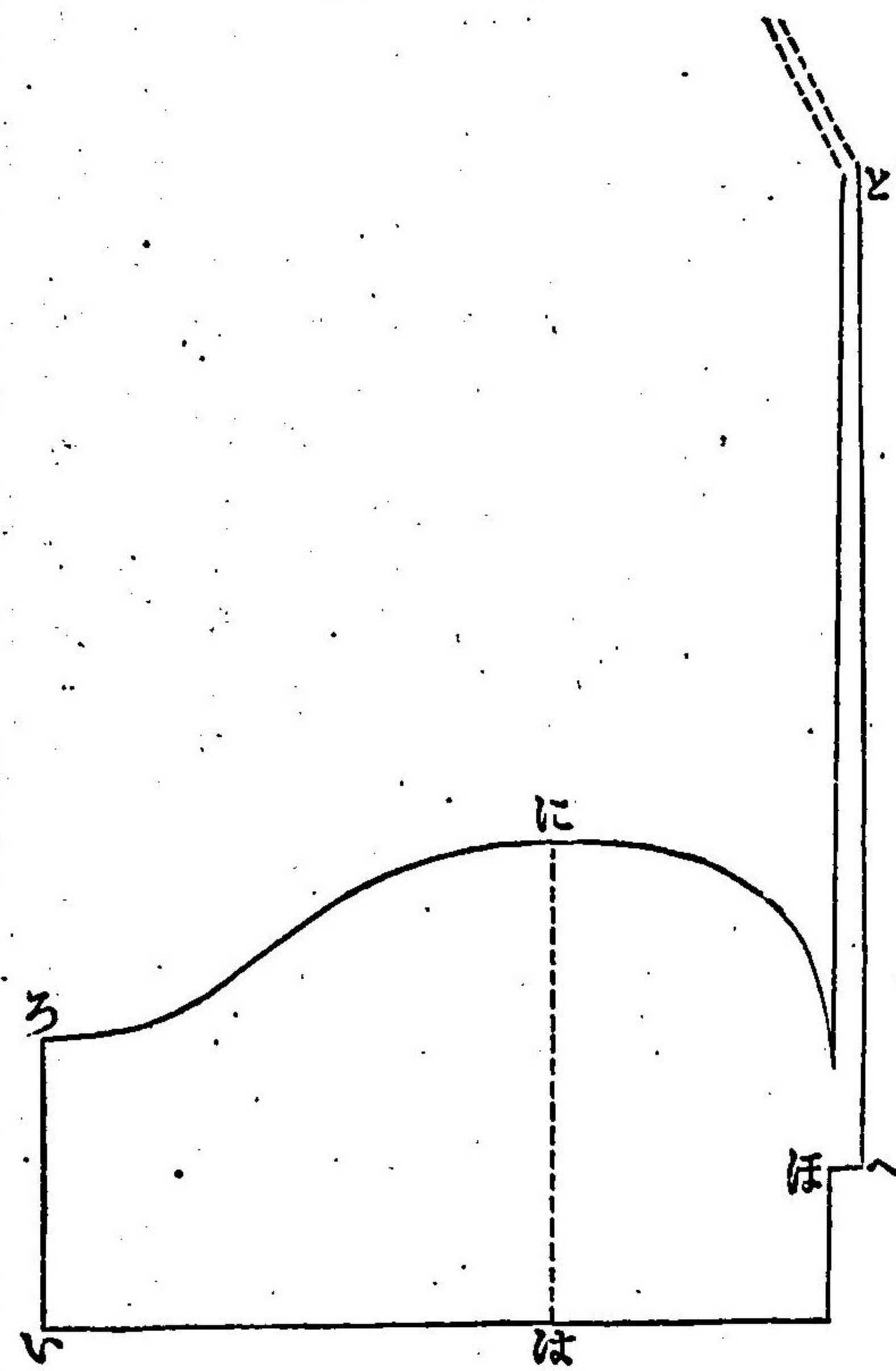
之ヲ前面ヨリ望メバ第二圖ノ如クニシテ後方ニ現ハルハ即チ半圓筒ノ直立穴ナリ第三圖ハ即チ縦截圖ナリ

此邊ノ土質一圓灰鼠色ニシテ少シク淡褐色ヲ帯ビ抓搔シ易キ脆土ヨリ

東田川郡寶谷村之内大嶺穴
全圖

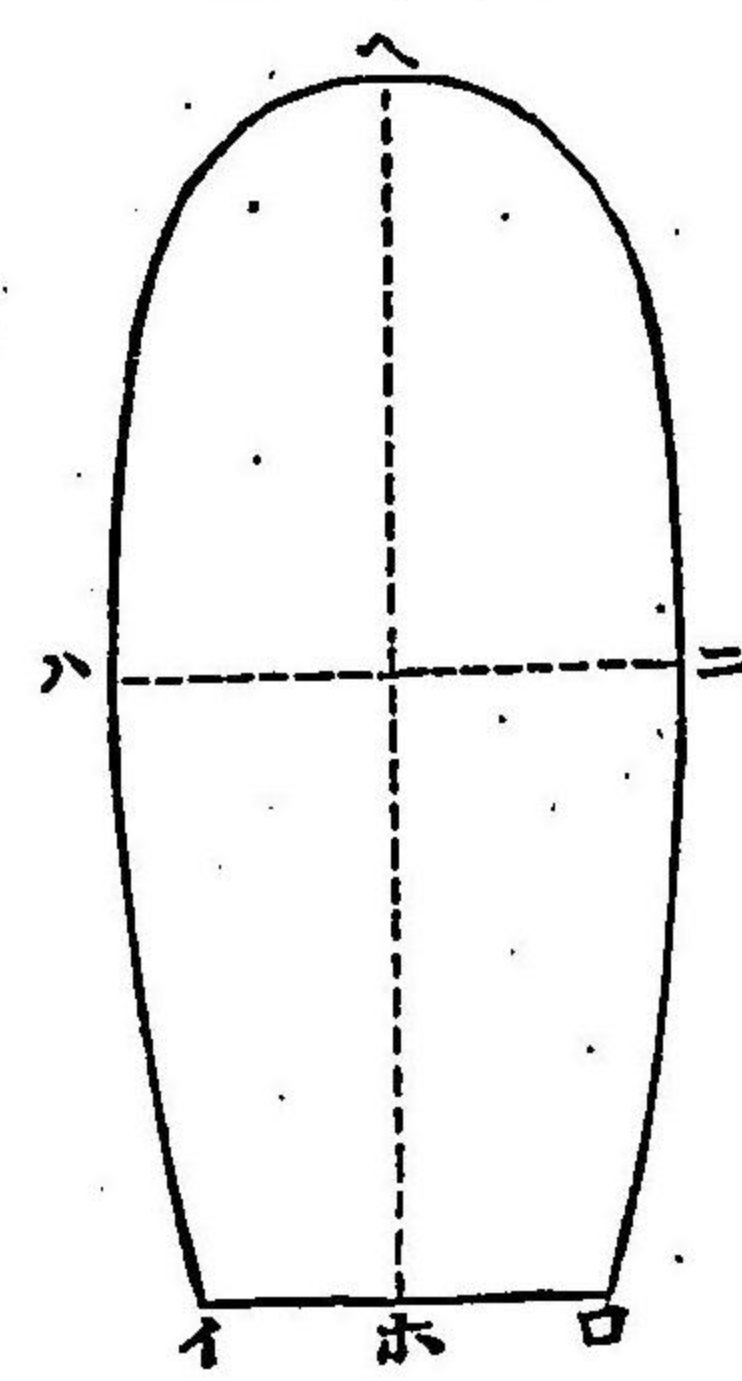


第三圖



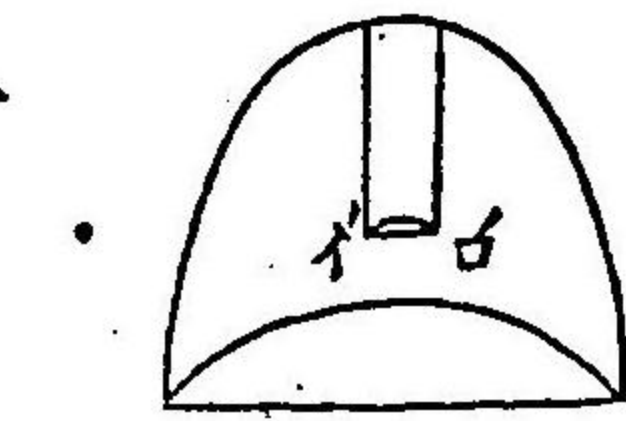
いる..... 丈尺 寸 〇
 はに..... 五 五
 はへ..... 七 〇
 へさ..... 六 〇

第一圖



寸 〇
 丈尺 三
 五 四
 三 〇

第二圖



寸 二
 尺 一
 一 〇
 底ノ穴立直
 寸 四

成リ即チ鮮生系ニ屬スル泥砂岩ニシテ直立穴内ハ上部ヨリ滴リ來ル雨露ニ沾フサレテ厚サ寸餘モアルベキ蘚苔ニ被フハレタリ
 第三穴ノ構造大略斯ノ如シ土人ノ傳フル所ニヨレバ後壁ニアル處ノ直立穴ハ浪人(土人)ハ此穴ヲ以テ浪人ノ住居セシ所ナリト云フノ棺ヲ置キシ處ナリ故ニ之ヲ棺穴ト云フト豈夫レ然ラムヤ斯ノ如キ狹隘ナル穴内ノ後壁ニ直立穴ヲ穿チテ直條ナル棺ヲ置クコトハ能ハザルナリ然ラバ此直立穴ハ果シテ何ノ用ヲナセシモノナルカ余ハ信ズ此穴ノ上部今ヤ樹木茂リ磐根錯節之ヲ穿タムトスルモ尙且困難ナルモ然レモ其以前ハ必定上部ニ小口ヲ有セシナルベク而シテ其後壁ノ蘚苔ヲ剝ギ去レバ一面燒ケ固リ黑色炭烟ノ附着スル等ヨリ推究スレバ之ハ是レ暖ヲトリ又ハ火食ノ用ニ供セシ所ノ爐象烟突ナルベシ蓋シ此縱穴ハ從來發見セラレタル横穴ノ多キニ拘ハラズ未ダ曾テ聞キ當ラザル所ノモノニシテ最モ探究ヲ要スベキ所ノモノナリ
 蓋シ穴居時代ニ於テ火食ノ法アリシヤ否ヤハ學者間ノ論争ニシテ未ダ何レモ歸着スル所アラザレバ今ヤ匆卒ニ之ヲ斷定スルハ少シク早計ニ屬スル所ニシテ或ハ此遺蹟ハ穴居時代ノ痕跡ニアラズト推論スル人モ

断案

穴居ニ就テ學者ノ説

アルベク余モ直立穴ニ就テハ幾分カ其感ナキニアラザルモ然レモ此邊ノ地質沖積層ヨリナリテ其山麓ハ舊火成岩ノ重疊ヨリナレルヲ見レバ中古紀以前ハ此山麓迄海水ノ浸入セシハ疑フベカラズ地理上ヨリ云ヘバ穴居ノ遺蹟アルベキハ至當ナルベク而シテ人類學ヲ以テ有名ナル羽柴雄輔氏ハ其後之ガ探究ヲナシテ穴居ノ遺蹟ト斷定セラレ加之穴居時代ニ於テ火食ノ法アリシ眼前ノ認證ナリトテ沿ク江湖ニ告ゲラレタリ只此横穴ノミナラス穴居時代ノ遺物ハ莊内地方各處ニ存在セリ日本ニ於テ始メテ介墟ヲ發見セシハもうるす氏ニシテ始メテ探究セシハ武藏國大森ナリ氏ハ其介墟ノ中ニ幾多ノ石器土器ヲ發見シ即チ斷定ヲ下シテ曰ク介墟ヲ造リシモノハ穴居人民即チ土蜘蛛ニシテ石磯土瓶素燒等ハ土蜘蛛ノ使用セシ器物ナリトみるん氏ハ之ニ反對シテ介墟ハ蝦夷人ノ遺物ニシテ石器土器ハ蝦夷人ノ器皿ナリト云ヘリ然レモ現時ニ於テハ學者ノ議論一定シテもうるす氏ノ説ニ歸着セルガ如シ然ラバ即チ矢ノ根石天狗ノ飯匙又ハ石斧等ノ發見セラル、地方ハ土蜘蛛人種ノ居住セシ所ナリト斷定シテ不可ナカルベシ吾地方ニ於テ西海岸ノ丘陵國史ニ田川郡又ハ飽海郡ノ西濱ト稱スルモノ、鳥海山麓、西田川郡岡山村、同井

石器土器

岡村等ハ矢ノ根石、天狗ノ飯匙、石斧或ハ雷斧ヲ出シ穴居時代ノ痕跡瞭々トシテ明カナリ坪井正五郎氏ハ石器ヲ分チテ史前考古學即人類學ノ材料ト原史考古學即人類學及史學ノ材料トノ二種ニ分チ甲ニ屬スルモノヲ矢ノ根石、天狗ノ飯匙及雷斧等トシ乙ニ屬スルモノヲ曲玉、管玉等トス其細工ノ精粗ト人智ノ發達トヲ對照シテ之ガ時代ヲ造リシナリ蓋シ坪井氏ハ矢ノ根石等ヲ以テ武器ニ供セシモノトナシ曲玉及管玉ヲ以テ主ニ飾具ニ供セシモノトナセリ其構造ノ概形ヨリ見ルモ曲玉及管玉ハ幾多ノ意匠ヲ積ミテ出來セシモノタルハ明カニシテ貝塚ノ中又ハ其近傍ニ發見セラル、コトハ殆トナク主ニ古墳ノ中ヨリ得ラル、ナリみるん氏ハ云ヘリ現時ニ於ケル蝦夷人種ハ曲玉及管玉ヲ以テ飾具ニ供シ居ルト雖モ古來ヨリ然リシニアラズ其日本人トノ交通ヲ始メシヨリ日本人今井貞吉氏ハ古泉學ヲ以テ有名ナリ氏ハ嘗テ書ヲ著ハシテ矢ノ根石、曲玉及管玉ノ共ニ通貨ナリシヲ論ゼラレシモ一般ニ唱和セラレザルガ如シ之ヲ要スルニ矢ノ根石、天狗ノ飯匙、石斧、雷斧等ハ穴居土人即チ土蜘蛛人種ノ使用セシモノニシテ間々粘土ヲ以テ製シタル粗造ノ土器ヲ用

蝦夷人

ヒシモ曲玉、管玉、祝部及埴部ノ土器ハ吾日本人ノ祖先ノ使用セシ具ナリ蝦夷人ハ痕跡ヲ留メザル人種ナリ其使用スル器物ハ石器モアリ土器モアレモ太古ヨリ穴居ノ蹟ヲ見ズ又現今使用シ居ル所ノ器物ハ太古ヨリ使用セシモノ甚ダ尠クシテ其日本人ト交通ヲ始メシヨリ用ヒ來リシモノ多ケレバ太古此地方ニ當時ノ所謂わいぬ人ガ生活シテ一般ニ之ヲ蝦夷人ト云ヒシコトハ書籍上ヨリ之ヲ引證スル外能ハザルナリ諸フ次章ニ於テ其變遷ヲ説ガム

蝦夷人ノ風俗

第二章 蝦夷人ノ住居トシテノ莊内

景行天皇武内宿禰ヲシテ北陸及東方諸國ノ地形ト人情ヲ察セシム宿禰還リ奏シテ曰ク東夷之中ニ日高見ノ國アリ其國人男女並ニ椎結文身シ人ト爲リ勇悍是ヲ總ベテ蝦夷ト曰フト又天皇日本武尊ヲシテ東夷ヲ征セシムルニ當リテ斧鉞ヲ授ケテ勅シテ曰ク東夷之中ニ蝦夷是レ尤モ強シ焉男女交リ居テ父子ノ別無ク冬ハ則チ穴ニ宿シ夏ハ則チ櫛ニ住ム毛ヲ衣血ヲ飲ミ昆弟相疑ガヒ山ニ登ルコト飛禽ノ如ク草ヲ行クコト走獸ノ如シ恩ヲ承ルモ則チ忘レ怨ヲ見レバ必ズ報フ是ヲ以テ箭ヲ頭髻ニ藏

蝦夷ノ種類

シ刀ヲ衣中ニ佩ブ或ハ黨類ヲ聚メテ而シテ邊界ヲ犯シ或ハ農桑ヲ伺フテ以テ人民ヲ略シ撃テハ則チ草ニ隱レ追ヘバ則チ山ニ入ル故ニ往古以來未ダ王化ニ染マズト又齊明帝ノ代坂合部連石布等ヲ唐ニ遣シ陸道與蝦夷男女二人ヲ以テ之ニ示ス唐ノ天子問フテ曰ク此等蝦夷國何方ニ在リヤ使人答ヘテ曰ク國東北ニ在リ曰ク蝦夷幾種ナルヤ答ヘテ曰ク類三種有リ遠キ者ヲ都加留ト名ケ次グ者ハ龜蝦夷近キ者ハ熟蝦夷ト名ク今此熟蝦夷ハ每歲本國之朝ニ入貢ス曰ク其國五穀有リヤ答ヘテ曰ク之レ無シ肉ヲ食ヒテ存活ス曰ク國屋舍アリヤ答ヘテ曰ク之レ無シ深山之中ニ樹之本ニ止住ス曰ク朕蝦夷身面之異ヲ見テ極理テ喜怪ス使人遠ク來リ辛苦ナラム退テ館裏ニ在レ後更ニ相見ムト是等諸他ノ記述ニヨリテ當時所謂蝦夷ハ如何ナル人種ナルヤヲ想像シ得ベクシテ而シテ今ノ北海道ニ住スルハいぬハ實ニ其子孫タルヲ知ラム蓋シ蝦夷人ガ穴居ノ土蜘蛛ヲ追ヒ却ケテ以テ本土ニ居ヲ占メシハ何レノ時代ニアルヤヲ考フヘカラサルナリ或ハ日本人種ガ蝦夷人ヲ討平シタル其初メハ熟夷ト呼ビ田夷ト呼ビ細養ト呼ビ俘囚ト呼ビテ雜居シタリシモ歲ヲ追フニ隨ヒ本土遂ニ蝦夷人ノ血漿ヲ遺サハルニ至リシ如ク土蜘蛛モ其初メ蝦夷人

蝦夷征伐

ニ侵入セラル、ヤ實ニ道般ノ却歩ヲナシタリシナラムカ
 上古ニ於テ陸奥ニ住セシ蝦夷ヲ東蝦夷ト云ヒ越ニ住セシ蝦夷ヲ北蝦夷ト云フ崇神天皇ノ朝ニ於テ四道將軍ヲ置キテ是等戎夷ヲ討平セシメシ時ニ於テハ未ダ陸越ノ北端ニハ及バザリシナリ降リテ武内巡視ノ時ハ陸奥ノ南端ニ止リテ日本武尊ノ東征シ歸路信濃ノ國ヨリ吉備武彥ヲ派遣シテ越ノ國ノ地理ト人情ヲ察セシメシトキモ今ノ越後ノ中部以西ニ限リタルガ如シ然ラバ即チ成務天皇ノ國郡縣邑ヲ定メラレシトキモ越後ノ中部ヨリ常陸ノ北端ニ一線ヲ劃シ是ヨリ以北ハ外夷トシテ中區ノ中ニハ列セラレザリシナラム爾後或ハ彦狹島(景行)ヲ遣シ田道將軍(雄仁)ヲ送リ近江巨瀨阿部臣(崇峻)等ヲ東山北陸等ニ遣シテ國境ヲ見セシメシ時ニ於テモ未ダ蝦夷ノ内地ニ入ルコト能ハズ蓋シ崇神景行以後蝦夷ノ内附スルモノ次第ニ増加シ來リ應神天皇ノ朝ニハ東蝦夷悉ク朝貢ス即チ蝦夷ヲ役ヒテ厩坂ノ道ヲ作ル然レモ叛服常無ク田道ハ之ガ爲ニ伊寺水門(總國)ニ殺サレ上毛野君形名ハ陸奥ニ宥メラル皇極天皇元年越邊蝦夷數千内附ス孝德天皇大化元年東國等ノ國司ヲ召シ詔ノ中ニ曰ハク邊國近ク蝦夷ト境ヲ接スルノ處ハ盡ク其兵ヲ數ヘ集メテ猶本主ニ假ス

越蝦夷

秋田蝦夷

断案

可シト其邊要ヲ警メテナリ其四年磐舟ノ柵ヲ治メテ以テ蝦夷ニ備フ遂ニ越ト信濃トノ民ヲ選ビテ始メテ柵戸ヲ置ク磐舟ハ今ノ越後國ノ岩船ニシテ當時此處ニ柵ヲ設ケテ以テ蝦夷ニ備フルヲ見レバ是レヨリ以北ハ蝦夷ノ巢窟ニシテ齊明天皇ノ元年難波朝ニ於テ北蝦夷九十九人東蝦夷九十五人ヲ饗シ柵養（養フモノ）蝦夷九人津刈蝦夷六人ニ各二階ヲ與ヘ同天皇ノ四年ニ阿部臣（番紀ニ名ヲ阿部）船師一百八十艘ヲ率ヒテ蝦夷ヲ伐ツ齋田淳代（淳代）二郡蝦夷望ミ怖レテ降ヲ乞フ是ニ於テ軍ヲ勒シテ齋田ノ浦ニ陣ス齋田ノ蝦夷恩荷誓テ曰ク官軍ノ爲メノ故ニ弓矢ヲ持タズ但ダ奴等性肉ヲ食スノ故ニ持ツ若シ官軍ノ爲メニ以テ弓矢ヲ儲ヘバ齋田浦ノ神知ラム矣清白ノ心ヲ將ツテ朝ニ仕官セム矣ト仍テ恩荷ニ授クルニ小乙上位ノ名ヲ以テシ淳代津輕二郡ノ郡領ト定ムト云フニ至リテ漸次内附ノ状態ヲ表ハシ來リシナリ

之ヲ國史ニ考ヘ逸史ニ徵スルモ吾羽前ノ國ニ於ケル蝦夷ノ記述ハ殆ト之ヲ缺如セリ若シ三代實錄阿倍比羅夫ガ再ビ蝦夷ヲ討ズルヤ飽田淳代津輕等ノ蝦夷ヲ簡集シ肉入籠ニ至リシトキ比羅夫ニ進言シテ後方羊蹄ヲ以テ政所ト爲スベシト云ヒシ間菟蝦夷膽鹿嶋菟穗名二人ヲ以テ類聚

抄ニ出羽國村山郡ニ徳有アリト云フニヨリテ之ヲ吾地方ノ蝦夷ナリシトセバ此時既ニ此地方ハ熟夷或ハ柵養トナリテ國守ノ部下ニ懐柔セシモノナルベシ若シ然ラズトセバ此時越ノ國ノ國守ナル阿倍臣比羅夫ガ此越ノ地方ヲ見逃ガシテ直チニ秋田ニ航スルノ理アラムヤ或ハ曰ハム越後磐舟ニ柵ヲ築キテ以テ蝦夷ニ備ヘシハ孝徳天皇ノ大化四年ニシテ阿倍臣ノ初メテ秋田ニ至リテ在住ノ蝦夷人ヲ討平セシハ齊明天皇ノ四年ニ在リ其間歳ヲ經ルコト九史上別ニ征夷ノ記事ヲ見ズ只之レアルハ齊明天皇ノ元年北蝦夷及東蝦夷ヲ饗シ仍テ柵養蝦夷九人津刈蝦夷六人ニ冠各二階ヲ授クトアルノミ未ダ知ラズ秋田ト越後トノ間ノ蝦夷ガ王化ニ澤ヒタリトハ阿倍臣ノ海路ヲ秋田ニ取リシハ舟楫ノ便或ハ今ノ飽海田河ノ沿岸ニ船ヲ寄スベキ處ナキニアラザルナキカト是レ蓋シ皮相ノ見ノミ邊要ニ築キテ以テ蝦夷ニ備ヘシハ決シテ支那ニ於ケル萬里ノ長城ノ如ク直ニ境ヲ接セシ所ノミ設ケシニアラズ彼ノ陸奥國多賀柵ハ明カニ蝦夷國界ヲ去ルコト百二十里六十一里ヲ改算スレバ當今ノ二十里ト書シアルニアラズヤ船ヲ寄スベキ港灣ナカリシトハ特ニ非ナリ此後此地ニテモ非常ナル天變地異アリシトモ思ハレズ此邊沿海ノ地方ハ決シ

テ一時ノ震災等ニテ急劇ニ形相ヲ更ヘシ地質ニアラズシテ清和天皇ノ頃渡島蝦夷秋田飽海ヲ犯シ百姓ヲ掠メ去リタルコトアリタルニ於テハ豈當時船ヲ舶スベキ港灣ナキコトアラムヤ加之磐舟柵ヲ造リシ前年陸奥國ニ淳足柵(或ハ日ク淳足ハ今ノ越後國沼垂ナリト)ヲ造レリ此柵ヲ以テ名取郡ニアリシモノトセバ阿倍比羅夫ノ遠征ハ前門ヲ措キテ後門ニ向フノ理アラム易ヲ棄テ、難ニ赴クノ理アラム而シテ殊ニ領國ノ悖亂ヲ放擲シテ他國討平ニ赴クベキ理アラムヤ然レ共莊内ハ未タ蝦夷ノ巢窟タリシニ相違ナキナリ既ニ蝦夷ノ巢窟タリシニ於テハ其服従モ眞ノ服従ニアラズシテ其平穩モ眞ノ平穩ニハアラザルナリ夫レ人種ノ雜居ヨリ生ズル所ノ生存競争ハ干戈ヲ見ザルニ於テ到底休止スルモノニアラズシテ此時次第ニ莊内地方ニ越信濃等ノ人種雜居シ來リ人情相反スルニ於テ智力ノ發達シ居リタル日本人ハ劣等ナル蝦夷ヲ壓倒セムトスルハ勢ノ免ルベカラザル所ナリ既ニ然リ當時ノ蝦夷ノ數ガ現時ノ北海道ニ於ケルハいぬノ如ク甚寡少ナレバ到底日本人ト匹敵スルコト能ハザリシナルベキモ案外ニ多數ナレバ齊明天智ノ頃ニ至リテ柔順ナリシ蝦夷モ再ビ猖獗ヲ極メ遂ニ元明ノ時ニ及ビテ佐伯石湯ヲ征越後蝦夷將軍トナシ近國ノ兵ヲ召集シテ討平セザ

ルベカラザルノ已ムヲ得ザルニ至レリ此時ニ於テ出羽ノ蝦夷ハ大半勦滅追却セラレ尾張上野信濃越後ノ民二百戸ヲ出羽ニ徙シテ以テ柵戸トナシタリシナリ

第三章 和銅時代

三韓ト蝦夷

上古以來國家ノ煩ヲナセシモノハ實ニ三韓ト蝦夷トナリ三韓ハ固トコレ外藩ニシテ之ヲ度外視セバ敢テ國家ノ煩累ヲナサズト雖モ蝦夷ニ於テハ然ラズ其勢甚ダ猖獗ヲ極メ官軍屢戰ツテ利アラザルモ然レモ厭ク迄モ之ガ討平ニ鞅掌セザルベカラザルナリ故ニ中古以前三韓事無キノ日ハ力ヲ蝦夷ニ盡シ蝦夷事無キノ日ハ力ヲ三韓ニ致ス東伐西討實ニ干戈ニ餘事ナカリシナリ今ヤ和銅時代ノ莊内ヲ叙セントスルモ蝦夷ヲ以テ根據トセザルベカラズ是レ蓋シ當時ノ東北ハ實ニ日本人ト蝦夷人トノ競争場裏ニシテ相争フ中原ノ鹿タリシガ故ナリ

蝦夷郡領

固ト越ノ國ト云ヒ又ハ越ノ蝦夷ト云フ其國郡ノ境界ハ未ダ決シテ判然タル際涯アラズシテ其終ル處モ知ラレザリシナリ只征戰ヲナシ地方ヲ討平スル際ニ於テ其柔服シタル處ニ郡領ヲ置キタルニ過ギズ齊明ノ四

出羽郡

年阿倍臣ガ阿倍田淳代ヲ征スルヤ淳代津輕等ノ郡領ヲ定メ同五年後方羊蹄ヲ征シ此處ニ又郡領ヲ置ク(田口卯吉先生ハ後方羊蹄ヲ以テ今ノ北海道ナルベシト云フ新井白石先生モ北海道ニ然レモ未ダ秋田以南ニハ之ヲ置カレタルヲ見ズ元明天皇和銅元年九月越後國言新ニ出羽郡ヲ建テムト之ヲ許ス即チ此時ハ吾莊内ニ郡領ノ起リシ始メニシテ蓋シ部内概シテ出羽郡ノ管領タリシナルベシ其限界ノ如キモ河海山岳ヲ限リテ劃然タル區域ヲ附セシモノニハアラズ只無事ヲ誠メ不遜ヲ征スルノ郡府タリシコトハ國史ニ照シテ瞭カナリ同五年九月太政官奏ノ曰ク國ヲ建テ驅ヲ辟クハ武功ノ貴ブ所官ヲ設ケ民ヲ撫スルハ文教ノ崇ブ所其ノ北道ノ蝦狄遠ク阻險ニ憑リ實ニ狂心ヲ縱ニシ屢邊境ヲ驚カス官軍雷聲シ凶賊ノ霧消シテヨリ狄部晏然皇民擾ル、無シ誠ニ望ムラクハ便チ時機ニ乘ジテ遂ニ一國ヲ置キ式シテ司宰ヲ樹テ永ク百姓ヲ鎮セムト奏ス之ヲ可トス是ニ於テ始メテ出羽國ヲ置ク十月陸奥國最上置賜二郡ヲ割イテ出羽國ニ隸ク焉以テ調庸ノ法ヲ定メ一國ノ資格ニ列セリ然レモ戸口甚ダ寡少ナレバ和銅七年ニハ尾張上野信濃越後等國民二百戸ヲ割キテ出羽郡戸ニ配シ元正天皇靈龜二年巨勢萬呂言フ出羽國ヲ建テ、ヨリ已ニ數

出羽國

出羽

年ヲ經レモ吏民稀少ニシテ狄徒未ダ馴レズ其地膏腴田野廣寬ナリ請フ隨近ノ國民ヲシテ出羽國ニ遷シ狄徒ヲ教諭シ兼テ地利ヲ保タシムベシト之ヲ許ス因テ陸奥(陸奥國ニナラカハ)置賜最上二郡及信濃上野越前越後四國百姓各百戸ヲ以テ出羽國ニ隸ク從四位下太朝臣麻呂ヲ以テ氏長トナス其後近國ノ民或ハ百戸或ハ二百戸ヲ遷シテ出羽郡ニ配スルコト數々ニシテ主トシテ戸口ヲ増殖スルニ從事セシモノ、如シ此頃ノ出羽郡ハ秋田城ニアリシナリ聖武天皇天平九年陸奥按察使大野東人等言フ(此頃出羽陸奥ニ隸セリ)陸奥國ヨリ出羽郡ニ遠スルニハ道男勝ヲ經行程迂遠請フ男勝村ヲ征シテ以テ直路ヲ通ゼムト以テ證トスベキカ而シテ蝦夷ノ雜居シテ柔順セシモノハ厚ク之ヲ待遇シ少シク暴行ヲナセバ之ヲ捕ヘ近隣ノ諸國ニ配附シテ之ヲ養ヒ置キタリシガ毎ニ是等ノ夷俘ノ凶暴ナル國司等モ之ヲ制スルコト能ハズシテ政府ニ之ガ處置ヲ請ヒタルコト屢ナリシ

出羽ト云フ名

諸國名義考ニ和名鈔ヲ引キテ曰ハク出羽(イハハ)以天波國府在平鹿郡名義ハ越ノ道ノ尻マタ道ノ奥ナドヨリノ出端國ナルベシ云々トアリ國造本紀ニ諸羅朝御世和銅五年割陸奥越後二國始置此國也トアリサテ或書ニ引ル

出羽國府

風土記ノ文ニハ上古此地實鷲鷹之羽故曰出羽トイヘルハ字ニナヅミタルガ如クキコニト又日本事跡考ニ曰ク出羽國ハ鷲鷹ノ羽ヲ出ス故ニ名ク毎年之ヲ貢ス綴テ以テ箭括ト爲スト其他出羽ノ名義ヲ以テ大概羽ヲ出ストノ意ニ取ルガ如ク現ニ允恭ノ御代ニ羽ヲ貢セシコトアリトノ事跡ヲ引キテ之ヲ證スルモ然レモ和名鈔ノ說最モ其據ヲ得殊ニ陸奥ニ對シテモ其當ヲ得タルガ如ク考フルハ否カ

或ハ出羽ノ名義ヲ説キテ以テ出羽郡ニ及ボシ其郡名ハ出羽國ヲ置カレシト同時ニ消滅シ去リテ以テ飽海田川ノ二郡トナリシト或ハ田川郡ノ名義ヲ説キテ古ハ鷹羽郡ニテ有ヘシ後代田川ノ河水郡中ノ田畝ヲ濕スニ便ヨキヲ以テ田川郡ト唱ヘ來リシナルベシト其牽強附會モ亦實ニ極レル哉甲ハ堂々タル國史ヲ抹殺スルモノニシテ乙ハ自家撞着ノ議論ヲナスモノナリ甲ノ説ニヨレバ出羽郡ノ所領ハ國史殆ト判明セズ而シテ何レノ時代ニ消滅セシトモ知ラズ故ニ是レ或ハ誤リナラムト固ヨリ其所領判明セズ然レモ光孝天皇仁和三年出羽守坂上義樹ガ上言ニ國府ハ出羽郡井口村ニ在リ延暦年中坂上田村麻呂ノ論奏ニ據リテ建ツル所也去嘉祥三年ニ地大ニ震動シ形勢變改シ既ニ窪泥トナル加之海水漲移

シ府ニ迫ル六里所犬川崩壞シ渥ヲ去ル一町餘兩端ニ害ヲ受クト以テ見ルベシ國府ハ西方海ニ迫ラレ東方河ニ迫ラレ故ニ之ヲ移スヲ請ヒタリシヲ然ラバ出羽郡ハ海岸ニアリシニ相違ナキナリ然リ而シテ飽海郡ハ如何清和天皇貞觀十七年十一月出羽國言フ渡島ノ荒狄反叛シ水軍八十艘秋田飽海兩郡ノ百姓二十一人ヲ殺畧ス又陽成天皇元慶八年十一月出羽國飽海郡ノ海濱石ヲ雨ラス鐵ニ似タリ其鋒皆南ニ向フト又光孝天皇仁和元年田川郡由豆佐乃賣神トアリ是等前後ヲ對照シ降テ延喜式ヲ考フルニ出羽國上管最上村山置賜雄勝平鹿秋田山本飽海河邊田川出羽ト十一郡ニ分テリ若シ田川ヲ以テ出羽ノ改名ナリトセバ仁和元年ニ田川郡トアリテ其三年ニ出羽郡トアルノ理アラムヤ況ンヤ延喜ノ後代ヲヤ或ハ説ヲナシテ曰ハク出羽郡ハ鳥海山北ニハアラザルカ延喜式ニ由利郡ナシ今ノ由利郡ノ邊即チ之ガ所ニ當ル彼ノ象潟ノ地古來震動ニヨリテ變化ヲナスコト屢々ナリ仁明天皇嘉祥三年ノ大震ハ此邊象潟ノ地ヲ陥没シ海水ヲシテ國府ニ迫ラシメタルベシト然ラバ即チ坂上義樹ガ殊更ラ好ミテ雄勝秋田ノ兩城ヲ撰バズシテ最上郡保賣士野ニ之ヲ移サムト請フノ理アラザルノミカ出羽國風土記ハ一書ヲ引イテ國府ヨリ北ニ

出羽郡ノ消滅

當リテ鳥海山アリト云フノ理アラシク然リ而シテ由利地方ニハ未ダ怒漲崩壞シテ塞ヲカムル能ハザルガ如キ大川アルヲ見ズコレアルハ小吉川ノ緩流ノミ而シテ殊ニ光仁天皇寶龜十一年出羽國鎮狹將軍安倍家麻呂等ノ上言ニ對シテ報ヲ下シテ曰ハク秋田城者前代將相會議シテ建ル所ナリ之ヲ棄ルハ善計ニアラズ國司一人ヲ差使ハシ以テ專當ヲ爲セ又由利ノ柵ハ居賊ノ要害秋田之道ヲ承ク亦宜ク兵ヲシテ相助ケテ防衛セシムベシト以テ見ルベシ此時家麻呂等ハ秋田城ノ保チ難キヲ見テ之ヲ棄テントセシガ朝議許サズ殊ニ由利ノ柵ヲ守リテ國府ニ承クルノ道ヲ堅メヨト指示セシヲ是ニ於テ人或ハ出羽郡ヲ以テ今ノ西田川郡ノ北部ヲ云フト云ヒ或ハ字ニ因シテ井口ハ今ノ東田川郡ノ大梵字川ノ上流ニシテ水ヲセキ留メテ水田ノ資トナセシ所ナリシト云フ前者ハ少シク其當ヲ得タルガ如ク後者ハ全ク偏解ニ過ギズ之ヲ要スルニ出羽郡ナルモノハ田川飽海ノ間ニ孕マレ最上川ニ沿フタル郡領ナリシガ後世次第ニ出羽國ナル國號ニ避ケ又田川郡司等ガ跋扈ニ遇ヒテ遂ニ其名稱ノ消滅セシモノナルベシ

然レモ出羽國府ハ永久出羽郡ニアリシモノニハアラズシテ其後井口ノ

出羽國ノ開拓

近傍高敞ノ地ニ移シ遂ニハ平鹿郡ニ移シ又最上郡ニ移セシナリ上來既ニ説述セシガ如ク和銅五年始メテ出羽國ヲ置キ國府ヲ開キシヨリ朝政一般夷狄ヲ柔服セシメ人民ヲシテ堵ニ安ゼシメテ以テ次第ニ戶口ヲ増サムコトニ方針ヲ向ケテ近隣ノ諸國ヨリ或ハ兵器ヲ輸送シ戍兵ヲ派シ軍糧ヲ給シ元正天皇ノ頃ニハ始メテ養蠶ノ業ヲ教ヘ或ハ調稅ヲ賦シ桓武天皇延暦十八年ニ出羽國山夷錄ヲ停メ山夷田夷ヲ論ゼズ功有ルモノヲ簡ビテ賜ヒ殊ニ嵯峨天皇ノ弘仁二年ノ詔勅ニ曰ク野ヲ占メ田ヲ開クノ徒國ニ就キ地ヲ請フノ日町段ヲ顯ハサズ遠ク四至ヲ包ム公ヲ損シ民ヲ妨グルコト此ヨリ甚シキハ莫シ自今以後宜ク町段ヲ勘ヘテ四至ニ依ルコト勿ラシムベシ又陸奥出羽兩國ノ土地曠遠ニシテ居民稀少ナリ百姓浪人便ニ隨テ開墾シ國司巡檢スレバ隨テ即チ公ニ收ム是レヲ以テ人民散走シ靜心アルコト無シ宜ク兩國ノ開田公驗無シト雖モ公ニ收ムルヲ得ザラシムベシト或ハ國內ノ馬匹ヲ糶出スルヲ禁ジ或ハ田夷ニ姓ヲ賜ヒ或ハ社寺ニ位勳定額ヲ授ケ一向之ガ鎮撫ニ熱中シ當時上流ノ人ヲ選ビテ之ガ按察使トナシ時々國內ヲ巡檢セシメ功アルモノハ之ヲ賞シ罪アルモノハ之ヲ罰シ治績大ニ舉リ新開ノ地益廣マリ和銅ヨリ元慶

元慶秋田騒動

ニ至ル迄殆ト百七十年國內殆ト靜穩ナリキ然レ此時ニ於テ既ニ豪族私領ノ端緒ヲ開キ開墾ヲ務メ莊園ヲ營ミ傳世ノ謀ヲナスモノアリシハ新開地ヲ處スル政令ノ寛ナルガ爲ニ免カルベカラザリシ弊竇ナランカ陽成天皇元慶二年ヨリ同三年ニ亘リテ秋田地方大ニ擾ル蓋シ夷俘反亂シ秋田城并郡院屋舎城邊ノ民家ヲ燒損セシニ始ル是レ狄夷最後ノ叛亂ナリ國守藤原朝臣興世諸郡ノ軍ヲ徵發シテ之ニ衝ル然レ勝ツコト能ハズ援ヲ朝ニ請フ朝議即チ陸奥國ヲシテ赴キ救ハシム然レ賊軍益猖獗近傍ノ城邑皆爲メニ燒盡セラレ良民ノ捕斬セラル、モノ算ナシ上野下野越後等ノ軍兵ヲ用非尙討平スルコト能ハズ藤原保則ヲ以テ出羽權介トナシ清原合望ヲ權掾トナシ茨田眞額ヲ權大目トナシ出羽ニ發遣シ遂ニ伊勢參河遠江駿河甲斐相摸武藏下總常陸美濃信濃等十餘國ノ兵ヲ動カン大物忌神月山神ニ祈禱ヲナシ大元帥法阿闍梨傳燈大法師位龍等ヲ出羽國ニ遣シ七僧ヲ卒ヒテ降賊ノ法ヲ修メシム陸奥出羽按察使源朝臣多クハ答ヲ引イテ職ヲ辭センコトヲ請フ飛驒相望ミ民率鋤ヲ棄テ人心爲メニ恟々タリ此ノ如キモノ二年賊勢漸ク萎縮シ元慶三年六月ニ至リテ事漸ク靜穩ニ歸シ出羽國ノ兵仗ヲ増シ士民ヲ撫育シ遂ニ永ク邊防ノ患ヲ除クヲ得タリ

延喜ノ代

下テ延喜ノ式目ヲ考フルニ式條悉ク備リ朝紀殆ト整ヒテ嚴然タル一大國運ヲ造リ租稅ノ法驛傳ノ法祭祠ノ法軍兵ノ法等至ラザルナク盡サハルナク戸口面積郡鄉モ悉皆之レ完備セルガ如ク見ユルモ時綱紀既ニ弛ミ來リテ國司或ハ郡國ニ趨カザルモノアレバ豪族土地ヲ專領スルアリ政令下ニ行ハレズンテ亂離殆ト拾集スベカラザル端緒ヲ現ハシ承平天慶ノ際ニ至リテ益其紛擾ヲ極メ外戚及武門ノ徒ハ皆舉ゲテ私利ヲ營ミ強倔ノ徒權門ニ資縁シテ威福ヲ姿ニスニ是ニ於テ海内ノ地莊園多ク國司亦依違シテ功課舉ラズ式條遂ニ備具ニ屬シテ郡國亦見ルベキノ制ナシ今延喜式ノ内出羽ニ關スル事ノミヲ拔萃シテ聊カ當時ヲ想像スルノ資料ニ供セン

國管	神名
一、國管 出羽國上 (遠國) (邊要) 行程上 四十七日 海路五十二日	
(管) 最上 村山、置賜 雄勝 平鹿 秋田 山本 飽海 河邊	
田川 出羽	
二、神名 出羽國九座 大七座 小二座	
飽海郡三座 大一座 小二座	

驛傳直法

大物忌ノ神社大神 月山神社大神 小物忌神社大神
 田川郡三座小並 遠賀神社 由豆佐賣神社 伊氏波神社
 平鹿郡二座小並 鹽湯彦神社 波宇志別神社
 山本郡一座 副川神社
 三、驛傳直法 出羽國
 (驛馬) 最上十五疋村山野後各十疋避翼十二疋佐藝四疋船十隻遊佐
 十疋蚶方由理各十二疋百谷七疋飽海秋田各十疋
 (傳馬) 最上五疋野後三疋船五隻由理六疋避翼一疋船六隻白谷三疋
 船五隻
 (直法) 上馬五百束中馬四百束下馬三百束
 運漕雜物功賃百三十一束
 編者曰直法ハ總ベテ稻束ヲ以テ數ヘ五把ヲ以テ一束トス
 又曰諸道ヲ分ケテ大路山陽中陸東海道 小路其他ノトナシ 卅里毎ニ

鎮兵健兒

一、驛ヲ置ク若地勢阻險及水草ナキ處ハ便リニ隨テ安置シ里數
 ニ限ラズ(大寶制)故ニ或ハ十九里廿一里廿六里卅四里卅八里等
 ニシテ驛ヲ置クモノアリ(出雲風土記)各驛長一人ヲ置キ驛務ヲ
 掌ラシメ驛田ヲ附シ其收穫ヲ以テ支度ニ供ス又每郡傳馬ヲ置
 ク驛馬ハ驛鈴ニ由テ發シ傳馬ハ傳符ニ由テ發ス(令義解)
 又曰直法ハ諸國隨所ニ差異アリ蓋シ主モニ地勢ノ阻隔ニヨレルモ
 人々如シ出羽國ハ信濃國ノ直法ト相均シ
 四、鎮兵健兒 出羽國
 (鎮兵) 六百五十人
 (健兒) 一百人
 編者曰鎮兵トハ專ラ軍事ニ從事スル處ノモノニシテ健兒トハ概テ
 給シ諸關ノ兵庫ヲ守リ賁使ノ送迎ニ充ツ健兒ノアルハ陸奥出
 羽ニ限ル
 又曰出羽國ノ郡司沓生等ハ常ニ帶仗ヲ許サレタリ
 又曰諸國大概兵庫ニ藏スル器仗ヲ規定シアレド出羽加賀等ニハナ
 シ
 又曰健兒ハ皆徭役ヲ免シ國營健兒田ヲ以テ之ニ充テ出羽國ハ出舉
 シテ之ヲ給フ

租調交易等

五、租調交易雜物及祿物價法 出羽國

(正稅) 正稅二十万束公廨三十四万束月山大物忌神祭料二千束文珠會料二千束神宮寺料一千束五大尊常燈節供料五千三百束四天王修法僧供養并法服料二千六百八十束健兒糧料五万八千四百十二束修理官舍料十万束池溝料三万束救急料八万束國學生食料二千束

(調) 調庸輸狹布米穀

(交易雜物) 熊皮二十張鹿草鹿皮獨犴皮數隨得

右以正稅交易進其運功食並用正稅

(別貢雜物) 零羊角十具

(祿物價法) 絹百五十束綿十五束絲十束調布五十束庸布三十束鐵十

四束

編者曰年料別貢雜物中諸國或ハ春米別納租穀料租春米アレド山羽

國ニハ絹ヘテナシ

又曰祿物價法ハ皆一ナリ以テ計算ス即チ絹一疋ノ直ヒ百五十束絲一

疋ノ直ヒ十束ト云フガ如シ之ヲ近畿ニ比スルニ畿内ノ如キ絹

一疋ノ直ヒ絹三十束絲一疋ノ直ヒ絹六束ナリ以テ物價ノ高低

ヲ見ベキカ

第四章 寛治時代

武臣跋扈

承平以後國郡大ニ擾レテ全ク之ヲ統一スルモノナク藤原氏只トリ權勢ヲ專ラニシテ縉紳徒ニ是詩歌管絃ニ耽リ亦國事ニ心ヲ止ムルモノナシ此時ニ當リテ實ニ武臣跋扈ノ萌芽ヲ現セリ一條天皇ノ御代藤原實方朝臣ハ陸奥鎮守府將軍ニ任ゼラレシモ固ト是長袖烏惡ヲ極メシ奥羽ノ人士ヲ懷柔セシムルコトヲ得ン徒ニ歌詞ノ穿鑿ニ執掌シテ郡郷ノ事ニ意ヲ省セズ後一條天皇ノ御代平忠常反ス源賴信討チテ之ヲ平ゲ源氏次第ニ武功ヲ現シ來リ後冷泉天皇ノ御代ニ至リテ陸奥安倍賴時部下ヲ率ヒテ暴威ヲ逞フシ上國司ノ命ニ背キ下郷民ノ稅ヲ虐ケ賦具ヲ輸サズ徭役ヲ勤ムル事ナキモ敢テ之ヲ制スルモノナシ國守藤原登任之ヲ怒リ出羽秋田城介平重成ニ牒シテ永承六年二月共ニ賴時ヲ鬼切部ニ討ツ全軍大敗シ登任逃ゲテ京師ニ歸リ重成ハ散兵ヲ集メテ出羽ニ歸ル朝議是ニ於テ源賴義ヲ拔デ永承六年六月陸奥太守兼鎮守府將軍トナシ安倍賴時ヲ討タシム賴義直ニ陸奥ニ下リ兎徒ヲ鎮壓スルヲ以テ自ラ任シ天喜五年

安倍氏

前九年ノ役

清原氏

頼時ヲ誅セシモ遺孽貞任宗任等兇奸ニシテ容易ニ誅服シ能ハザルナリ
 是ニ於テ清原武則及兄光頼ヲ招ギ出羽ノ兵ヲ徵ス武則ハ出羽山北俘囚
 長ナリ康平二年武則子弟萬餘人ヲ率ヒテ頼義ニ陸奥栗原郡營岡ニ會ス
 頼義與ニ語リテ大ニ悦ビ武則及其子弟ヲ以テ分ケテ隊將トナシ大ニ兵
 ヲ督シ進デ衣川鳥海厨川等ノ諸城ヲ陷レ康平五年亂全ク平ギ六年二月
 武則ヲ以テ從五位下ニ叙シ鎮守府將軍ニ拜ス子輩各賞アリ之ヲ前九年
 ノ役ト云フ初貞任ノ敗ルハ武則ノ子武貞藤原經清ノ妻ヲ納レテ子家
 衡ヲ生ム經清ノ子清衡モ亦母ニ從テ武貞ニ養ハル然レモ武則ノ死スル
 ヤ武貞代ツテ陸奥ノ六郡ヲ領シ武貞ノ死スルヤ長子眞衡相繼テ領シ勢
 益強勢ナリ門族自ラ臣僕ト爲ル眞衡養子成衡ノ爲ニ婦ヲ迎フ臣族ニ命
 シテ飲養金帛ヲ遣リテ以テ新婦ヲ饗セシム眞衡姑夫吉彦秀武出羽ヨリ
 多ク酒饌ヲ齎シ盤ニ黄金ヲ盛り自ラ捧ゲテ入リテ謁見ス會眞衡客ト
 圓基ス志秀武ニ在ラズ秀武大ニ怒リ金ヲ投ジテ趨出シ從者ヲ戒メテ出
 羽ニ歸ル眞衡聞テ大ニ怒リ兵ヲ發シテ往テ之ヲ攻ム秀武衆寡敵セザル
 ヲ慮リ使ヲ遣シ清衡家衡ニ説テ眞衡ノ堡塞ヲ毀ハシム清衡等悦ビ乃チ
 兵ヲ發シテ之ヲ襲フ是即チ後三年軍役ノ濫觴ナリ大日本史士曰ク家衡

後三年ノ役

金澤ノ戦

眞衡ト異母兄弟ニシテ而シテ清衡武貞ニ養ハルレバ則チ異父兄弟也秀
 武援テ己ガ黨トシ眞衡ニ敵セシム事解スベカラズ豈兄弟故アリテ怨隙
 日ニ久シク一旦秀武ノ言ヲ聞テ遂ニ兵ヲ構フル乎將邊塞ノ人夷風ニ狂
 レ利ヲ見テ親ヲ忌ム乎今並ニ知ル可カラズト蓋シ後三年ノ役ノ濫觴ハ
 今之ヲ知ルニ難クシテ其經過モ亦殆ト曖昧模糊ニ屬セリ後三年軍記及
 前太平記ノ記スル處皆是レ大同小異ニシテ前後全ク連鎖ヲ斷テリ
 案ズルニ源義家陸奥守トナリテ下向スルヤ時會眞衡秀武ト相構ヘ國
 内擾亂ス義家即チ命ヲ傳ヘテ曰ク皇國中ニ在リテ私意ヲ以テ相敵抗
 ス事固トヨリ悖亂ナリ宜シク兵ヲ止メテ相和睦シ以テ平和ヲ講ズベシ
 ト眞衡秀武命ヲ奉ジテ遂ニ相和セシガ家衡聽カズ兵ヲ率ヒテ出羽仙北
 ノ沼ノ柵ニ據リ以テ義家ニ抗ス叔父武衡之ヲ援ケテ兵ヲ率ヒテ沼柵ニ
 造リ以テ共ニ謀フ合セ遂ニ沼柵ヲ棄テ、金澤柵ニ據ル義家武衡ノ來リ
 援クルヲ聞キ大ニ怒リ寛治元年九月自ラ兵數萬ヲ將テ之ヲ攻ム前鋒奮
 擊苦戦ス柵中力ヲ悉シテ拒守ス矢石俱ニ發シ官軍死傷甚ダ多シ吉彦秀
 武義家ニ説クニ曠日持久ノ計ヲ以テス義家之ニ從フ乃長圍ヲ合シ自ラ
 其二面ヲ圍ミ弟義光其一面ヲ圍ミ清衡重宗其一面ヲ圍ム柵中窘急日甚

武衛家衛死ス

シ十一月家衛自ラ柵ヲ燒キ服ヲ變ジテ遁レ去リ縣次任ノ陣前ヲ過グ次任見テ之ヲ怪トシ刀ヲ拔テ之ニ逼ル家衛之ニ應ジ相挑ムコト數刻遂ニ次任ノ殺ス所トナル武衛柵中ニ在リ進退維レ谷マリ池水ニ投ジ草叢ノ中ニ其身ヲ隱匿ス義家ノ兵搜索シテ之ヲ獲遂ニ軍門ニ斬ラル今眞衛秀武ノ役ト義家家衛ノ役ト其關係ナキガ如ク諸書ノ記述殆ト全ク散失シテ眞衛ハ秀武ト和ヲ講ズルノ後何處ニ往イテ何地ニ死シタルヤヲ記セズ武衛ハ家衛ト兵ヲ合セ義家ニ抗スルノ前何處ニアリテ如何ナルコトヲナシタリシヤヲ知ラズ然レモ義家ガ後三年ノ軍功ヲ奏シテ恩賞ヲ請フニ當リテ朝議之ヲ私闘ト認メテ敢テ之ガ賞ヲ下サハルヲ見レバ家衛ガ眞衛ト相搆ヘ義家眞衛ヲ援ケテ家衛ヲ討チシノ跡ナキニアラザルベシ只朝家ノ武家ヲ貶黜シテ功アレモ之ヲ賞セザリシトノミ斷言スルヲ得ベカラザルナリ

辨妄

野乘或ハ後三年ノ記ヲ傳ヘテ義家莊内ニ入り大梵寺城ニ據リテ家衛武衛ト戦ヒ大ニ利アリト云ヒ或ハ家衛武衛田川ニ走リ石山村ニ於テ死スト云フモ皆是レ據ナキノ説ニシテ信ヲ措クニ足ラズ思フニ當時ノ出羽國ハ別ニ國守ノアルナク陸奥國司之ヲ兼ネテ國務ヲ整理スルノ任ヲ負

ヒシガ其績亦舉ラズ義家ニ至リテ奥羽ヲ平定シ漸ク郡郷ノ制ヲ復セムトセシガ是レ亦久シカラズシテ止ミタリシナラムカ之ヲ要スルニ當時ノ出羽國ハ群雄割據ノ狀勢ヲ現ハシ之ヲ統一スルモノナク其記述モ從ツテ國史ニ載セ後世ニ傳ハルモノ尠カリシナラム

第五章 鎌倉時代

群雄割據

中世網紀亂レテ郡國梟雄ノ割據スル處トナリ朝令下ニ行ハレズ國司亦是レ朝官ニアラズシテ明リニ押領使ト稱ヘ將軍ト號シ子孫相傳フ上其不軌ヲ認ムレモ敢テ之ヲ制スルコト能ハズ已ムヲ得ズ其押領使タリ將軍タルヲ默許スルニ至リ官職守護皆之レ世襲ノ姿トナレリ平氏衰ヘ源氏起ルノ頃ニ於テ陸奥ニ藤原秀衡アリ邊陲ニ雄視シ群雄ヲ願使シ陸奥出羽二國皆其握中ニ奔走シ平氏モ之ヲ制スルコト能ハズ源氏亦是レ意ニ從ハシムルコト能ハザリシナリ抑モ此藤原氏ハ實ニ秀郷ノ裔ニシテ秀衡ハ其九世ノ孫也秀衡ノ曾祖父經清前九年ノ役ニ於テ安倍賴時ニ屬シ遂ニ源賴義ノ爲メニ捕ヘラレ鈍刀ヲ以テ斬殺セラレタル人ニシテ白符ヲ用ヒテ官物ヲ私徵シタル張本ナリ然レモ其妻幸ニ生ヲ得テ清原武

藤原秀衡

則ニ再嫁シタレバ子清衛モ亦共ニ生ヲ得テ清原氏ニ養ハレ後三年ノ役ニ於テ源義家ニ屬シ家衛異父弟武衛(家衛ノ叔父)ヲ出羽ニ討チ之ヲ滅シ遂ニ鎮守府將軍トナリ子基衛ニ至リテ陸奥出羽押領使トナル此時ニ於テ奥羽二國ハ京師ヲ去ルコト遠遠ニシテ縉紳猶蝦夷ヲ以テ之ヲ視而シテ地廣ク民殷ニ基衛ハ奕世豪族吏民奔リ附キ勢國衛ニ過グ宗像師綱陸奥守ニ任ゼラレシモ遂ニ其上ニ出ヅル能ハズ子秀衛繼グ鎮守府將軍ニ任ズ平宗盛授クルニ陸奥守ヲ以テシ以テ吾黨ヲ助ケシメントセシモ秀衛ハ只除命ヲ受ケシノミニシテ依違敢テ兵ヲ出サソリシナリ是レヨリ先キ源義經秀衛ニ依リ與ニ俱ニ平氏ヲ圍ラムコトヲ謀ル居ルコト年有リ頼朝ノ起ルヲ聞キ往テ之ニ從ハント欲ス秀衛堅ク留メテ遣ラズ之ヲ強ユ遂ニ許ス義經頼朝ト隙アリ流離轉軻北陸ヨリ北ゲテ念珠關ヲ通り三瀬ニ出デ、田川館ニ入り田河太郎實房ニ依リ居ルコト數日大寶寺ヲ過ギ清川ニ出デ遂ニ陸奥ノ秀衛ニ依ル歌詠アリ

最上川岩こす浪に月さへて夜おもしろき白糸の瀧

義經

同北の方

義經奥州下リ

文治ノ役

最上川瀨々の岩なみ早ければよらてそ通る白糸の瀧
 其眞偽ハ享ケ難キモ義經ノ莊内ヲ過ギテ陸奥ニ去リシコトハ事實ニシテ田河太郎實房ハ藤原秀衛ノ配下タリシコトハ瞭然タリ只田河氏ノミナラス陸奥出羽兩國ハ實ニ藤原氏ノ私領ノ下タリシハ後鳥羽天皇文治四年二月義經ヲ討ツノ宣旨ニ照シテ明カナリ宣旨ニ曰ク風聞ノ如クンハ前民部少輔基成并秀衛法師子息泰衛等彼ノ鼻惡ト既ニ風聞ニ背キ陸奥出羽ノ兩州ヲ虜掠シ國衛庄家ノ使者ヲ追出ス下見ルベシ兩國朝憲ノ舉ラザリシコトヲ爾後秀衛死シ泰衛繼グ義經ヲ誅シ源氏ニ降服ノ態ヲ現ハセシモ是レ即頼朝ノ術中ニ陥ラタルヲ知ラズ文治五年七月頼朝自ラ出馬シ奥羽追討ノ事アリ軍鋒ヲ分ケテ二トナシ一ハ白河ノ關ヲ過ギ一ハ念珠ケ關ニ向フ此時出羽軍ノ將タリシモノハ比企藤四郎能員宇佐美平次實政ニシテ上野國高山小林大胡左貫等ノ住人ヲ率ヒテ越後ヨリ念珠關ニ出ヅ泰衛即チ田河太郎行文秋田三郎致文ヲシテ出羽國ヲ警固セシム同年八月出羽軍大ニ破レ行文致文等梟首セラル實政進ンデ由理ニ入り由利八郎ヲ生虜ス出羽悉ク平定シ進デ頼朝ノ軍ト陸奥ニ會シ凱旋シテ鎌倉ニ歸ル即チ留守所ヲ置キテ郡國ノ庶務ヲ整理シ兼ネテ地檢

出羽留守所

ヲナサシム出羽國固ヨリ間田多シ今悉ク地檢ヲ遂ゲテ以テ間田ヲ顛セ
 バ地頭土民ノ不利固ヨリ僅少ナラザルナリ是ニ於テ爭テ留守所ニ愁訴
 シ檢地ノ法ヲ寬ニセラレンコトヲ請フ留守所命ヲ鎌倉ニ仰グ幕府旨ヲ
 下シテ曰ク當國檢注之間所々地頭ノ間田ヲ倒サル可キノ事尤モ驚キ聞
 食サル出羽陸奥ニ於テハ夷ノ地タルニ依リテ度々ノ新制ニモ除カレ訖
 ンヌ偏ニ古風ヲ守リ更ニ新儀無シ然レバ件ノ間田等何ゾ停廢セラレン
 哉公田ノ外ニ間田有ル者年來ノ如クニテ相違有ル可カラザル之旨鎌倉
 殿ノ仰セニ依リテ執達スルコト件ノ如シト既ニ諸般ノ國務ヲ處理シ奸
 盜糾察ノ法ヲ定メシモ郡國概シテ新制ニ服セズ皆泰衡ノ舊時ヲ慕フ是
 ニ於テ土御門天皇正治二年陸奥出羽諸郡地頭務ムル所ノ事一ニ秀衡泰
 衡ノ舊規ヲ守ル可シト再令スルニ至レリ是ヨリ先キ頼朝創初ノ時ニ於
 テモ既ニ此令ヲ發シタリシカ是ニ至リテ地頭ノ專橫益甚シク僧文覺モ
 「世の中に地頭ぬす人なかりせば人の心はのどけからまし」ト歌ヒタル程
 ナリシガ故地頭ノ如何ニ暴威ヲ逞フセシカヲ悟了スルヲ得ン
 頼朝ノ經緯ニ依テ諸國ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ置ケルハ史ニ照シテ
 明カナルモ此頃守護ノ職ハ出羽國ニ置カレシモノナリシカ又數國ヲ總

武藤景頼ニ就テ

ベテ之ヲ置カレシモノナリシカ更ニ考フルモ需ムルヲ能ハズ甚ダシキ
 ハ武藤景頼ハ文治五年出羽ノ守護トナリテ大寶寺ニ封ゼラル等攝摩ノ
 説ヲ逞フスルモノアルモ文治五年ハ未ダ出羽ノ討平セラレザル頃ニシ
 テ武藤景頼ナル人ハ終始幕府ノ旗下ニ屬シ院飯等ニハ必ズ供奉ヲナシ
 又殊ニ三浦泰村ノ戰亂ノ時ニハ幕下ニアリテ大ナル功勞ヲ現ハセシ事
 東鑑ニ徵シテ明カナリ何ゾ大寶寺ニ在城シテ莊内ニ指使スルヲノアル
 ベキ而シテ又守護ノ職ハ世襲ノ職ニハアラズ固トハ幕府ノ役人ナレバ
 子孫ニ傳ヘテ之ヲ橫領スルノ理ナシ間々北條氏ノ季世ヨリ足利氏ノ末
 造ニ當リテ諸國紛擾ノ際ニ乘シ相爭テ地方ヲ橫奪シ守護ノ職遂ニ傳ヘ
 テ子孫ニ至ルモノアリシモ源氏時代ニ於テ未ダ其萌芽ヲ見ザルナリ武
 藤家ノ創業實ニ其據ヲ失フモノト云フベシ然レモ地頭ノ職ハ領主領家
 ノ配下ニアリテ莊園郷保ノ收納ヲ務メシモノニシテ鎌倉以前ヨリ既ニ
 是アリ鎌倉時代ニ至リテ只之レヲ公ケニ表ハシ私役ニアラズ公官トナ
 シタルナリ此頃出羽國地頭ト云フ諸書ニ散見スレバ吾莊内ニ於テモ
 同ジク地頭ヲ置カレシナルベシ承元三年五月五日出羽國里山(黒山カ)或
 ハ羽黒山カ)衆徒等群參ス是レ地頭大泉二郎氏平ヲ訴フル所也仍テ今日

大泉ノ地頭

仲業ヲ奉行ト爲シテ一決ヲ遂グ當山先例地頭ノ進止ニ非ズ且入取追捕ヲ停止ス可キノ旨故將軍分明ナルノ間山内安堵セシムルノ處氏平或萬八千枚ノ福田料田ヲ顛倒シ或ハ山内ノ事ニ口入レ致スノ條謂レ無キノ由衆徒之ヲ申ス氏平指セル陳謝無キノ間先例ニ背キ無道ヲ張行スルノ事然ル可ラザルノ趣仰セ下サレタルヲアリ此處ニ所謂地頭ト云ヘルハ即チ大泉ノ地頭ニシテ其寺料ヲ侵セシガ故之ヲ幕府ニ訴ヘ出シナラム今就テ考フルニ地頭ノ所領ノ廣狹ハ一定ノ規律ナク或ハ一鄉村ニシテ一地頭ヲ置キ或ハ數郡邑ヲ兼テ之ガ配使ニ屬セシアリ夫レ吾川南ニハ寺社領ノ數多アリテ又此處ニ萬八千枚ノ福田料田ヲ顛倒ストアレハ羽黒山ノ所領トテ決シテ少キニアラズ是等數種ノ寺社領ヲ艾除セバ其頃未ダ開墾ノ洽ネカラザル時代ニ於テ吾川南ハ一地頭ノ所轄トシテ決シテ過剩ノモノニハ非ザルベシ今案ズル大泉ノ庄ナルモノハ今ノ東西田川二郡ヲ概括セシ莊園ノ名ニシテ既ニ業ニ此時代ヨリ一地方トシテ處理シ來リシモノナルベキカ東鑑ヲ考フルニ其第六卷ニ越後國小泉庄新釋迦領預所中御門大納言トアリ莊内固ト越後ニ屬ス故ニ其所屬セシ以前ニ於テ既ニ大泉ナル名稱ヲ附シテ小泉ト相對セシモノガ後世ニ至リ

テ之ヲ單ニ莊内ト稱スルニ至リシナリ或ハ曰ク大泉庄ハ田川郡ノ内ナリ勝福寺村ニ泉山アリ此處ニ祭レル神ヲ泉大明神ト云フ又義經記ヲ引テ義經ノ田川ヲ出デ、北ニ落チ行ク道スガラ大泉庄大梵寺ヲ通ラセ給フト有リ田川既ニ大泉ノ庄内ナルニ於テハ此處ニ改メテ大泉庄大梵寺ト云フノ理ナシト義經記ハ固ヨリ無旨百端十中ノ八九ハ取ルニ足ラズトスルモ然ルモ尙或者ノ言ニ從ヒ大梵寺以東勝福寺ヲカケテ大泉ノ庄トスレバ其レヨリ以西ハ果シテ如何ナリシカ十五里原ナル名稱ハ實ニ近代迄呼稱セラレシ所ニシテ新田與野ナル名稱ハ今モ尙鶴岡西部ニ多キヲ思ハ、當時此邊ノ開墾ノ甚ダ至ラザリシヲ想フニ餘リアルベシ是等ノ荒野ノミヲ概シテ之ヲ庄ト名クベキ理アルナシ固ヨリ後世ニ至リテ庄園ノ限界モ甚ダ模糊ヲ極メ遂ニ消滅ニ歸シタリシニセヨ地頭ヲ置テ之ヲ支配セシメシ頃ハ必ズ割然タル境界ヲ有セシニ相違ナク然ラズンバ檢地等ノ事モナシ得ザリシナリ故ニ余ハ斷ジテ今ノ川南全部ヲ以テ大泉ノ庄内トナス尙下章武藤家ヲ記スルニ至リテ尙此說ノ確カナルヲ知レガノ後世徳川氏ノ頃ニ至リテ吹浦庄等ノ名稱アルハ今ノ言語ヲ以テ云ヘバ生意氣ニ附セシ杜撰ノ名目タルナリ豈以テ據トナスヲ得ム

地頭ハ世襲ノ職ニシテ段別ニ五升ノ米ヲ以テ之ニ支給シ又ハ土地ヲ合セテ之ニ與ヘタルモノアリ而シテ承久ノ役後北條義時勤王ノ廷臣將士ヲ罰シ其所領三千餘箇所ヲ沒收シテ盡ク關東軍功ノ士ヲ賞シテ其地頭トナシ是ヲ新補地頭ト稱ス是ニ於テ舊來ノ地頭ヲ呼テ本補地頭又ハ本地頭ト曰フ後堀河天皇貞應二年新補地頭ノ得分ヲ定メ十町別ニ免田一町ヲ給シ一段別ニ加徴五升ヲ充ツ此頃ノ段別ハ三百六十歩ヲ以テ一段トナシ十段ヲ以テ一町トナセシガ如シ

大泉次郎氏平ノ後大泉ノ地頭書ニ傳ハラズ故ニ今此處ニ暫ク地頭ノ沿革ノ梗概ヲ述ベテ以テ後章ヲ起スノ資料ニ供スルノミ

細者曰ク川北ノ遊佐新田目北目等ハ皆是レ大物忌月山兩所宮ノ社領ニシテ後世川北ニ跋扈シテ莊園ヲ横領セシガ其以前ハ社家ニ附屬シタル地頭ナルベシ

酒田氏ハ川北ノ地頭タリシナラン

第六章 大寶寺屋形

今此處ニ大寶寺屋形武藤家ノ記述ヲナスニ當リテ殆ト五里霧中ニ彷徨

異説百端

シテ之ヲ捉フルニ苦メリ固ヨリ戰國亂離ノ代國史既ニ記載ヲ缺キテ全ク據トスベキモノヲ缺クノミナラズ諸家ノ記録種々皆背馳シテ一定ノ標準ナキガ如シヨシ標準ナシトスルモ事實ノ把握スベキ端緒アレバ之ヲ見出スノ途ヲ得ベキモ其末造ノ頃ニ及ビテ最上家及上杉家ニ關係ヲ有スルニ至リシ以前ノ事ハ概シテ臆説ニ過ギザルガ如シ只寺社ノ棟札過去帳ヨリ其姓名ヲ尋ネ出セシ等ノ事實ノ外彼處此處ヨリ同姓ノ人ヲ集メテ只之ヲ點綴セシガ如キノミ世或ハ武藤義氏ノ先祖書ナルモノヲ傳ヘ又小寺信正氏ノ如キハ莊内物語中ニ歷々其系譜ヲ掲ゲ出スモ其何ニ由テ之ヲ考ヘ出セシヤヲ知ラズ況ヤ其他ノモノニ於テハ皆莊内物語ノ後ニ出デ、庄内物語ヲ據トセシモノナレバ安ゾ之ガ考證トナスヲ得ン今左ニ紛々タル諸説ノ系譜ヲ舉ゲテ聯カ之ガ批評ヲ試ミン

系譜一

- 初代 武藤左衛門尉景頼
- 二代 出 羽 守 助 平
- 三代 播 磨 守 盛 氏
- 四代 出 羽 守 氏 景
- 五代 播 磨 守 秋 氏
- 六代 出 羽 守 長 盛
- 七代 左京之助師氏
- 八代 松尾小治郎春氏
- 九代 出 羽 守 氏 平

(景盛ノ弟養子)

系譜二

十代 播磨守勝氏(兵平ノ弟養子) 十一代 播磨守利氏 十二代 出羽守原氏

十三代 左京亮建氏 十四代 左京大夫政氏 十五代 四郎次郎澄氏

十六代 四郎(澄氏ノ弟養子) 十七代 左京亮政氏 十八代 左京大夫晴時

十九代 出羽守新九郎晴義 二十代 出羽守義氏 廿一代 兵庫頭義興(義氏ノ弟)

廿二代 出羽守義勝(本庄繁長ノ子養子) (武藤義氏ノ先祖書ニヨル)

初代 武藤小次郎資頼 二代 出羽守助平 三代 播磨守盛氏

四代 出羽守氏影 五代 出羽守長盛 六代 左京大夫師氏(長盛ノ弟)

七代 左衛門尉氏平 八代 氏 九代 播磨守教氏

十代 出羽守淳氏 十一代 右京亮建氏 十二代 左京大夫讃岐守政氏

十三代 四郎次郎澄氏 十四代 氏 十五代 左京亮

十六代 左京大夫晴時 十七代 親 十八代 出羽守義氏

十九代 兵庫頭義興 二十代 出羽守義勝

(莊内物語出羽國風土記等ニヨル)

武藤景頼

武藤左衛門尉景頼ハ源平合戦ノ時生捕レシガ弓馬ノ達人ナルガ故ニ梶原景時ニ預ラレ後赦免アリテ出羽國莊内ヲ賜フテ諸士ノ旗頭トナスト小寺信正氏ハ此弓馬ノ達人ナリト云フヲ疑ヒテ景頼ハ資頼ノ誤リナルベシト云ヘリ蓋シ東鑑ニ文治五年正月十九日若君御方風流ヲ結構シ大臣ノ禮儀ニ摸シ藤判官邦道此事ノ試營有ランガ爲ニ近衛司相交リ平胡籙ノ差シ機丸緒ノ付ケ様分明セザルノ處三浦介ノ預囚人武藤小次郎資頼平氏家臣監物太郎頼房ノ弟彼レ矢ノ事故實ヲ得ルノ由發言ス義澄次ヲ求メテ御氣色ヲ伺ヒ内々之ヲ召シ仰ス可シト雖若君御吉事也囚人タルモノ争テカ之ヲ役セン哉云々仰曰ク早ク原ヨリ免ス所也之ヲ沙汰セシムベキ者ト資頼愁眉ヲ開キ之ヲ調進ス云々トアルニヨルナリ文治ノ頃ニ武藤景頼ナル人アリ又其武藤資頼ナル人アルニ相違ナキモ是レ將タ大寶寺屋形ノ祖先ニシテ實ニ莊内ノ旗頭トナリテ此地ニ來リシモノナリヤ否ヤ其出羽守又ハ左衛門尉氏平ヲ以テ承元三年羽黒山ノ衆徒ヨリ訴ヘラレタル大泉次郎氏平トナス是レ既ニ東鑑ヲ助ケントテ皆將ニ東鑑ヲ倒サントスルモノ又東鑑ニヨラントテ東鑑ニ背カムトスルモノ

次郎氏平

系譜ノ錯誤

ナリ武藤家ニ關スル余ガ見モ亦此處ヲ以テナリ
 武藤左衛門尉景頼ハ常ニ幕府ノ旗下ニアリテ將家昵近ノ臣タリシナリ
 晩年ニ及ビ少卿ニ進ミ將家ノ優遇殊ニ厚シ其終ル所ヲ知ラズト雖モ幕
 府決シテ之ヲ遠ク莊内ニ離サハルナリヨシ此頃鎌倉ヨリ派遣セシトス
 ルモ諸士ノ旗頭トナストハ其制度ヲ知ラザルモノ、言ノミ諸國私領ノ
 封土ハ概ネ皆莊園ニ改メ守護地頭ヲ置テ檢非逮捕ニ充テシコトハ前章
 詳ニ之ヲ説ケリ而シテ之ヲ景頼トシ又資頼トスルモ承元時代ノ氏平ハ
 之ガ子孫ナリト云ハハ年代ニ於テ大ニ迷ハザルヲ得ズ今文治五年ヨリ
 承元三年ニ至ル年數ヲ計フルニ二十一年ニ過ギズ僅カ二十有餘ノ年數
 ノ中ニ代ヲ代フルコト六或九ナリトセバ一代ノ年數多クモ四年ヲ出デ
 ズ其間兄弟相繼ギ叔甥相讓リシコトアリトスルモ實際カ、ルコト有リ
 能ハザルノ理ナリ先代ニ於テ此ノ如シ後代ニ至リテ大寶寺政氏ハ應仁
 元年東西干戈ノ時出羽ノ沿革圖ニ最上氏ト共ニ現ハレ居ル所ナリ承元
 ヨリ應仁マデ年ヲ經ルコト二百五十九年代ヲ經ルコト五代ナリ今一代
 ノ年數ヲ計算スルニ五十一年餘ナリ況シテ甲説ノ如キハ其中或ハ兄弟
 相繼グアリコレ人生ニ於テ有リ得ベキノ年數ナルカ故ニ余ハ是等ノ系

年代ノ錯誤

野史ノ説

譜ノ皆同一轍ノ錯誤ニ陥リテ殊ニ莊内ニ於ケル武藤家ノ創始ニ於テ大
 ナル誤リアルヲ發見セリ堂々タル野史ノ如キモ亦此誤謬ヲ免カレズ
 野史ニ曰ク武藤義氏ハ出羽人也姓ハ藤原氏其先景頼左衛門尉ニ任ズ源
 平ノ戰ニ虜ニ就ク嘗テ射御ニ練熟セルヲ以テ梶原景時ニ幽ス後赦ニ遇
 フ出羽ノ莊内ヲ賜フ莊内ノ旗頭ト爲ル大梵字城ニ住シ後徙リテ尾浦城
 ニ居ル實ニ大山也支族ヲシテ大梵字城ヲ守ラシム後世尾浦ニ居ル族大
 梵字ト稱ス或ハ大寶寺ト呼ブ景頼十七世晴持本名時氏初字四郎三十五
 歳京師ニ就職シ大將軍義晴諱字ヲ賜ヒ今ノ名ニ改ム從五位下ニ叙シ左
 京大夫ニ任ズ晴持子明氏明氏子乃義氏也ト

兵家茶話

兵家茶話ニ曰ク平維盛ノ臣武藤義郷平氏亡テ後鎌倉ニ仕フ射禮ニ熟セ
 ルヲ以テ出羽ノ大山ヲ賜フト

上野勝春

上野勝春曰ク義郷ハ監物太郎頼方ノ弟也東鑑ニ云フ三浦ノ囚人武藤小
 二郎資頼ハ監物太郎頼方ノ弟也射術ヲ善クス按ズルニ資頼義郷ト混同
 スルニ似タリ資頼ハ鎮西ノ守護奥羽ノ地ニ在ル可カラズト

水慶軍記

奥羽水慶軍記ニ曰ク監物太郎頼方初メ出羽大泉莊ニ入ル頼方七世師氏
 大梵字城ニ住ス師氏子氏平大山城ニ住ス十七世晴持云々ト

地頭ノ沿革

之ヲ要スルニ政氏以前ハ殆ト皆實トシテ考フルニ由ナキモ始メハ大寶寺城ニ住シ後ニ尾浦ニ徙リシコトハ瞭カニシテ其大寶寺ニ住セシ頃ヨリ世之ヲ大寶寺屋形ト稱シ莊内全部ノ鎮主タリシハ疑フベカラズ今諸書載スル所ノ事跡ニ考ヘ武藤家ノ由來ヲ叙スルコト下ノ如シ

平氏ノ殘黨悉ク平ギ義經泰衡ノ輩モ亦北地ニ跡ヲ滅スルニ當リ即チ文治元年源賴朝朝ニ奏シテ諸國ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ置テ以テ檢非收納ノ事ヲ掌ラシメシハ前章既ニ之ヲ説ケリ今聊カ地頭ノ沿革ヲ述ベテ以テ推歩ヲ試ミントス蓋シ始メテ地頭ノ職ヲ置キシハ本家領家沒官領ノ別ナク總テ之ヲ設置シ專ラ土地ヲ管掌シ租稅課役ヲ徵收シ定例ノ租額ヲ本家領家ニ納ムルニアリシガ故ニ本家領家等自然其領地ニ離ルルノ觀アリテ獨リ地頭ノミ土地ノ全權ヲ掌握スルガ如キ有様ト成リ果テタリ是ニ於テ本家領家ハ爭テ其不法ヲ朝廷ニ訴フ是レ本家領家ナルモノハ朝ニ於テ任命セシ所ノモノナレバ如何ニ其地頭ハ鎌倉幕府ノ役人ナリトテ皆之ヲ朝ニ訴ヘ朝廷ニ於テ之ヲ幕府ニ傳奏シテ以テ其所分ヲ需メシナリ賴朝モ是ニ於テ其事端ノ煩擾ニシテ且ヤ朝幕相背馳スル素因トナルヲ忠ヒ文治二年七月更ニ令シテ本家領家等アル所ノ土地ニ

兵平

ハ一切地頭ヲ廢シ只平家沒官領并ニ臬徒隱住所ノミニ之ヲ存セリ故ニ文治二年七月以後ノ地頭職ハ皆其本家領家ノアラザルヲ知ルベシ降テ承久戰亂ノ後北條義時ハ勤王ノ廷臣將士ヲ罰シ其所領三千餘箇所ヲ沒收シテ盡ク關東軍功ノ士ヲ賞シ其地頭トナス是ヲ新補地頭ト稱セシハ前章既ニ之ヲ説ケリ然リ而シテ地頭ノ職ハ一ノ資格ヲ專有シテ世襲傳讓シ永ク子孫ト共ニ傳ヘ遂ニ武士ノ土地專有ヲ形成シ大名小名等ノ素地ハ皆此守護地頭ノ殘糟ニシテ國司等ハ遂ニ名實共ニ廢滅スルニ至リシコトヲ悟了セザルベカラズ固ヨリ守護地頭ヲ置キシ當時ヨリ國司ハ一般國ニ就カズシテ守護モ亦守護代ヲ遣シテ自ラ國事ヲ見ズ獨リ權柄ヲ振ヒシモノハ地頭ナリ尊氏立テ覇ト稱セシヨリ諸國ノ守護ハ皆其家人ニ與ヘ大ニ私黨ヲ張ラムトセシガ故次第ニ守護ノ權力ヲ增長セシメ全國一般守護ノ所管ニ歸シ二三ヶ國ハ僅ニ國司ノ實跡ヲ存ス遂ニ守護ハ全ク國ニ歸シ群雄割據ノ狀勢ヲ助長シ應仁以後ノ如キハ全ク諸侯藩立ノ狀態ヲ現出シ相攻メ相爭ヒ甲仆レ乙興リテ封建ノ勢全ク成レリ今承元三年羽黑山衆徒ヨリ訴ヘラレタル氏平ハ先例ニ背キ無道ヲ張行シ甚ダ不臣ナリトテ只譴責ニ止マリタルカ或ハ禁止改補セラレタルカ

原文甚ダ簡ニ失シテ之ヲ考フルニ由ナキモ然レモ當時ノ地頭ニシテ改補懲罰ニ處セラレタルモノ尠キヲ見レバ當時必ズ其儘ニ据ヘ置レシナラム今此承元三年ハ頼朝ノ始メテ地頭ヲ置キシ文治元年ヲ去ルコト二十五年ナルモ陸奥出羽ノ平定セシ文治五年ヲ去ルコト二十年ニ過ギズ而シテ陸羽ノ地ハ所謂沒官領ニシテ新ニ地頭ヲ置レシ所ダレバ大泉次郎氏平ハ始メテ此土地ニ地頭ノ職ヲ奉ゼシモノナラズハ早クモ其父又ハ祖父ノ代ニ此地ニ來リタルモノナラザルベカラズ景頼ノ説ハ再三上ニ辯難セリ其資頼ノ如キハ上野勝春氏ノ言ニテ其妄ナルヲ知ル余ハ此處ニ武藤家ノ系譜ヲ作り能ハザルモ大泉次郎氏平ハ實ニ武藤家先代ノ主ニシテ爾後連綿義勝ニ傳ヘシハ疑ヲ容レザルモ其相傳ノ繼續ハ未ダ釋然タル處アラザルナリ蓋シ氏ノ字ハ武藤家累代ノ通字ニシテ後世將軍義晴ヨリ諱一字ヲ賜ヒタルヨリ少シク變ゼシノ徵アルノミ安倍親任氏ハ其筆ノ餘リニ説テ曰ク北條貞時時代弘安中秋田城介ガ一族武藤左衛門尉景頼大泉地頭ニ封ゼラレ是ヨリ子孫連綿シテ大寶寺ニ在城終ニ家ヲ興シテ大寶寺屋形ト號ス然ルニ十八代出羽守義増ガ天文時代ニ及ビ屋形ヲ尾浦ニ徙シテ三郡ノ府トスト氏ハ別ニ屋形系譜ナルモノヲ選

安倍氏ノ説

武藤氏ノ末世

ミテ悉シク武藤家ニ就テ記述セラレタルモノアリト云フモ其如何ナルモノナルヤ未ダ閱讀スルニ及バザレバ彼此ノ議論ヲ挾ム能ハザルモ若シ此時ニ於テ始メテ武藤氏ガ大泉地頭タリシト云ハ、承元ノ頃ノ地頭タル大泉次郎氏平ノ裔ハ改補セラレシカ或ハ責罰セラレシカ兎ニ角其統ヲ絶チテ以テ莊内ニ就役セシモノタラザルベカラズ而シテ其補任ヨリ僅カ四十餘年ヲ經テ建武元弘ノ爭擾ノ時ハ全ク其主家ノ恩顧ヲ忘却セシモノトナサルヲ得ズ推考既ニ斯ノ如クナレバ其年代ノ經過ニ就テハ誠ニ都合ヨキ累代ナレモ今其系譜ヲ見ザルニ於テハ容易ク首肯スルコト能ハザルナリ

義氏ニ至ル迄ノ事蹟諸書殆ト其記ヲ缺ク出羽國風土記ハ莊内物語等ヲ引イテ羽黒山五重塔棟札之文中ニ大寶寺武藤謙岐守藤原政氏ト有リ同山荒澤念佛堂過去帳ニ武藤左京大夫政氏戒名淨雄道號法山三月七日又同過去帳ニ政氏ノ息四郎晴時ト有ルハ誤リニヤ二十二歳ノ時五月五日加茂ヨリ船ニテ上洛五位ヲ拜任シ左京大夫トナリ同年歸國天文十年十一月廿九日卒去戒名空山淨眞土佐林以下百餘人黒衣ト成ルト有リ信正曰ク天文ハ義晴將軍ノ時代也晴ノ字ヲ給フニヤト云々親九郎某ハ諱未

ダ考ヘズ此人一説ニ上杉謙信ノ諱也ト有リ親ノ字新ノ誤リニヤ過去帳ニ戒名淨昌天正九年八月朔終焉ト有リト云ヘルノミ其大寶寺ヨリ尾浦ニ移リシハ大梵字川ノ爲メニ大寶寺城大ニ逼ラレ到底一城ノ主トシテ居城シ能ハザルガ故ニ避ケテ此地ニハ城代ヲ置キテ尾浦ニ府城ヲ開キシガ如シ安倍親任氏ハ之ヲ以テ天文時代ニアリトスルガ如シ其見ニ曰ク義氏時代大寶寺城代前森ト見エ其後千安合戦ニモ亦此人當城ノ主將タルガ如シ是ヨリ見レバ天正ノ藏人ガ父祖ノ代天文中ヨリ既ニ當城ヲ預リタル家トスルモ強タルニハ非ルベシト夫レ或ハ然ラム尙第二卷第一章及第三章ヲ説クニ及ビテ詳カニ之ヲ知レ

第七章 川北ノ變遷

叙論

武藤氏ハ先代ヨリ莊内一圓ヲ横領セシモノニハアラズシテ始ハ川南ノミヲ所有セシモノタルニ相違ナキナリ然ラバ即チ此處ニ川北ノ變遷ヲ叙シテ武藤氏ガ如何ニシテ此川北ヲ平定セシカヲ考察セザルベカラズ抑モ武藤氏ノ末造ニ至リテ川北ノ郡部ヲ支配セシモノハ東禪寺氏ナリ此東禪寺氏ハ武藤氏股肱ノ臣ニシテ前森氏ト共ニ國事ニ執掌セシモノ

遊佐氏

酒田氏

ナレモ其酒田城ニ主トナリシハ武藤氏川北ヲ討平シタル後タルベキコト明カナリ然ラバ其以前ハ果シテ誰カ川北ノ政務ヲ支配シタルカ莊内物語ニ曰ク後土御門天皇文中川北大水アリ酒田城大ニ頼ル遊佐太郎繁光之ヲ改築スト同書ニ遊佐氏ヲ説キテ曰ク遊佐郷八日町大楯ニハ遊佐殿ト云ヘル人在城セリト是レ即チ武藤氏ノ始メニ當リテ川北一般ヲ支配セシ豪族タルベシ然レモ續太平記ニヨレバ文明年間迄ハ酒田氏酒田ヲ領セシコト明ナレバ文中ノ洪水ノ時既ニ此地遊佐氏ノ握中ニ歸セシモノナリトセバ續太平記ノ記述誤リ居ラザルベカラズ續太平記ヲ以テ正シキモノトセバ莊内物語ノ記事錯誤ヲ免レザルベシ今暫ク酒田氏ノ事ヲ考ヘン

義經記辨慶ガ義經ノ北ノ方ヲ辨疏スル時ニ當リテ是ハ酒田ノ二郎殿ノ公達昆王ト申ス羽黒ノ兒ニテ候ト云ヘリ而シテ同書又酒田湊ハ酒田次郎殿ト云フ記アルヲ見レバ文治年間ニハ酒田氏實ニ川北ヲ支配シ居リタルコト瞭然タリ而シテ此酒田氏ハ頼朝ノ奥羽討平ノ時ニ田川氏ノ如ク滅亡セズシテ能ク其所ニ安ジタルハ文治六年頼朝上洛ノ折諸士着到ノ中ニ坂田三郎酒田二郎ノ誤リカカトル誤寫古文書ニ多クアリナル人アリ降テ足利季世文明ノ頃最上

政家出羽ノ軍勢催促ノ着到ヲ見ルニ出羽豪族ノ中ニ酒田大寶寺ノ二家出デタリ是レ東鑑及續太平記ニ記載セル所ニシテ諸他ノ記事叙述ト違ヒ決シテ誤リナカルベキヲ保シ得ルナリ今是ニ依テ推考スレバ酒田氏ナルモノハ藤原氏ノ幕下トナリテ田川氏ト共ニ莊内ヲ分知シ頼朝ノ北下ノ時ハ之ニ歸順シテ舊領ノ知行ヲ許サレ酒田城ニ鎮シテ大ニ雄名ヲ川北ニ擧ゲシガ其後遊佐氏ノ遊佐郷ヨリ興ルニ遇ヒ遂ニ之ガ爲メニ討滅セラレテ其跡ヲ絶チシモノナルベシ是レ何ノ時代ニアリシヤヲ詳ニセズト雖モ遊佐氏ノ川北ヲ領シテ大ニ勢威ヲ張リシハ僅カノ歲月ニアラザルコトハ川北往々遊佐郡領ト稱スル名稱ノ存在スルニテ推知スベク抄クモ文明ノ三十四年後ニアラザルベカラズ爾後遊佐氏次第ニ勢威ヲ逞フシ武藤氏ト衝突シテ遂ニ之ガ爲メ併吞セラレ、ニ至リシ迄ノ事ハ世全ク其跡ヲ絶ツト雖モ然レモ斯ク迄強大ナル遊佐氏ガ武藤氏ト輸贏ヲ争ヒシニ就キテハ随分目醒シキ確執モアリシナルベク決シテ一朝夕ノ戰爭ニ過ギザルベキハ明瞭ナルコトナレモ今之ヲ考フルニ由ナキナリ或ハ曰ク遊佐氏酒田氏ヲ討平シ其支族ヲ以テ酒田城ヲ守ラシメシニ大寶寺屋形ハ其郡將東禪寺氏ヲシテ川北ヲ征討セシムルヤ先ヅ酒田

武藤氏ノ跋扈

城ヲ屠リ是ヲ以テ本據トシ東方松山方面ニ隊ヲ分ケ兩端ヨリ大櫛ニ向テ進ミ遂ニ之ヲ陷レ遊佐氏亡ブ武藤氏即チ其戰功ヲ稱シテ酒田城ヲ東禪寺氏ニ賜ヒ以テ永ク川北ノ鎮タラシメシト或ハ然ラン

第八章 武藤義氏

義氏

西田川郡西郷村大字馬町ニ正法寺アリ曹洞宗ノ大寺ニシテ代武藤家ノ寺院ナリト云ヒ傳フレモ然ラズ同寺位牌ニ香春院殿前京兆羽州大守桃翁英公大居士天正九辛巳三月六日トアリ又同寺石碑ニ曰ク文曰謹以羽州大守桃翁影公大居士相當六十年忌奉供養神靈也于時寛永十八辛巳年三月六日施主敬白右意趣者當寺前代之大檀那春日大明神四十九代後胤鎌足大臣御子淡海公末孫武藤左京大夫藤原朝臣義氏廟塔也前總持正法二十八世籌山淳密蓋シ此處ニ云フ處ノ英公又ハ影公ハ皆是レ武藤義氏ヲ云ヘルモノニシテ世ニ稱フル處ノ惡屋形ハ即チ此レナリ

義氏ハ其父祖ノ代ヨリ尾浦ニ在城シ天正元年家ヲ繼ゲ城主トナリ性武ヲ好ミ不逞者ヲ征討シ由利ヲ征シテ山北ノ領ヲ廣メ大寶寺ニハ前森藏人ヲ城代トシ東禪寺ニハ東禪寺筑前ヲ城代トシテ各其前代ヨリ相傳ヘ

義氏ノ兇暴

義氏自殺ス

タリシガ晩年ニ及ビ山北ニ於ケル武藤氏ノ領ハ次第ニ悖亂シ來リ義氏ノ代ニ至リテ遂ニ全ク武藤氏ノ徳ニ背キ山形城主最上義光ニ横領セラレタリ義氏天正六年(或ハ八年トモ云フ)上洛シ織田信長ニ謁シテ屋形ノ號ヲ賜ハリ諸侯ニ列セラレテ莊内ヲ知行セシガ其性甚ダ強悍ニシテ民ヲ憐マズ自ラ權勢ヲ逞フシテ百姓窮亡ニ泣クヲ願ミズ既ニ由利ノ背叛アルニ今又部内將ニ崩壞セムトス民之ヲ惡屋形ト呼ブモ悟トシテ意ニ接セザルモノ、如ク武藤氏ノ覇業今ヤ將ニ失墜セントス是ヨリ先キ義氏子ナシ越後ノ本庄繁長ノ子千勝九ヲ養テ子トナシ名ヲ義勝ト改メ尾浦ニ住ス是ニ於テ前森藏人東禪寺筑前ト相計リ主君無道ニシテ國家ノ傾廢旦タニ迫レリ是レ社稷危急ノ秋ニシテ人臣タルモノ、大節ヲ知ルベキノ秋ナリ今ヤ社稷ノ爲メニ主義氏ヲ除キ國家ノ崩壞ヲ豫防セムニ本庄ト好ヲ斷タザルベカラズ本庄ト好ヲ斷ツニ於テハ一タビ潰ヘントセシ庄内ノ士庶ヲ集メテ之ガ藩屏トナスニ足ラズ若カズ深ク最上氏ト結托シテ以テ後援トナサンニハト遂ニ藏人筑前ト義氏ニ迫リ天正十年三月之ヲシテ自殺セシメ義勝ヲ逐ヒ藤島ノ城主ニシテ義氏ノ甥タル義興ヲ迎ヘテ以テ尾浦ニ奉ジ屋形ノ箕裘ヲ繼ガシム是ニ於テ部内暫ク靜謐ニ屬セリ

野史ノ記事

或ハ義氏ノ死ヲ傳ヘテ曰ク義氏質性暴戾不仁無辜ヲ殺戮シ士民乖離ス衆惡屋形ト呼ブ上村氏ノ爲メニ田川半郡ヲ掠奪セラレ支族光安最上義光ノ亡ボス所ト爲リ義氏僅ニ田川半郡ヲ保ツ而已士民黨ヲ結ビ貳ヲ懷ク仙北七黨川登ヲ以テ畔ク天正十二年(或ハ十年トモ云フ)三井義氏東禪寺筑前守ヲシテ兵ヲ率ヒテ之ヲ伐タシム出テ與那坂ニ次ス鮎川宮内丞和田源藏田川飛驒等筑前ニ謂テ曰ク屋形暴惡狼戾攻伐暇無シ士民困窮ス方今兵食共ニ備ル奚ゾ衆ノ爲メニ計ヲ廻ラサル焉筑前曰ク我亦嘗テ憂フル所當ニ兵ヲ回シ不意ヲ襲ヒテ以テ衆心ヲ安ズベシ僉ナ議ヲ同フシ神水ヲ啜テ而シテ盟ヒ旅ヲ整ヘテ兵ヲ旋シ火ヲ縱テ急ニ尾浦城ヲ圍ム事遂卒ニ發ス防衛術無シ義氏僅ニ圍ヲ脱シテ逃ゲテ新山森ニ走リ從者六人ト二子ヲ刺殺シ而シテ後自殺ス年三十三(野史)

事精細ヲ究メテ一點ノ憾ナキガ如クナレ是レ或ハ兵家茶話莊内物語義光物語等ニヨリテ記述セシモノナレバ全ク其事實ノ齟齬スルヲ免カレズ今ハ安倍親任氏ノ見ニヨリテ筆ノ餘リニ基キ稿ヲ起セリ

野史ニ光守ハ大梵字城ニ居リテ莊内旗頭タリトアリ此說既ニ非テリ而シテ殊ニ最上義光ニ滅セラレトハ實ニ無根ノ妄說タルヲ免カレズ民

前森等ノ心事

聞傳フル所ノ義光物語最庄越軍記奥羽軍談等ノ書ハ概テ之レ事實ヲ捏造搦出セシ小説ニシテ而シテ先士ノ是等ニヨリテ記ヲ起セシモノ、多キ或ハ前後搦着ノ稿ヲナシテ願ミズ抑モ前森藏人ハ前代ヨリ既ニ大寶寺城代トナリテ大寶寺ニ在住シ義興ヲ主ト仰ギシヨリモ一身ノ命ヲ盡シテ之ニ臣事シ屋形傾キ自然ノ運命如何トモナスベカラザルヲ知リテ遂ニ千安合戦ノ折リ乱軍ノ中ニ自殺ヲ遂ゲテ臣節ヲ全フセシモノナリ今最上義光ヨリ古口ノ在番へ遺リタル書狀ヲ掲ゲテ義光ノ莊内出陣ハ上杉以後ニアリシコトノ證トシテ兼テ前森藏人ノ大寶寺城代トナリテ深ク社稷ノ危急ヲ患へ最上義光ニ後圖ヲ托シ好ヲ通ゼシノ證トナサン其以往ハ其元ノ様子無其聽之間内々無心元候處態々音問大悅之至候依而今度其方以取成大寶寺所持之刀前藏を以被爲相登誠以外聞之覺我々本望不可過之候隨而連々如申候無意趣處大寶寺向當方相求等閑候紛に前藏以計策就切腹は累年之散遣恨候如此之上は向後互に可致懇切之旨令逼塞候就中庄内之儀も出羽之國中に候條萬一自越後筋奥口へ亂入候共於其節は我々自身着甲可及其防之條心易可被存候也前藏へ傳達願入候依之自今以後之儀當方へ取寄無別心懇切被申永莊内

義光ノ書簡

之風波不立様に評議可然候隨分自爰許可致介法候此段其方宜取成記入迄に候事彼使可申述候恐々謹言

追啓如何様自是態々可及音信候間早々可致候

卯月一日

古口殿

義光押花

東禪寺氏

右書ニ依テ案ズルニ前藏トハ前森藏人ヲ云ヒ莊内一タビ最上家ノ助ケヲ得シトキ古口番所ニ宛タルモノニシテ即チ前森ヲ助ケテ越後侵入ノ鎮タレト云ヒシナリ或ハ疑ヲ起シテ前森實ニ最上ノ計略ニ陥リ主義氏ヲ滅セリトナス殊ニ知ラズ前森ハ却テ忠誠ヲ推シテ社稷ノ安危ヲ義光ニ托シテ料理ヲナセシ後徐ロニ義興ヲ立テ、主ト仰ギ將ニ絶ヘントセシ主家ヲ再興セシヲ而シテ此前森藏人ハ天正ノ初メ義氏由利ヲ征討セシメシ時ニ於テ侍大將トナリテ出陣セシ武藤家股肱ノ臣ニシテ千安合戦ニ主家ト共ニ滅亡セリ何ゾ欺ヲ最上ニ通ジテ以テ國家ノ覆没ヲ計ラムヤ忠臣ヲ誣フルモ亦實ニ甚シキ哉

東禪寺筑前ハ東禪寺ノ城代ニシテ川北一面ヲ支配セシナリ野史天正十二年三月義氏東禪寺筑前守ヲシテ仙北七黨ヲ討タシム出テ與那坂ニ次

スト田川半郡ヲ保テル義氏ガ東禪寺筑前ヲ願使スル能ハザラン好シ或ハ東禪寺ガ義氏ノ治下ナリシトセバ即チ筑前ハ東禪寺ニ居ラザルベカラズ兵ヲ率ヒテ與那坂ニ次ストハ既ニ地理ヲ誤リ居ルニ只ニ筑前ノミ計リテ義氏ヲ滅シタルガ如ク記セルハ事皆非ナリ左ノ斷簡ハ實ニ東禪寺ノ前森ト相策リ深ク最上ニ結托セシ意ヲ推量スルヲ得ベキカ

(前後欠)

東禪寺同前に當方へ被談合候は出羽も別て御取成可被下候累年御入魄之以首尾不殘心底申入候於御信用は可然存候

前後欠失殆ト何ノ意タルヲ解説スル能ハズト雖モ東禪寺ハ筑前ナルベク出羽ハ最上義光ナルベシ一片ノ文意ニテ大体ヲ推ス能ハザルモ是レ蓋シ前森筑前ト同ク最上義光ニ好ヲ結ビシ證トシテ充分ナリト思フ餘之ガ證トナスベキモノ多キモ今ハ畧シテ本章ヲ結バンノミ

第八章 武藤義興——義勝附越羽合戦

武藤義興ハ義氏ノ甥ナリ藤島ニ在住シ羽黒ノ別當職ヲ務ム蓋シ武藤氏ハ數代以前ヨリ羽黒ノ別當ヲ兼ネタリシガ義氏諸侯ニ列セラルトニ及

義興

越羽合戦ノ發端

義光ノ援兵

越羽合戦

千安合戦

ビ之ヲ厭ヒテ以テ義興ニ讓リシナリ義氏ノ自殺スルヤ前森藏人東禪寺筑前等相策リ義興ヲシテ屋形ノ箕裘ヲ繼ガシム尾浦ニ住ス然レモ天資庸愚遂ニ諸士ノ心ヲ得ルコト能ハズ前森東禪寺等身ヲ捧ゲテ之ヲ扶ケシニヨリ一ビ義氏ノ時ニ亂レタリシ士民モ幾分カ懷柔スルニ至ルト雖モ禍機自ラ其中ニ存シ殊ニ追ハレテ小國ニアル義氏ノ嗣子タリシ義勝ハ暗ニ部内ノ士心ヲ引キテ將ニ大ニ成スアラムトス天正十六年秋七月越後ノ本庄繁長大舉シテ莊内ニ入り小國ヨリ吶喊シテ進ム菅野代關根等皆手ヲ束ネテ下ル義興援ヲ最上義光ニ請フ義光即チ中山玄蕃ヲシテ一隊ノ兵ヲ率ヒテ之ヲ援ケシム義興是ニ於テ玄蕃ヲ以テ旗下ニ屬シ尾浦ノ城ヲ固守セシメ東禪寺筑前ヲシテ川北ノ兵ヲ率ヒテ大寶寺城兵ト合シ前森藏人ト共ニ之ヲ鬼坂ニ扼セシメントス事既ニ遲シ越兵切リニ田川清水ノ諸城ヲ踏破シ未ダ旬日ナラザルニ業ニ已ニ尾浦ニ迫リテ其外構ヲ陥ル藏人筑前爲ス所ヲ失ヒ退テ暫ク大寶寺城ヲ守リ夜ニ乘シテ敵陣ノ背後ヲ襲ヒ先ヅ尾浦ノ攻圍ヲ挫ガムトシ枚ヲ衝ミテ兵ヲ十五里原ニ勒シ本庄豊後ノ陣營ヲ衝カムトス途既ニ半願ミテ東方ヲ望メバ煙烟天ニ漲リ大寶寺城今ヤ既ニ火中ニアリ藏人筑前ト相顧ミ敵ノ術策

大寶寺城陷ル

前森東禪寺等戦
歿ス

尾浦陷ル

義勝立ッ

ニ陥リタルヲ悔ヒ切齒扼腕スルモ及バズ死ヲ決シ突進シテ本庄豊後ノ
 麾下ニ迫ル是ヨリ先キ本庄繁長ハ偵シテ羽兵ノ軍鋒ヲ知り隊ヲ分チテ
 二トナシ一ヲ以テ豊後ニ屬シ尾浦城ニ逼ラシメ一ハ自ラ之ヲ率ヒ間道
 ヨリ大寶寺ノ南方ニ出デ(或ハ云フ本庄
寺ニ陣スト)筑前藏人ノ城ヲ空フシテ出ルヲ窺ヒ
 其虛ヲ討チテ難ナク大寶寺城ヲ乘取リ兵ヲ分ケテ之ヲ守ラシメ更ニ軍
 ヲ廻ラジテ藏人筑前ノ背後ヲ討ツ羽兵腹背敵ヲ受ケ又如何トモスベキ
 ナシ皆死ヲ決シテ大ニ平安河畔ニ戦フ筑前ノ弟ヲ右馬ト云フ亦勇敢兄
 ニ從ツテ軍中ニアリ亂軍ノ中ニ縱横突撃シ叫喚疾驅セシモ力及バズ藏
 人筑前等ト皆共ニ軍中ニ死ス明治ノ今時尙右馬ノ武名ヲ稱シ平安合戦
 ノ壯劇ナリシコトハ其橋邊ノ首塚ト共ニ永ク人口ニ膾炙シテ其忠武ヲ
 現ハスノミ噫

是ニ於テ本庄繁長ハ豊後ノ兵ト合シ吶喊シテ尾浦城ニ逼ル城兵前森東
 禪寺等ノ戦没スルヲ見テ色動キ遂ニ支フルコト能ハズ義興中山玄蕃ト
 間道ヨリ走リテ最上義光ニ投ズ繁長城ニ入り義勝ヲ立テ、莊内三郡川
 柳引飽海チ云フ然レモ柳引ハ郡名ナルニヤ蓋シ之レ柳名ニシ
 テ京田組中川組ト云フト同シク思ハルハ、今暫ク存稱ニ從フヲ鎮撫シ武藤氏ノ遺士ヲ慰諭セ
 ントシタリシガ翌天正十七年冬豊臣氏大ニ天下ノ諸侯ノ移轉ヲ行フヤ

武藤氏斷ッ

義勝ヲ信濃ニ移シ莊内ヲ以テ上杉景勝ノ所領ニ合ス上杉氏即チ越後ノ
 諸士ヲ莊内ニ移シ先ヅ川村彦左衛門ヲシテ三郡ヲ支配セシメシハ實ニ
 天正十八年春ナリキ嗟呼武藤氏數百年累々トシテ部内ニ君臨セシ其威
 徳モ一ビ義氏ノ時ニ壞レ始メシヨリ義興ニ至リテ未ダ曾テ敵軍ノ馬蹄
 ニ蹂躪セシメタルコトナキ城下ヲシテ一朝煙霧ト共ニ消失セシム天ナ
 ル哉

第九章 檢地騒動

上杉領

天正十八年秋七月豊臣秀吉上杉景勝ヲシテ領内ノ檢地ヲナサシム景勝
 自ラ仙北ニ出張シ莊内ヲバ川村彦左衛門ヲ奉行トシ島津淡路守矩久ヲ
 尾浦ニ須田相摸守ヲ東禪寺ニ配シ其他大寶寺藤島横山等ノ諸城ノ守ヲ
 殿ニシ兵ヲ備ヘテ大ニ檢地ヲ行ハムトス民心動搖ス是ニ於テ武藤氏ノ
 遺臣所在潜伏セシモノ此際ニ興リテ大ニ爲ス所アラムトス十月二十五
 日莊内所々ニ一揆蜂起シ民屋ヲ毀燒シ城邑ヲ頽チ隨所抄掠ヲ極メ勢焰
 甚タ盛ナリ川北ニ於テハ菅野大膳ヲ將トシテ菅野ノ古城ヲ修メ以テ牙
 營トナシ兵ヲ吹浦口ニ分ケテ山北ヨリノ通路ヲ斷チ景勝ノ兵鋒ヲ支ヘ

一揆起ル
菅野大膳

平賀善可

尾浦急ナリ

景勝ノ應援

ムトス川南ニハ平賀善可ヲ將トシテ相從フ兵士數千急激突進破竹ノ勢ヲ以テ藤島横山大寶寺等ノ諸城ヲ攻陷シ遙ニ菅野ト聲援ヲナシ吶喊シテ大ニ尾浦城ニ逼ル城將島津矩久ノ須田右衛門ト力ヲ併セ殊ニ大寶寺藤島等ノ兵士ノ遁レ來リタルモノヲ糾合シ木戸某栗田某大寶寺及藤島ノ守衛ト死ヲ決シテ攻守ヲ力ム然レモ平賀ノ兵甚ダ強悍ヲ極メ殆ト支守ノ勢ヲ失ヒ城ノ陷ル且夕ニアリ此時ニ當リテ只一條ノ血路ヲ仰望スルハ景勝ノ應援ノミナリシ景勝遙ニ仙北ニアリ此報ヲ得テ大ニ驚キ急ニ隊ヲ整ヘ自ヲ將トシテ大森ヲ發シ藤田泉澤等ヲ先鋒トシ吹浦口ヲ破リ菅野ノ城ヲ陷レ東禪寺城ニ入り旗幟ヲ改メ軍旅ヲ警メ最上川ヲ渡リ濱中ヲ經テ以テ與那坂ニ至ル平賀ノ軍兵之ヲ望ミ以爲ラク川北ノ一揆ノ馳セテ吾軍ニ加ハルモノナリト敢テ意トセズ益々攻圍ノ勢ヲ嚴ニス是ニ於テ景勝急ニ令ヲ下シテ陣ヲ整ヘ旗幟ヲ復シ鼓譟シテ急ニ平賀ノ背後ヲ衝ク城兵之ヲ見テ門ヲ開キテ突進シ腹背ヨリ大ニ平賀ノ軍ヲ破ラムトス平賀ノ兵不意ニ驚キ隊ヲ亂シテ大ニ潰亂セムトセシガ流石武藤ノ遣士タレバ相呼デ暫ク腹背ニ當リ殊死シテ戰フ其鋒實ニ侮ルベカラザルモノアリ然レモ上杉ノ率フル所モ亦北越ノ猛卒ニシテ其數亦僅カ

尾浦ノ圍潰フ

亂平カ

下秀久

金石馬

ナラザレバ平賀ノ兵遂ニ拮抗スルコト能ハズ大ニ敗レテ大寶寺横山ニ走ル越兵追撃シ未ダ備ヲナササル中ニ二城ヲ陷レ一揆稍治ル景勝即チ尾浦ニ於テ莊内ノ處務ヲ令シ東禪寺ヲ甘粕兼續ニ大寶寺ヲ直江美濃ニ賜ヒ殊ニ下治右衛門尉秀久ヲシテ尾浦城ヲ守ラシメ田川郡ノ地若干ヲ給シテ三郡本賦ノ勘定奉行タラシム蓋シ其功ヲ賞シテナリ抑モ下治右衛門尉秀久ハ下野國只木村ノ人也上杉謙信兩野ニ事アリシトキ仕テ奴僕トナル謙信其剛勇ニシテ武畧ニ長ズルヲ見擢デ、之ヲ旗下ニ屬シ始テ下治右衛門尉秀久ト名ク爾後數度ノ合戰ニ拔群ノ功ヲ顯ハシ次第ニ撰バレテ以テ今ノ恩賞アリシナリ世ニ傳フ秀久只ニ武道ニ長ズルノミナラズ又算學ヲ能クシ經濟租稅ノ道ニ委シク越藩中有名ノ人ニシテ殊ニ上杉家ノ四奉行中佐渡川村彦左衛門 越後山田喜右衛門 莊内下治右衛門 信濃越前村源右衛門其名最モ高ク士庶ノ仰望スル所ナリシト後上杉氏ノ地ヲ代フルニ當テ最上家ニ臣事シ下對馬守ト稱セシハ即チ是レナリ是ニ於テ莊内ノ政務將ニ大ニ舉ラムトセシガ一揆ノ殘黨ノ囑合シテ藤島ニアリシモノ金石馬允ヲ將トシテ城内ニ籠居シ未ダ鎮撫ニ至ラザリシガ時既ニ嚴冬軍事其宜ヲ得ザレバ大寶寺城將直江美濃ヲシテ之ガ衝ニ當ラシメ持久ノ策ヲ講シ景勝ハ軍ヲ修メ

遺類追放

テ越後ニ返ルル天正十九年六月藤島ノ城兵モ直江ノ爲メニ構陷セラレテ
 今ヤ全ク一揆ノ殘黨ヲ誅滅セシガ固ヨリ慍悍驚強久シク武藤氏ノ遺澤
 ニ潤ヒシ國人等機ノ乘ズベキアレバ直ニ起テ旗鼓ヲ鳴シ徒ヲ集メ黨ヲ
 結ビテ所在徘徊シ越藩之ヲ如何トモナス能ハザリシ是ニ於テ下甘粕等
 相策リ十九年十二月廿八日急ニ將士ヲ部内ニ派遣シ流浪無頼ノ徒ヲ始
 メ土著ノ地主社家山伏ニ至ル迄上杉家ノ命ニ應ゼズ又ハ一ビ一揆ニ加
 擔セシコトアル等總テ不穩ノ舉動アリシモノハ家毎ニ問ヒ戸毎ニ糺シ
 テ之ヲ捕斬シ之ヲ追放シ其巢窟ヲ狩リ越後信濃及北條先亡ノ關東ノ士
 庶ヲ移シ尾浦ニハ下秀久大寶寺ニハ穗村監物東禪寺ニハ甘粕兼續在城
 シ是ニ全ク國內靜穩ニ歸シ慶長五年ニ至ルマデ莊内干戈ヲ納メ始メテ
 平和ノ運ニ達セリ此年上杉景勝反シ兵ヲ家康ト交フ莊内之ヲ聞キ一揆
 ノ起リテ添川城ニ據ルアリシガ秀久之ヲ討平シ次デ九月直江山城守兼
 續兵ヲ率ヒテ最上ニ亂入スルニ當リテ秀久亦川南ノ士ヲ督シ湯殿山ヲ
 越ヘテ最上ニ入り連戰皆勝チ谷地ヲ陷レテ將ニ大ニ山形ニ逼ラムトス
 義光大ニ恐レ援ヲ伊達正宗ニ請フ正宗兵數萬ヲ派シ之ガ後援ヲナセリ
 此時最上ノ地義光ノ旗下ニアリシモノハ寒河江上山長谷堂山形ノ數城

最上兵ノ併呑

ノミ然レモ秀久ハ直江兼續ト事ヲ以テ相怨ミ相共ニ事ヲ謀ルヲ悔ヒ遂
 ニ降ヲ義光ニ入レ旗幟ヲ反ヘシテ莊内ニ亂入シ先ヅ尾浦城ヲ攻陷シテ
 川南ノ形勢ヲ定メ翌慶長六年四月最上ノ軍ト合シ東禪寺討伐ノ先鋒ヲ
 ナシテ速ニ其功ヲ奏シ川北亦上杉ノ領ニアラズナリ東上杉家没落シ天
 下徳川ノ握中ニ歸スルヤ家康殊ニ義光ノ戰功ヲ賞シテ莊内及由利ヲ加
 増ス是ニ於テ義光ハ秀久ノ功ヲ表シテ田川一郡ヲ賜フ是ヨリ莊内最上
 義光ノ領ニ歸ス

義光

第十章 最上領

慶長六年八月徳川家康其功ヲ賞シテ最上義光ニ莊内三郡ヲ加増セラル
 ルヤ下對馬守秀久(或ハ慶久ト云ヒ或ハ景久ト云フ然レモ安倍親任氏ハ久秀トナセリ氏ハ福年集ヲ引キ
 又二代目ハ次右衛門ハ秀實ト云フニ考ヘテ此説ヲ立テタリ立論正確今暫ク之ニ由
 ル)ニ二万石ヲ給シ尾浦城ニ主タラシメ志村伊豆守光安(或ハ高治ト云ヒ或ハ光安
 ノ號ニヨリ)ヲ給シ東禪寺城ニ主タラシメ所々ニ郡代家老
 ヲ置テ以テ郡務ヲ處理セシメ大梵寺城ヲ増修シ嫡子駿河守家親ヲ以テ
 山形ノ城主トナシテ自ラ大梵寺城ニ居ル是ニ於テ東禪寺城ヲ改メテ龜
 ケ崎ト號シ大梵寺城ヲ改メテ鶴ヶ岡ト號ス慶長八年三月ナルベシ所々

要害ノ地ニ主將ヲ派シテ以テ邊防ニ備ヘシム
 志村伊豆守ハ最上家旗下一ノ老臣ニシテ最上戰爭ノ折ニ長谷堂ノ城
 ニ楯籠リ固守奮闘途ニ敵軍ニ汚サシメズ莊内ニ亂入ノ節ハ川北ヲ
 徇シ以テ東禪寺城ニ迫ル下秀久ト途ニ之ヲ陷ル其功少カラズ或ハ
 曰ク下秀久ヲシテ鋒ヲ倒シ最上ノ旗下一ニ屬セシメシハ此志村伊豆
 守ノ諒說ニヨルト云フモノアレモ志村ト下ト奮來音信アリシコト
 ハ諸書之ヲ見出スコト能ハズ而シテ殊ニ長谷堂城ニ重圍ヲナセシ
 秀久ニ其城主ノ諒說スルアルハ事實全ク信ズル能ハズ故ニ取ラズ
 義光心ヲ神事ニ傾ケ莊内所々ノ神社ニ社領ヲ加増シ或ハ貨物ヲ奉獻ス
 今ニ於テ其遺跡ノ歷々徴スベキモノアルナリ或ハ疑ヲ起シテ曰ク義光
 ハ決シテ莊内ニ來リシニアラズ終始山形ニ居テ只郡代家老ヲ置テ莊内
 ノ事ヲ見セシメタルノミナリシト野史最上義光ノ傳又ハ藩翰譜ニヨル
 モ義光ノ莊内大梵寺城ニ住セシハ之ヲ發見スルコト能ハザルモ然レモ
 左ノ書翰ハ明カニ義光ノ莊内下向ノ事ヲ證明シ得ルナリ
 近日庄内へ下候間其本之路次中宿等の儀ハ無油斷可申付候日限之事
 ハ重而可申遣候恐惶謹言

義光莊内ニ下ル

六月十日

義光押花

北楯兵部少輔殿
同 大 學 殿

若義光ガ下向セザルニ於テハ親ラ此書面ヲ發スルノ所以ナリ又下ノ書
 面ハ尙此事ヲ確證スルモノナリ
 乍恐令言上候仍屋形様道中御機嫌能去十五日御下着被成候此方御殿
 作一段入御意候十九日には於御廣間侍衆被召寄自 將軍様御拜領之
 御鷹雁御振舞被成候近日御能可有御覽之由に候隨て來月は御廣間御
 作事可被仰付旨に候大殿様御上り可被成様に申候可被安貴意候猶千
 坂伊豆守可被申由可預御披露候恐惶謹言

十一月廿一日

來次出雲守 押花

千坂藤松殿

(尙々書キ畧ス)

編者案ズルニ屋形様トハ家親始メハ義親ト云フ家康ニ謁シテ
 片諱ヲ賜ヒ家親ト名ルヲ云ヒ將軍トハ即チ家康ニシテ大殿様
 トハ義光ヲ云フナリ即チ義光ガ大梵寺城ニアリシトキ駿河守

家親下向シ新居ノ饗應ヲナシ且ツ義光モ近々出形スベシトノ
 文書ナルベシ前書北楯兵部少輔同大學ハ父子ニシテ從來最上
 家ニ臣事シ同家莊内ヲ領スルニ至リテ狩川楯主トナリタル人
 ナリ又後書來次出雲守ハ其先上杉家ニ仕ヘ後最上家ニ歸シ代
 代觀音寺城主トナリテ最上家ニ至リテモ舊領ヲ繼續セシモノ
 ナリ

義光卒ス

義光其後莊内ノ檢地ヲナシ所々ノ間田ヲ廢シ寺社ノ所領ヲ明確ス故ニ
 今ニ義光ノ黒印ト稱スルモノ少ナカラズ其他所々ノ堤防道路或町村ノ
 區畫等多ク改定スル所アリタルベケレド記録ニ存スルモノハ只社寺ノ
 普請等ノミ多シ慶長十九年正月義光大梵寺城ニ卒ス是レヨリ先キ慶長
 十六年三月從四位上ニ叙シ左近衛權少將ニ任ジ出羽守ヲ兼ヌ優遇殊ニ
 厚シ義光感泣ス同十八年夏義光病起ル途ニ謂ツテ曰ク我前幕下ノ恩惠
 ヲ承クルコト久シ駿府ニ赴キ謝シテ而シテ後世ニ即カント欲ヌ老臣固
 ク諫ム聽カズ病ヲ興シテ遂ニ駿府ニ如ク東照宮其篤志ヲ嘉獎シ命ジテ
 乘輿殿門ニ入ルヲ赦シ藥及物ヲ賜ヒ東府ニ適カシム台徳公亦慰勞ス儀
 駿府ニ准ズ而シテ暇ヲ賜フ十月國ニ就ク遂ニ病革リテ卒ス年六十九

一栗亂暴

忠勝公入部

(或ハ曰)是ニ於テ新開因幡大梵寺城ニ治タリ因幡ハ藤島ノ城主タリシナリ
 慶長十九年六月朔舊例ニヨリテ大梵寺城ニ饗應ノ事アリ東禪寺城主志
 村九郎右衛門尾浦城主下次右衛門亦來ル添川領主一栗兵部番シテ鶴ケ
 岡ニアリ異圖アリ志村光維下秀實ノ通ルヲ襲ヒ光維ヲ殺シ秀實ニ傷ケ
 城中大ニ爭擾ス城兵討テ兵部ヲ殺シ事平グ秀實嗣幼若ナリ領除カル家
 親ノ季弟光因(野史光隆ニ作ル)尾浦ニ居ル即チ大山ナリ大山ヲ以テ族ト
 シ田川郡二萬石ヲ賜フ元和元年諸侯支城敗壞ノ命アリ然レモ莊内ハ其
 所領モ廣大ナレバトテ鶴ケ岡龜ケ崎ノ二城ヲ存シ大山及諸他ノ城皆ヲ
 類タシム是ニ於テ光因大山ニ館シテ居ル爾後元和八年ニ至ルマデ最上
 家連綿トシテ莊内ヲ領シ部内至ツテ平穩ニシテ亦兵戈ノ虞ナシ此年八
 月酒井侯信州松代ヨリ當莊ニ改易セラレ忠勝公御入部ナリ鶴ケ岡昔雜
 談ニ慶長十九甲寅正月十八日最上出羽守義光病死續源五郎拾貳歳ニテ家ヲ繼同八年ノ
 續元和三年巳三月六日駿河守病死嫡源五郎拾貳歳ニテ家ヲ繼同八年ノ
 夏源五郎家老爭論出來テ公裁ヲ歷ケル秀忠公ノ台聽ニ達シ最上家七十
 萬石ヲ被召上一萬石ヲ下賜フ近江三河兩國ノ庄内ニ郡公收トナル是元和八年
 壬戌ノ夏也龜ケ崎ノ城ヲハ相馬大膳亮義胤奥州中村ノ城主ナリ受取給フ又鶴ケ岡ノ

城ヲモ右相馬氏受取給フ古云フ別人トモ云爰ニ於テ同年十月成覺院様御拜領也ト云ヘリ又同書ニ龜ヶ崎城附ノ兵具受取ノ節ノ帳面ニ記載アリトテ左ノ數書ヲ載セタリ

右御帳面前ニ兵具目錄品々有左之通見エタリ

元和八年

最上源五郎内

九月十日

阿久津右近花押

相馬大膳殿御内

門田造酒丞花押

泉藤右衛門殿

右目錄之通相改請取申候爲後日加判仕候者也

元和八年

相馬大膳亮内

戊十月十二日

泉藤右衛門

酒井宮内少殿御内

依政花押

高力但馬守殿

龜ヶ崎兵具最上源五郎殿内衆之以目錄相改引渡申者也

元和八年戊

石九六兵衛

十月十二日

定政花押

酒井宮内殿御内

駒井右京進

高力但馬守殿

方丈花押

又筆の餘リニ酒井侯莊内受取ノ條ニ

關東ヨリノ檢使ハ堀因幡守山田十太夫ノ御兩人ニテ請取ノ御家老ハ

高力但馬守一成也

鶴ヶ岡城内道具渡目錄

一品數爰ニ略ス

右相渡申處實正也仍如件

元和八戊

塞河江織部

九月十六日

親滿花押

秋山左京

光但花押

城主 膳

親長花押

木藤長兵衛殿 杉山九兵衛殿

松岡清左衛門殿 久野大膳殿 參

一日市町さも入勘助 同町 徳右衛門

同町二郎右衛門 三日町さも入四郎右衛門

同町彌兵衛 右五人加判有

右之塞河江織部秋山左京城主膳如書付儘ニ相渡申處實正也仍如件

元和八年十月七日 木藤長兵衛

家花押

杉山九兵衛

吉次花押

松岡清左衛門

玄花押

杉原九郎右衛門殿 加藤善兵衛殿

長谷川權左衛門殿 萩原内匠殿

(裏書)

庄内鶴ヶ岡城中ニ有之武器道具右如表書目錄之相渡申候山形源五郎殿内衆加判被致候

元和八戌拾月七日

堀 因幡守

花押

山田十大夫

花押

酒井宮内太輔殿内

高力但馬殿

右木藤杉山松岡久野ノ四人何レノ藩士ニヤ未所見ナシ信正

ハ當城モ相馬家ニテ請取トシ御舊記ニモシカ有シナラント

都丸氏モ載ラレタレト十萬石以下ノ小大名一手ニテ兩城ヲ

請取ト云モ無覺束左レハ大方ハ別家ニテ請取シモノナラ

トアリ兩城授受ノ概況ヲ知ルベキカ

第十一章 酒井侯入部

鶴ヶ岡ニ在城

元和八年十月酒井忠勝公小國口ヨリ莊内ニ入り先ヅ大山ニ着ス是ニ於テ老臣相議シ龜ヶ崎鶴ヶ岡ノ何レヲ以テ居城トセラレンカヲ議ス衆説紛々殆ト決スル所ナシ公曰ク龜ヶ崎ハ港市ヲ以テ自ラ一市街ヲナス鶴ヶ岡ノ如キハ然ラズ今若鶴ヶ岡ヲ以テ居城トナサズンバ該地遂ニ萎縮シ去ラムノミ事ニ此處ニ居城ヲ設クルニ若カズト先ヅ鶴ヶ岡ニ入り城北ニ寓舎ヲ設ケ直ニ牙城ノ修造ヲナシ又三ノ丸ヲ廣メテ侍士ヲ此處ニ移ス而シテ當時最上家ヨリ臣事セシモノ尠カラズ之ヲ以テ一町ニ住セシメ名ケテ最上町ト云フ龜ヶ崎城ニ城代ヲ送り其他各所ニ代官ヲ派シテ郡務ヲ處理セシム是レヨリ先キ最上家ノ時ニ於テ莊内二郡ノ收納ハ其年々ノ收穫ヲ檢分シテ其年毎ニ定額ヲ變更シタリシガ酒井侯入部以來次第ニ收納ノ法ヲ改メ遂ニ五ケ年間ノ作合ヲ勘考シテ所謂一ノ稅率ヲ作り以テ毎歲ノ收納ヲ確定シタリ是レ固ト止ムヲ得ザルノ勢ニシテ或ハ間田ノ沒收セラレシ地モアルベク或ハ從來ノ定額ヨリ莫大ノ増加ヲナシ、所モアルベケレバ分外ヲ僥倖セントスル農家ハ或ハ爲メニ不平ヲ稱ヘ家ヲ擧ツテ他地方ニ轉移セシモノモ尠カラズ寛永十一年遊佐郷前代名主太郎左衛門ガ幕府ニ向ツテ上リシ表書ハ事或ハ虛構ニ出デ

收納ノ法ヲ定ム

太郎左衛門ノ表書

シモノモ尠カラザルベシト雖モ能ク當時民間ノ状態ヲ窺知スルニ足ルベケレバ左ニ其二三節ヲ披萃シテ讀者ノ榮ニ供セン

一酒井宮内殿成年莊内ニ御入國被成候當年迄十三年莊内御持被成候戊年ノ子年迄三年之内ハ百姓手前有次第御物成御取被成候丑年三郡ニ御繩入被成村々定め御定被成候田地も相當不仕候御物成御取被成候に付三郡之百姓前代語傳にも不承かやうに過分之御物成相濟し身上不相成義迷惑仕候事

一莊内荒瀬郷新田村ト申所之百姓成年御物成に付御催促被成候百姓之手前米有程は御取被成候て其上に御催促被成候百姓命もつゝ、不申候様に御せつかん被成候間是を迷惑ニ存秋田佐竹様之御領分ハ百姓十二軒欠落仕候を莊内ハ竹内五兵衛ト申家中之内にて御坐候を使者と被致欠落百姓御返し可被下と御詫被成候へは佐竹様御奉行衆被仰候は何方之百姓も身上不被成候へは欠落仕候者にて候間此百姓以來身上被成候様被成候は、御返し可被成と御返事被成候へは莊内奉行衆被申候は以來身上被成候様可申付と堅被申越候に付佐竹様御侍衆差添右百姓子共女房共迄莊内ハ御越人數御渡

被成候に付御侍衆被歸候處欠落仕候百姓不殘御成敗被成候女房子共御城の御召上被召仕候其内他へも御賣被成候依此義たゝ今いか程佐竹様御領分へ欠落仕候得共御返し不被成候事

一 莊内酒田と申所家數千五百軒も御坐候か前代田地は無御坐候往來之舟出入之力其上在郷の出入少々宛之商物仕候て身上を送り申候御當代には酒田と在郷之間に鐵砲乗口々に番を置見合次第に賣物亦は賣候ても代金御取らせ被成候へは及餓死候を迷惑に存御米借申候へは孰賀之高直段にて金子御取被成候其外商物は無御坐候代金調可申様無御坐候得者能家持申候者は家を賣舟を賣濟申候能家船など持不申者は身を賣らせ代金御取被成候酒田に限らず田地をも不仕鹽をやき商をも致身を送り申候者家之三千軒も四千軒も可有御坐か其處に番を置米前代は通し申候を御通し無之事は御藏米を貸孰賀之直段にて金子御取可有御分別にてか様所々色々之役所共筆にも及不申候事

節ヲ擧グル十二皆新政ノ非ヲ鳴ラシテ幕府ニ向ツテ哀訴セシニアラザルハナシ是レ即チ緩慢ニナリ來リタル後ニ確然タル制規ヲ行ハントス

ルニ際シ民間ニ起ル所ノ通弊ニシテ蓋シ新政ヲ是非スルハ愚民ノ通情ナリ

今是等ノ文書ハ悉皆信ズベカラズトスルモ然レ共是等諸他ノ文書ニヨリテ推考スレバ最上家ノ時ニ於テハ莊内收納ノ法全ク備ラズシテ檢地ノ心得等モ亦一定セザリシモノ、如キモ酒井侯ノ入部セラレ、ヤ是等曖昧ナル諸法ヲ確定シテ以テ部内ノ政務ヲ擧ゲントセラレシコト明カナリ寛永九年ノ達書ニ曰ク

寛永達書

- 一 侍之道無油斷軍役等可相嗜事
- 一 不依何事其身之分限隨ふべし私の奢仕間敷事
- 一 死罪に行ゆる者有之時被仰付者之外一切其場へ不可馳集違背之輩は可爲曲事

附喧嘩火事の時も同然火事は内之者親類縁者は制限にわらず

- 一 徒黨をむすひ或荷擔或ハ妨をなす義堅停止之事
- 一 搦有之奉公人不可拘置事
- 一 跡目之義養子ハ存生之内可得御意及末期忘却之刻雖申之御用以有べからず勿論無筋目者御許容有間敷也縱雖爲實子筋目違候遺言御

立被成間敷事

- 一 物頭諸奉行依怙於有之者急度曲事可被仰付事
 - 一 諸奉行并代官以下買置商賣仕におひては可爲曲事事
 - 一 諸役人其役之品々常可致吟味油斷有之者可爲曲事事
- 右條々可相守此旨者也

ト以テ一般ヲ推スベキカ

山林

當時莊内ノ山林ハ檜材多ク繁茂シテ杉材等ハ殆トナシ義光嘗テ杉苗千本ヲ小真木村日枝神社ニ寄附セシコトアルノミ故ニ當時鶴ヶ岡城ノ殿舎ヲ造ルニ際シ殊更ニ數奇ヲ極メテ石見國ヨリ杉材ヲ買ヒタリ故ニ此頃ノ家屋ハ悉皆檜材ヲ用ヒシガ後世次第ニ之ヲ伐採シ現時ニ於テハ莊内殆ト檜材ノ跡ヲ絶チテ杉材ノミニ至リタリ是或ハ山林保護ノ法ノ未ダ大ニ至ラザルアルニヨリシナラムカ

米札

是レヨリ先キ最上家ノ時ニ於テハ家中ニ渡ス所ノ藏米ハ皆現米ヲ以テ支給シ來リ酒井侯入部ノ後モ亦舊法ヲ改メザリシガ家老柴谷武右衛門始メテ米札通用ノ法ヲ定メ傳ヘテ以テ後世ニ至リシト云フ或ハ此法ヲ誹リテ曰ク徒ニ便利ヲノミ是レ計リテ後來弊ノ伴ヒ來ルベキヲ思ハズ米札ノ法便ハ即チ便ナリト雖モ後世是ニ依テ姦曲ヲ行フモノアルベシト果シテ其言ノ如シ

第十二章 延寶時代

開田

今ヤ延寶時代靈元天皇御代ノ莊内ヲ記述セントスルニ先チ前章ヲ追フテ變遷ヲ叙シ來ラザルベカラズ部内ノ政務日々ニ新ニ開墾ノ事業モ月ニ進ミテ知行本高十四万七十一石餘ナリシガ改出ニヨリテ二万五千二十七石餘ノ増額ヲ見ハシ之ニ加フルニ新田ノ開墾一万八千四十一石アリテ總高十八万三千四百四十石トナリ寛文以來開墾ノ新田モ亦殆ト万石ニ垂ントシ莊内ノ野モ實ニ沃壤數里益豐饒ノ域ニ進マムトセリ

加藤忠廣

是レヨリ先キ寛永九年加藤清正ノ嫡肥後守忠廣事ヲ以テ責ヲ幕府ニ享ケ辨解スルニ所ナク國ヲ奪ハレ莊内ニ謫移セラル丸岡村ニ館シテ居ル忠勝公能ク之ヲ遇シ侍者ヲ遣ハシ奉養ニ供セシム居ルコト二十餘年承應二年閏六月八日病テ丸岡ニ卒ス鶴ヶ岡七日町本住寺ニ葬リ常光院殿ノ證誠覺日源大居士ト號ス該寺ニ墳墓靈牌アリ毎歲夏日之ガ祭典ヲ行ヒ合セテ乃父清正ヲ一殿ニ祭り其遺物ヲ保存シ例祭ノ節衆庶ノ縱覽ニ

高力常長

供スト云フ
下リテ寛文八年ニ至リ肥前島原城主高力左近太夫隆長下ヲ御スルニ其道ヲ得ズ百姓怨望ス遂ニ國除カレ隆長ハ松平綱元ニ預ケラレ嫡子伊豫守常長ハ酒井忠義公ニ預ケラレテ莊内ニ下リ鶴ヶ岡城西家中新町ニ居ル居ルコト二十八年延寶八年九月免サレテ江戸ニ召サレ三千石ヲ給セラレテ御書院御番頭ニ拜ス其跡鶴ヶ岡ニ在リ稱シテ伊豫様小路ト云フハ是レナリ

今延寶五年四月十日幕府ニ向ツテ上表セシ部内形勢ノ一斑ヲ概記セムニ關所ハ十二ヶ所ニ在リテ清川口、大網口、田麥俣口、小國口、小名部口、鼠ヶ關口、原海口、吹浦口、甘鹿口、關川、升田、青澤トシ各行旅ヲ改メ出入ヲ警メ郷村實ニ左表ノ如クナリシ

郷村

一飽海郡 郷數三 組數九

遊佐郷 組數三 高合二万五千五百三石四斗一升四合

江地組 村數三十四内三ヶ村民家ナシ新田ト名クル

モノ七

齋藤隼之助

石辻組 村數二十六内新田ト名クルモノ三今野茂兵衛

宮野内組 村數二十六内無高二新田三、與屋二齋藤金四郎
荒瀬郷 組數三 高合二万二千四百八十四石六斗八升

島田組 村數二十五内新田二 相馬藤右衛門

古川組 村數二十七内新田一、與屋一 佐藤八右衛門

新田目組 村數二十七内一ヶ村民家ナシ、新田九、與屋一

堀善藏

平田郷 組數四 高合二万二千四百七十七石五斗四升四合一勺

漆曾根組 村數四十内三ヶ村民家ナシ、新田五、與屋四

岡本勘作

山楯組 村數二十三内一ヶ村民家ナシ、新田四、與屋二

寺社地二 大沼藤太

大町組 村數十内六ヶ村民家ナシ、新田一 尾形甲之助

田澤組 村數十四内新田二 加藤久太郎

田川郡 郷數五 組數二十五

狩川郷 組數五 高合二万七千三百三十八石三斗六升六合三勺

狩川組 村數二十二内新田二、與屋一 東海林丈助

清川組 村數十三内一ヶ村民家ナシ、新田四、與屋一 伊藤 久作
 添川組 村數十三内一ヶ村民家ナシ、新田一、與屋一 久松 久作
 上余目組 村數十六内新田四、與屋一 劍持 民助
 下余目組 村數四 高橋 彌藏
 中川郷 組數五 高合三万二千二百四十石八斗四升一合六勺
 横山組 村數二十二内四ヶ村民家ナシ、新田五 齋藤 七太夫
 荒川組 村數十五内新田三 林 得右衛門
 藤島組 村數十三内新田一、與屋一 太田 勘四郎
 長沼組 村數二 山本 平治
 押切組 村數四内新田一 (同 人 數)
 櫛引郷 組數五 高合二万八千二百六十三石六斗四升六合 矢田部 小兵衛
 黒川組 村數十九内新田三 萩原 幸三郎
 青龍寺組 村數二十一内二ヶ村民家ナシ

島 組 村數二十七内一ヶ村民家ナシ、與屋一 伊藤 龜三郎
 田澤組 村數四 井上 万吉
 本郷組 村數九 小關 仁一郎
 京田郷 組數三 高合一万七千七百二十二石二斗五升四勺 今野 收助
 京田組 村數十九内新田一、與屋一
 西郷組 村數二十三内二ヶ村民家ナシ、新田三、與屋三 清水 増治
 加茂組 村數四 富塚 源太郎
 山濱郷 組數七 高合二万七千七百七十五石三斗八升四合八勺 吉田 平藏
 淀川組 村數二十一内新田二、與屋二 仙場 廣吉
 田川組 村數十七 和田 善兵衛
 由良組 村數十二内一ヶ村民家ナシ 尾形 六郎右衛門
 三瀬組 村數三 (同 人 數)
 温海組 村數十二 佐藤 喜十郎
 鼠ヶ關組 村數一

小名部組 村數一

佐藤源太右衛門

編者曰下カノ姓名ハ大庄屋ヲ表シ村數ノ中ニハ枝郡及ビ小名ヲ算セズ

而シテ各組ノ中ニ大組頭ナルモノヲ置キ大庄屋ノ下ニ立チテ庶務ヲ整理セシメ收納ノ法既ニ全ク備ル此他寺社五十一ヶ所ニ各寺社領アリテ多キハ千五百石ヲ越ヘ少キモノモ一石ヲ下ラズ又松山領アリ御預所アリ松山領ハ田川郡内ニ十二ヶ村飽海郡内ニ三十五ヶ村ニシテ御預所ハ田川郡内六十八ヶ村飽海郡内三ヶ村ナリ而シテ又由利郡中十一ヶ村モ亦御預地ノ中ニ合メリ其御預地ノ如キハ請フ卷首ニ現ス所ノ大泉全圖ニ就キテ之ヲ見ヨ

是ヨリ先キ慶安元年三月七日忠當弟大學頭忠恒ニ松山左澤二万石ヲ分知シ子孫代々松山城ニ居リ以テ明治維新ニ至ル其弟奎之助忠解ニ大山一万石ヲ分知シ舊城趾三丸ニ殿舎ヲ造リテ居リシガ寛文八年ニ至リ嗣子ナクシテ卒シ大山料遂ニ公收セラル

本多出雲

松山

第十三章 享保時代

元祿十五年七月當藩御預トナリ居タル本多出雲守其臣久林清水等ヲ打

歐阿矢島ノ争論

ツ兩士大ニ怒リ詰所ヲ去ラントセシガ忠貞公ノ説諭ニヨリテ事漸ク已ムヲ得タリシガ其報ノ幕府ニ達スルヤ出雲守ヲ以テ三州岡崎ノ城主水野監物ニ預ケ忠貞公ノ事ヲ處スルニ遲緩ナルヲ咎メテ五ヶ月間ノ閉門ヲ命ズ是ニ於テ鶴ヶ岡町内鳴物ハ勿論フレ賣ヲ禁ジ十一口ノ木戸ヲ僅カニ開キ置クノミニシテ行商ノ廓内ニ入ルヲ許サズ又各商店トモ店頭ニ籠ヲ下ゲシム是レ當藩ノ謹慎ヲ命ゼラレタル始メナリ

當時由利郡矢島ト飽海郡學頭衆徒ト鳥海山争論ノ事アリ蓋シ矢島ノ民ハ鳥海山嶺ノ水皆流レテ北麓ニ落ツ固ヨリ鳥海山ハ飽海郡ニ屬スベキモノニアラズシテ由利郡ニ屬スベキモノタルコト明カナリト云フニアリテ飽海郡ハ古史ヲ引キ舊記ニ徴シテ吹浦ノ大物忌神社ハ正シク是レ鳥海山神ヲ祭ル所ナルヲ證明シ鳥海山ノ飽海郡ニ屬スベキモノタルヲ主張セリ是ニ於テ争論結デ解ケザルコト數年遂ニ暴動ヲナシ人命ヲ傷クルニ至リテ幕府ニ訴フ寶永元年幕府旨ヲ下シテ曰ク

(前畧然則矢島之百姓申所令相違候大物忌神社之事延喜式三代實錄ニ出羽國飽海郡大物忌神社ト載之矢島百姓申候ハ此神社ハ別山にて飽海郡吹浦村に有之由申に付於吹浦村に令檢分所口上書ト社地ト各別

令相違候吹浦村社僧社人に相尋候得者鳥海山神體勸請不及異論由申之其上三代實録に所載之上山形甚峻岨也吹浦村之社地とは各別令違却候就中慶長年中最上出羽守鳥海山神領寄附之其後酒井宮内大輔重て致寄進至于今庄内領衆徒令知行堂之正面最上酒井之家紋唐銅を以居之又堂番拾人從莊内領差置錫杖錢納來上は旁以矢島百姓訴所非分也依之莊内領衆徒百姓所詣之封所用之西は生嶽之腰方稻村嶽八分に至迄東は女郎倉之腰迄不毛之地由利飽海兩郡之堺相立繪圖之面墨筋引立各加印判雙方に下置之永可相守者也

藤枝ノ工事

公領代官

相撲

ト途ニ莊内ノ勝訴トナリ是ヨリ永ク爭論ヲ絶チシト云フ
寶永四年富士山火ス東海道驛路ノ擁塞セラレ、モノ多シ幕府諸藩ニ命ジテ之ヲ修造セシム駿州藤枝ノ邊吾莊内藩ノ負擔トス即チ役ヲ發シ同年十二月ヨリ翌年三月ニ至リテ漸ク竣ス幕府物ヲ賜フコト差アリ
正徳三年八月諸國公領ノ諸侯ノ預リトナリ居タルモノヲ廢シテ悉ク此處ニ代官ヲ置ク莊内公領ハ大山ニ於テ之ヲ統べ役所ヲ設置シ諸屋内藏助ナル者始メテ公領ノ代官タリシ
時ノ公忠真ハ好デ相撲ヲ見又時々侍臣ヲシテ其技ヲ角セシム加之鶴ヶ

經濟紛亂

享保飢饉

岡町内及近郷ノ壯丁ヲ集メテ大相撲ヲ行フコト年ニ屢次是ヨリ莊内地方角力ノ法益行ハレシト云フ然レモ其當時ハ未ダ勸進相撲ハ興行セザリシナリ
享保三年十月乾字金ヲ禁ズ國中經濟社會大ニ亂ル乾字金ノ價殆ト新金ノ半額ニ當リ莊内ニ於テハ新金一兩ニ打貨錢二百五六十文ヲ打チテ以テ乾字金二兩ト交易シ御金切米ノ諸給人及御小姓衆ノ如キハ十兩ノ切米ニ乾字金二十兩ヲ渡サレ加之新金ノ渡來甚ダ遅ケレバ次第ニ乾字金ノ價格ヲ減ジテ民間大ニ苦情ヲ稱ヘシト云フ
享保五年莊内大ニ稔ラズ翌六年ノ夏季ニ至リテ下民ノ飢饉ニ泣クモノ多ク道途乞兒徘徊シ米一俵ノ價乾字金一兩一步ニ騰貴シ餓殍途ニ横リテ亦如何トモナシ難シ七月鶴ヶ岡酒田及其他ノ所々ニ小屋ヲ造リテ以テ粥ヲ給ス一日一ケ所ノ給スル所殆ト万ニ垂ントシ鶴ヶ岡ノ如キハ坂ノ上及荒町川端ニケ所ノ小屋ニシテ二日間ニ給スル所ノ人員町人一万千七百九十四人百姓二万二千九百二十四人總ベテ三万四千七百二十八人ノ多數ニ達セリ以テ一般ヲ推知スベキカ
享保八年最上長藩ノ百姓騷擾シ近郡大ニ勦ク藩士ヲ清川口ニ派シテ以

享保大風

テ非常ニ備フ其十年七月廿七日大風アリ田畑山林害ヲ被ラズト云フモ
 ノナシ今後藤筆記ヲ引イテ其慘狀ノ一斑ヲ掲ゲン
 享保十年七月二十七日莊内大風田畑損毛大分有之所々大木吹折倒木
 多ク有之巳ノ刻過東風夫々南風午ノ刻過西風吹此時大風ニテ鹽風
 吹降霧ノ様ニ吹立稻穂其外草木ノ葉共鹽デヤカレ二三日ノ中常盤木
 ノ外ハ不殘葉落燒木ノ様ニ相成候トリ分横山村下方酒田ノ方家ノ軒
 端柱ヒサシナドニハ鹽二三分ホド溜候由未ノ刻以前ニハ北風ニテ鹽
 煙吹上青空ニ相成風止申候七十年來無之大風ノヨシ老人共申候右ノ
 葉落タル木ニ若葉生ジ八月廿八日頃梅梨子櫻桃李藤山吹ノ類春ノヤ
 ウニ花咲キ梨子李ハ大豆粒ヨリ太ク成味モ酢ク有之候クルミ漆ノ木
 ナドモ花咲申候桑ノ實モ赤ク生ミ候得共黒ク熟シハ不致候也翌午ノ
 春諸花共ニ左ノミ少シ咲キ候共不相見候
 實ニ稀有ノ天災ニシテ果穀ノ害セラレシモノ尠カラズ翌十一年又道途
 ニ餓孚ヲ見ルニ至レリ

手向ノ公事

享保十三年田川郡増川郷御料十一ヶ村及私領十四ヶ村ト羽黒山領麓町
 手向村野山トノ境争ヒノ事アリ遂ニ幕府ノ裁斷ヲ請フニ至ル幕府旨ヲ

下シテ曰ク

御料市野山大口興野谷地楯東堀越大川渡上中目蛸井興屋中村平足川
 尻并私領川代國見増川新田野荒町外野中里田屋町屋川行金森目谷地
 興野下中野目古郡柳久瀬訴趣増川川代山は廿五丁村入會にて山年貢
 鶴岡込納之羽黒山領手向村も一同入會山年貢は領主より免除所手向
 村之者共右之地は一圓羽黒境内之由申掠差留段申之手向村々答之者
 論所字は南野下野と申候往古々手向村高九石餘之内にて羽黒境内無
 紛候二十五ヶ村々別之場所字を稱し入會と申紛旨申之右論地就不相
 決爲檢使市岡式部池田喜八郎差遣令見分候所二十五ヶ村川代山と指
 場所萬治年中松平伊豆守取扱之定書入會之文言有之其上論所雙方之
 開田地入交有之入會にて無之候は、新開は爲致間敷候所相互に許之
 儀元來入會たる證據歴然に候手向村々慶長之水帳と申差出候得共帳
 面に高附印形無之不埒にて取々不足其外羽黒境内と申證據一切無之
 候此外同所論地三ヶ所有之北之方は手向村々金剛石五輪森等申立附
 相争此地は寶永年中添川村と鷺畑村出入裁許之境墨引有之不可異論
 及東之方手向村と大中島村添川村互に地内と争場所は見分之上五ヶ

村入會相究候南之方螺道坂小月山迄之間ハ羽黒地内にて二十五ヶ村入會之由手向村雖申證據無之候依之今般遂食議相定候趣訴訟方差名ル川代山之儀は二十五ヶ村大中島村ハ差出ス萬治年中之書付何レも松平伊豆守定書引合符合殊に羽黒神領村杉村ハ差出置候書付等も有之條東は雙方申二ツ石ハ廿五ヶ村申名所之順々笹森中之坂高森ツムれかられ石ケ森杉の森唐笠骨迄西は二ツ石ハ手向村名所之順々ウラの濱神樂坂垂萩澤大森袋之口日後臺のかけ石金森迄二十五ヶ村ト手向村入會秣薪可取之論内へ有之雙方田畑林も有來通持主致支配並木之儀は只今之通手向村支配可致向後互に新發田畑坂開立出等は堅停止之北之境金剛石ハ鉢森迄は寶永年中裁許之繪圖有之條東之方ハ手向村申八尺堂ハ兔森野口北方ハ羽黒境内可爲野口ハ駒王子迄月山道を限東は山の手通塘筋を限野山之分大中島添川村東堀越村鷺畑村手向村都合五ヶ村秣薪可入會是又新開立出し令禁制螺道坂ハ南方小月山迄月山道東之方野山は吟味之上大中嶋村地内に相決條手向村ハ不可締之旨裁斷之畢仍爲後鑑繪圖面野山境引墨筋各加印判裏書雙方如下授問永守此旨不可違犯者也

享保十三年申十二月廿六日

ト蓋シ神社領公領私領ノ境界論ハ終始絶フルコトアラズシテ事幾分カ公領ニ關シ代官之ヲ裁斷シ能ハザルモノハ必ズ之ヲ幕府ニ訴フ前書或ハ時ノ幕府ノ裁決ノ狀況ト當時民間ノ状態トヲ窺知スルニ餘アルベシ

第十四章 文化時代

莊内未ダ治水ノ法治チカラズ新田ノ開墾セラル、モノ妙カラズト雖モ洪水ノ害又屢ナリ殊ニ寶曆年間ノ如キ其甚ダシキヲ見ル或ハ小真木川ヲ浚ヒ種々ノ手段ヲ講シテ治水ノ法ヲ究ムレテ殆ト之ガ所ニ迷ヒタルモノ、如シ越中山村ニ藤兵衛ナルモノアリ月山脈ヨリ落ル所ノ水ヲ沮シテ一ノ長堰ヲ造リ東田川郡東部ノ新田ニ莫大ノ利益ヲ與ヘ他或ハ個人ノ力ヲ以テ這般公共ノ事業ニ執掌セシモノ一二ニシテ止マラズ莊内ノ沃野一層ノ美貌ヲ呈シ來リタルモ憂トスベキハ洪水ノ患ト西海岸ニ隣レル田畑ノ時々海風ノ爲メニ毀損セラレ沙礫ノ爲メニ傷害セラル、アルノミ明和ヨリ安永天明ヲ經テ寛政享和ニ至ルマデ損毛届出ヲナシタルコト幾次幾何ナルヤヲ知ラズ是ニ由テ或ハ拜借金ヲナシ或ハ勤番

越中塚天保

藤崎藤藏

文化地盤

ヲ免セラレシコトモアリタリ
 元文寛保ノ交川北ノ海濱ノ地樹木ノ以テ障トナルベキモノアラザレバ
 西風細砂ヲ捲イテ之ヲ田圃ニ輸リ數里ノ青田一朝ニシテ赤緒トナルコ
 ト屢ナリ有司之ヲ憂ヘ役夫數萬以テ之ガ防禦ヲナサント欲スルモ遂ニ
 其効ヲ奏スルコト能ハザリシ酒田ニ富豪佐藤某ナルモノアリ實ニ藤崎
 藤藏ノ父ナリ此災ヲ見テ義俠ノ心止ム能ハズ家ヲ舉ツテ移リ砂丘ニ植
 フルニ樹木ヲ以テス從テ植フレバ從テ倒サレ某遂ニ事ヲ果サズシテ死
 ス藤藏父ノ遺志ヲ繼ギ堅忍刻苦數十年ニシテ漸ク効果ヲ奏セリ今其餘
 澤ニ潤フモノ實ニ僅少ニアラザルナリ川北ノ荒原是ニ至リテ數里ノ沃
 野トナレリ
 當時屢鳥海山噴火ノ事アリ享保以來元文五年一ビ起リテ享和元年再ビ
 至ル然レモ未ダ大ニ地方ヲ害サソキ其四年即文化元年六月四日大
 震動ト共ニ爆發シテ川南川北害ヲ蒙ルコト尠カラズ殊ニ川北ヲ以テ甚
 シトス左ノ文書ハ當時ノ慘況ヲ想像スルニ餘アルヲ覺フ
 私領分羽州莊内田川郡飽海郡之内當月四日の夜より同七日迄地震甚
 敷地面所々裂候て泥水湧出地形或高或低相成候處數ヶ所有之右に付

破損所之覺

一 御米置場柵十五六間其外所々倒同所土居二十間斗引申候
 一 龜ヶ崎城傾立關廊下臺所向震倒多門楹痛礎沈堀橋所々痛地面三四
 尺斗長五七間程宛裂泥水湧出土居百間程之所沈大手堀土居置揚百
 八十間程之所岡に相成其外土居切石下堀土置揚岡ニ相成申候
 一 侍屋敷潰家二十軒、同長屋潰八棟、同痛家六軒、給人潰家二
 軒、一同痛家百三十五軒、一町家潰四百十三軒、一同痛家四百二十四
 軒、一寺潰二十七ヶ寺、一同痛十六ヶ寺、一衆徒潰家四十七軒、一同痛
 七軒、一社家潰七軒、一社痛一社、一修驗潰家十七軒、一同痛三軒、一、道
 心寮潰一軒、一民家潰二千八百二十六軒、一小屋潰九軒、一土藏潰百
 八十二棟、一同痛三百九十三棟、一番所潰十ヶ所、一同痛三ヶ所、一、死
 人百五十人、一蹠馬百四十二疋
 右ノ通御坐候田畑破損所の儀は追て尙又た可申上候此段御届申上
 候

六月二十八日

酒井左衛門尉

私領分羽州莊内田川郡飽海郡の内當六月四日の夜より同七日迄地震

且同月十二日同十六日同二十七日大雨水の儀先達御届申上候右ニ付
田畑損毛の覺

高七萬四千五十五石餘

内 四萬七千六百七十三石餘

二萬六千三百八十二石餘

地震に付損毛

出水に付損毛

右ノ通尙作毛植付以後不順の天氣に御坐候所地震に付痛且其後度々
ノ出水ニテ落作ニ相成申候尤出水損毛ノ儀ハ先達御届申上候ハ高増
に相成候此段御届申上候

十月十一日

酒井左衛門尉

私領分羽州莊内田川郡飽海郡の内當六月四日の夜々同七日迄地震に
付破損所の儀當六月廿八日御届申上候以後度々地震も有之猶又巨細
吟味申付候所痛懸り候場所及大破損所左の通り

- 一、大小橋痛五十二ヶ所
- 一、堰臺堰口土砂埋二百四ヶ所
- 一、川除出崩痛五十八ヶ所
- 一、水門破損三十ヶ所
- 一、用水溜池埋三ヶ所
- 一、水除土手石長手痛八十八ヶ所
- 一、街道痛八十五ヶ所
- 一、川口埋三ヶ所
- 一、山崩澤埋七十六ヶ所

右之通御坐候以上

十月十一日

酒井左衛門尉

右ノ數書ハ酒井侯ヨリ幕府ニ届出タル書面ニシテ實查ヲ遂ゲテ表上
シタリシモノナレバ其事ノ真否ハ問ヲ待タザルベシ

今此處ニ文化二年二月致道館設立ノ概況ヲ述ブルニ當リテ廻リテ其以
前ノ風俗ヲ概記セザルベカラズ安永五年武藤幸山翁ガ其著ス所ノ心耕
録ニ叙シテ曰ク

風俗

(前畧)三十四年前の寶曆の初年迄は老人の昔咄多くありて中も荒川
關磔（磯藤）亡父松達など別して聞傳くわしかりしに我年若き頃にて心
を寄せて聞得す過したり夫より世も移りて古き咄など好て聞人も無
くいつしか絶へてたま〜老女の跡先あわぬ茶物語も残れるのみ也
近年友の打寄を聞くに諸役所の借方に手取米なき族も米相場の上げ
下げ直段朝夕くるふこと聞合御手宛米と不作を願ひ新田開發の沙汰
又役替の咄に何某は何の跡役誰彼の何役と我増の考自惚去る御方
の御咄に慎に聞しと鼻よかけ我の顔も見ゆるもあり都て今の附合に
は寢酒を買置人又杯通ふちろりの夕間暮夕飯を喰殘し鱒鮓の取集門

番の作助流酒呑ぬ友は友ならずと親しきも疎くなりたまへ其座に
 行掛り一ツ二ツを聞待に魚物野菜の鹽梅咄し煮焼の善悪たかたうの
 酢加減甘ひ辛ひを云合すやから納豆の觸賣は新形村ハ格別下直中
 の椀一杯か五文分酒の直段も昨夕より一文下けと悦ひ合ひ御酒も最
 早酌酌せり此上は醒ぬ間と茶も吞す暇を乞て歸りよは月々出たやら
 かたむひたやらかたむひたやらいつも空にはありあけと笹本挑灯に
 道をてらし河豚かよかると云合せて我家々々引分る中昔の附合は霏
 くを凌ん爲思ふ友に案内して後園の茄子芋子小鍋一ツをもてなして
 油火のあるかざり過來し旅の道すがら海山の物語世間に障らぬ口合
 など折々ありて高笑も一興なりし百年前の咄も絶へ此頃の變事を聞
 ん密夫のあらわれ郷中の推借古借の尻押女連の出奔役所の金銭遣ひ
 込み似證文過酒のすつば拔書記すべき一事もなし昔どても聞けれ共
 士の意氣地あり彼百歩に五十歩のちかひいづれにも論無し今及傷の
 死生は却て下賤にあるよふなり相對死も義死の端どか聞し(後略)
 翁ハ士道ノ衰ヘタルヲ慨シテ心耕録ヲ著シ以テ之ガ振起ヲ策リシモ風
 俗ノ潰頽豈一朝ニシテ止ムベケンヤ文化ノ初メニ至リテ益々其暴ヲ極

藩學

メ遂ニ所謂天狗ナルモノ、現ハレ出ヅルニ至レリ是レ蓋シ人ニ對シテ
 私怨ヲ懷クモノガ其徒黨ヲ糾合シ夜ニ乗ジテ其人ノ家ヲ襲ヒ門戸ヲ壞
 リ屋壁ヲ頽チテ以テ其怨ヲ報ズルナリ世ニ傳フ藩主忠徳公嘗テ外出ス
 途次新タニ屋壁ヲ破ラレタルノ家ヲ見怪ミテ之ヲ侍臣ニ問フ侍臣答フ
 ルニ天狗ノ所爲ナルヲ以テシ詳ニ天狗ノ由來ヲ説ク公大ニ歎シ之ヲ匡
 正スベキノ策ヲ問フ白井重行答ヘテ曰ク之ヲ匡正スルノ策豈一朝夕ニ
 シテ能ハンヤ願クハ藩學ヲ起シ教育ヲ以テ漸次之ガ改良ヲ望ムニ若カ
 ズト公固ヨリ學ヲ好ム直ニ重行ノ議ヲ用ヒテ以テ學館ヲ建テ四民ノ入
 學ヲ許シ重行ヲ以テ祭酒トシ專ラ教育ノ事ヲ司ラシメ徂徠ノ學ヲ祖述
 シテ程朱ノ學ヲ排斥シ忠孝仁義ヲ基礎トシテ實行實踐ノ法ヲ授ク是ニ
 於テ其學派ニ就テ大ニ異端ヲ挾ムモノアリ加藤大貳ノ如キハ熱心ナル
 朱子學派タリシガ故ニ徂徠ノ書ヲ見ルヤ直ニ取ツテ之ヲ碎裂シ之ニ放
 尿シ決シテ學館ノ方ヲ枕ニセザリシト云フ然レモ重行敢テ撓マズ精益求精
 勵シテ事ニ從ヒシト云フ其詳細ハ請フ下卷ニ於テ之ヲ見ヨ
 此頃外船時々近海ニ出沒シ天下漸ク多事ナラントス文化四年六月箱館
 奉行ノ通報ニヨリテ藩士若干ヲ箱館ニ送り以テ外船ノ襲來ニ備フ九月

箱館ノ戒

歸ル
 其年八月學館養老之間ニ於テ七十歳以上ノ隱居三十人ヲ召シ之ニ食ヲ賜ヒ以テ敬長ノ教ヲ示ス
 六年十一月是ヨリ先キ莊内公領預地ハ年ヲ限リテ支配シ居リタリシガ自今永久ノ預ヲ命ゼラル

第十五章 天保時代

天下多事
 今ヤ天下大ニ亂レントシ將ニ王武ノ衝突ヲ起サントスルノ時ニ際シ文政八年將軍家齊攘夷之令ヲ布告シ漁民ノ竊カニ外人ト洋中ニ貿易スルヲ禁シ又各國ノ諸侯ヲ警メテ非常ニ備フルノ計ヲ講ゼシム九年夏ニ至リテ江戸盜賊横行シ路人ヲ殺掠ス各藩ニ命ジテ逮捕セシム
 世或ハ傳フ時ノ老中水野忠邦ハ莊内藩主酒井忠器公ト好ラズ故ニ常ニ苦役ヲ莊内藩ニ課シテ以テ自ラ快トスト事全ク信ヲ措クニ足ラズト雖モ然レモ天保十一年ニ越後長岡ニ改領セラレントセシコトアリ又天保十四年印旛沼疏鑿ノ時ニ於テ莊内藩ノ人夫ヲ驅使セラレシガ如キ世傳ノ起ルモ亦實ニ其據無キニアラザルナリ然レモ改領ノ議熟セズシテ已ム百姓大ニ喜ビ業ヲ休ミテ大ニ祝シ殊ニ私ニ忠器公ノ爲メニ廟社ヲ建テ、之ガ萬福ヲ祈ルモノアルニ至レリ(西郷村大字馬町船尾社下ニ小社アリ即チ是レナリ)

印旛沼工事

移封ノ説

天下多事

天保騒動

天保十三年五月二十三日公領御預ヲ停メラレテ最上尾花澤陣屋御代官大貫治右衛門ノ支配トナル酒井侯特ニ布告シテ公領ノ各村ヲ通行スルノ時ニ際シテ其公用ナルト私用ナルトヲ問ハズ諸事謹慎ヲ旨トシテ決シテ粗暴ノ舉動アルベカラザルヲ達ス時ノ所謂公領トハ田川郡六十五ヶ村―新興屋論田、興屋、丹波興屋、高田、千川原、横島、丸沼、二十六木、落野、大宮、木川、局杉浦、深川、丸岡、備前鹽田、備前興屋、和名川、東渡前、幕内、大川渡、上中野、目、蛸井、興屋、平足、川尻、鷺畑、東堀越、市野山、大口、中谷地、館、町、興屋、南口、朝丸、茗荷、瀬柳、田道方、西小野方、大野、境興屋、南興屋、南野、中野、南野、新田、大山、砂押、面野山、枋屋、湯濱、播磨、京田、東沼、菖蒲沼、尾花、天神堂、友江、下小中、柳原、新田、漆曾根、角田、二口、善阿彌、野中新田、堀場―飽海郡三ヶ村―飛鳥、田尻、砂越―由利郡二ヶ村―小砂川、大砂川―ナリ本記公領七十ヶ村ナリ是レ蓋シ録リナラン七十三ヶ村アルベキガ至當ナリ然レモ今暫ク此邊書チ出セシ時ノ書類ニヨリ訂正チ加ヘズ表出ス尙圖面チ見ヨ

然ルニ天保十五年即弘化元年二月又之ヲ酒井侯ノ御預所トナサルヤ公領ノ民大ニ騷擾シ或ハ東上シテ事情ヲ開陳シ徒黨ヲ結ビテ舊ノ如ク

据へ置カレンコトノ運動ヲナス左ノ數書ハ時ノ争擾ニ關スルモノ蓋シ
事態ヲ知ルニ最好ノ資料ナレバ繁ヲ厭ハズシテ讀者ノ參考ニ供セン

乍恐以書付款願奉申上候

公領民ノ歎願

大貫治右衛門御代官所羽州田川郡飽海郡由利郡御料所七十三ヶ村小
前役人惣代大山村御陣屋附何組何村誰々奉申上候私共村々之儀は往
古酒井備中守様御領分其外御私領御坐候處寛文八申年中右備中守様
御死去後御家斷絶致候に付翌九酉年々御上地相成御代官松平清兵衛
御支配相成其後追々御代官様相替寛延元辰年引續御料所に御坐候所
同二巳年中御名様々度々御願立被遊候付御預所に相成候所御同人様
御老中被蒙仰候付御預地は不殘御上地相成引續明和六丑年迄御料所
は御坐候所同年七月中又候御名様御預所被仰付同年々去々寅年迄七
十四ヶ年之間御同家様御預役所被候得共私共村々之儀ハ御預所之事
故兎角御私領村々とは御取扱之振合御隔意有之候様相見尤御預地村
々は御名様御大高御領分之御私領村々之間に被滿所々有之候付是迄
數十年中之内村々用水掛惡水仕或境地等之義に付御私領村方と相掛
引合候義に付度々有之候得共何レモ御私領村々而已之勝手宜様に御

取捌相成貸金買掛不作買米滞又は縁組井喧嘩口論奉公人等之出入等
も間々有之若御預地御役所との御引合に相成候ても毎度御私領村方
にて辨理筋能相成候間御料所村々之義十二分之理合有之候ても御料
村方之者共ハ都ての義相叶はず様之振合に相成行其上鶴岡御家中様
方釣獵或は鳥取遊參等度々多人數御出張被成候節御預所之分谷地御
林等踏荒し作方田畑等々迄踏込候義平常有之折に振見答候得共權柄
に威され打擲等被致居候義度々有之御料所村々の者共心外難義難申
次第にて既に大山御料之節御陣屋元に相成候村方にて明和度迄は家
數一千軒も御坐候所御名様御預所に相成候已後近年難澁相嵩潰退散
之者多出來當時にて家數漸七百軒程ならて無之彼是七十ヶ年程之間
に家數三百軒程相減御料所外村々逆も右に准し家數人數共餘程減少
仕候趣にて通行にては御料所村々一同往々は亡村致候基と村役人始
小前末々に至迄日夜歎息愁傷罷在候所去々寅年七月中大貫治右衛門
御代官所被仰付候已來至極御取締相附鶴岡御家中様方も釣獵鳥取都
て遊參被成候ても亂妨不致質素穩便と心掛氣儘も無之御料所村々之
者共一同安堵積年愁鬱相晴申候耕作農行商等出精致丹精仕年數立候

は、往々は困窮難澁も相理先年之如村柄も立直候義と郡中七十三ヶ村難有存罷在候處當辰年二月十五六日頃江戸表々鶴岡御家中に御飛脚罷下右様子承候所御代官所七十三ヶ村之義又々御名様御預所に付趣風聞付村々動傳周章罷在今般御預所に相成候は、已前之通鶴岡御家中様方并御私領村々之者共我儘不法被致候は眼前之儀と御料所村々小前共悲歎に沈み農作等も打捨只恐をも不願村々を東西に驅歩行狂氣之如立騷罷在村役人共何様取鎮候ても更に聞入不申今度如元御名様御預所に立戻候様相成候ては迎も安穩に百姓永續無覺束御料所村々一同潰退轉之村に及候基と悲歎罷在七十三村一村限小前連印致役人共迄歎願書差出村々難澁仕候間村役相勤候私共分取鎮方當惑仕御支配所も願出候得共只に御教諭而已にて御取上無御坐候に付不奉願恐をも此段歎願奉申上候何分格別之以御慈悲前之衆々村々難澁仕詰し次第邊々御質素被成下置幾重にも村柄立直候迄御代官所に御居直七十三ヶ村御扶助被成下置度一同奉願上候以上

天保十五年辰四月
大貫治右衛門御代官所
田川郡

飽海郡 由利郡

右三郡七十三ヶ村

小前一同

村役人惣代兼

何組何村名主誰印

何組何村百姓誰印

訴訟人拂田村與治兵衛

外ニ差添人

大山下川枋屋名主連印畧ス

編者曰ク前書差出シタル後別ニ御沙汰無之ニ付二度目ノ歎願書ヲ差出シ鶴岡家中ノ亂行ヲ巨細ニ書記シテ鶴岡家中亂妨之仕癖相止候迄は御代官所に御居置七十三ヶ村御救助被成下置度偏奉願上候ト云フ文意ニテ永々シキ書面アレバ前書ヲ折リ返シ嚙ミ碎キタルモノニ過ギザレバ今ハ之ヲ畧ス

天保十五年辰五月六日御用番牧野備中守様御勝手掛土井大炊頭様

酒井侯ノ表書

被指出

大貫治右衛門御代官所内當二月私に御預所被仰付候田川郡飽海郡由利郡村々之者共假陣屋有之候大山に先月二十六日追々群集右村之口々并村中にも所々竹矢來を結廻し橋半分程引拂之場所も有之不容易躰相聞右は何等之義に候哉不相分に付同日治右衛門手付大山詰松山桑太郎の人数出方都合其外取鎮方用向等及所談候様申付役人共遣大山村入口に罷越竹矢來際番人罷在候に付用向有之陣屋へ罷越候段申述候處扣立候様申聞扣居候内所々にて半鐘を打度々鯨波聲を唱立人数大勢矢來内に罷在候付右之者ヲ以元之者に面談之義申入遣候所此節人氣立に付夜中間違有之候ても如何に付明日參吳候様申越候付無餘儀罷歸翌二十七日猶又大山へ指遣候所鶴ヶ岡之大山村に海道板橋半切落し往來を立切所々旗様之品相立螺之貝半鐘等村々に相聞其外村中山上焚火等も相見右村道大勢之者徘徊仕候次第人数不少躰に相見候右様徒黨籠り者之躰いたし方容易ならざる躰に相聞兼て被仰出向も有之手延にも難相成同日早速物頭二人に足輕百人爲添領分界限出張扣居治右衛門手付には取鎮方用便として罷出候付用向も

候は、申付候様掛合之上取鎮方可申旨申付未治右衛門手付へ掛合之様子不相分候得共前晚二十六日之夜元之者に對談致兼猶又指遣候所海道通路不相成脇道々漸大山村を經野道へ罷出候所治右衛門手付加藤鎮五郎の行逢一通及所談候得共委細は元之者に面談之上大山村に罷越候心得之旨申述候處右村に罷越候儀迷惑之趣申聞候付左候は、元之者に書狀家來へ爲持遣度趣等色々掛合候得共承引無之に付無止事相待候得共出役先々申越是又様子委細不相分候得共大山村之仕様不容易躰に付猶追々申越候得共先右之段一通近所役人々申越候に付此段御届ヶ申上候以上

五月

酒井左衛門尉

昨日御届申上候大貫治右衛門御代官所之内當二月中私に御預被仰付候郡中村々之者共大山村に追々大勢群集不埒之次第に付先月二十七日物頭二人足輕百人差添領分界限差出候處右村假陣屋詰之者夫々致手當百姓追々退散取鎮候趣翌二十八日夕方治右衛門手付之者役人共の申談有之彌靜謐之模様に付同廿九日人数引揚候旨在所役人共の申越候依之御届申上候以上

結局

五月 酒井左衛門尉
 俗是ヲ大山騷動ト云フト雖モ是レ固ト大山ノミノ騷動ニアラズ言ヲ換
 フレバ御料地ト私領トノ多年鬱積セシ爭論ガ遂ニ此處ニ破裂セシナリ
 同年七月十一日幕府急ニ令ヲ傳ヘテ八州吟味役某ヲシテ大山ニ至リ夜
 ニ乗ジテ首魁ノ家ニ就キ之ヲ逮捕シ次デ公領各村ノ名主等ヲ捕ヘテ皆
 之ヲ越後ノ鹽ノ町ニ移シ其他該事件ニ關係ヲ有セシモノヲ軒毎ニ召シ
 此處ニ其吟味ヲ遂グ引致セラル、モノ道途冠蓋相望ミ絡繹トシテ絶エ
 ザリシト云フ遂ニ主謀者五名ヲ江戸ニ監送シ牢死セシメシト云フ事漸
 ク止ミ爾來七十三ヶ村ハ御預地トナリ慶應年中全ク酒井侯領ニ歸セシ
 メラレタリ

第十六章 戊辰之亂

維新前ノ形勢

公武ノ意見次第ニ相募リテ今ヤ將ニ大衝突ヲナサントスルノ時ニ際シ
 所謂浪士ナルモノ各所ニ徘徊シテ此衝突ヲ以テ愈激シカラシムルノ勢
 ヲ助長シ一方ヲ追放スレバ他方ニ集リ江戸ニ追ヘバ京ニ往キ莊内ノ浪
 士清川八郎ハ江戸ノ人安積五郎等ト相結ビ大ニ攘夷之説ヲ唱ヘ朝野ノ

間ニ周旋シ又深ク薩長ノ諸藩士ニ結ビ大ニ爲ス所アラムトス幕府新ニ
 兵ヲ募ル是ニ於テ八郎浪士ヲ率ヒテ新選組ト名ケ自ラ之ガ隊長トナリ
 機ヲ見テ事ヲ發セントス幕府大ニ之ヲ悔ヒ八郎ヲ逮捕セシム八郎所在
 潜伏シ遂ニ人ノ爲メニ殺サル
 此時ニ當リテ長藩ハ其機敏ナル眼光ヲ以テ幕府ノ權勢ノ傾キ來リタル
 ヲ洞見シ朝臣ト相結ビ英艦ヲ討チ幕使ヲ拘シ其ガ欲ヲ逞フセザルハナ
 シ縉紳モ亦長藩ヲ德トシ深ク長臣ト相携ヘテ以テ江戸ニ抗セントス此
 際舊誼ヲ重シ幕府ノ肩ヲ持チシモノハ何時モ受動ノ地位ニアリテ勢威
 自ラ引ケ目ナレバ所謂浪士ナルモノハ勢ノアル所ヲ煽動シ理想界ニ活
 歩セントノ野心ヲ懷キ客氣ノ盛ナル動體ナリシガ故受動ノ地位ニ立チ
 テ幕府ノ肩ヲ持チシモノハ一人モ是レアラザリキ事態既ニ然ルガ故ニ
 一度ハ平穩ニ條約ヲ締結セントセシ幕議モ多數ノ蟬噪ニ妨ゲラレテ終
 ニ攘夷ノ説トナリ若シ墨艦ノ再來スル事モヤアラバ直ニ之ヲ打チ拂ハ
 ント用意オサシ、怠リナク吾莊内藩モ江戸勤番ノモノニ令シテ軍備ヲ
 整ヘ軍隊ヲ部署シ品川灣頭ニ一砲ヲ聞カバ直ニ驅ケテ之ニ赴クベシト
 ノ命令ヲ傳フ人心爲ニ洵々タリ然ラト雖モ幕府ニ於テ攘夷ヲ行フノ甚

騷擾

夕至難ナルヲ知リ容易ニ事ヲ舉ゲザルナリ此機ニ乗ジテ長藩ハ益執拗
 ヲ極メ幕府遂ニ軍ヲ動シ長藩ヲ征討セザルベカラザルノ止ムヲ得ザル
 境涯ニ至レリ
 是ヨリ先キ薩長ト相好ラズ常ニ相睥睨ス長藩益下ヲ騷擾スルニ於テ薩
 藩會桑二藩ト力ヲ合セ之ヲ拒グ既ニシテ薩藩以爲ク今ヤ社稷危急ノ時
 ニ迫レリ何レゾ國內ノ紛擾ニ吃々トシテ對外ノ策ヲ忘却スベケンヤト
 是ニ於テ密ニ長藩ト交ヲ結ブ幕府之ヲ知ラザルナリ慶應元年再ビ長藩
 ヲ征ス勝ツコト能ハズ物情騷然而シテ外ニハ英米佛等ノ開港ノ期ヲ迫
 リテ切リニ上書スルアリ幕議今ヤ紛擾ノ極ニ達セリ慶應三年十月慶喜
 上表シテ職ヲ辭ス十二月詔シテ慶喜以下諸有司及在京ノ列藩ヲ召ス皆
 疾ト稱シテ朝セズ朝廷人ヲシテ其入朝ヲ促サシム
 此時ニ當リテ徳川島津ト相仇視ス蓋シ浪士ノ江戸薩邸ニ潜匿スルモノ
 所在抄掠シ庶民其兇横ニ苦ム時ニ庄内ノ兵市中ヲ巡邏シ非常ヲ警戒ス
 浪士横行庄内ノ兵營ヲ砲撃ス庄内ノ兵大ニ怒リ幕命ヲ享ケテ薩邸ニ逼
 リ浪士ヲ引致セントス薩邸應ゼズ即チ薩邸ニ火シ數十人ヲ殺獲シテ而
 シテ歸ル慶喜薩人ノ亡狀ニシテ市中ヲ横行スルノ事狀ヲ上奏シ其藩士

薩邸砲撃

戊辰ノ亂

ノ朝政ニ參スル者ヲ罷メント請フ省セズ是ニ於テ益々薩藩ト隙アリ明治
 元年正月三日慶喜大阪ヨリ兵ヲ率ヒテ上京セントシ先鋒先ヅ伏見鳥羽
 ニ達ス薩長ノ兵二關ヲ守リ大兵ノ内ニ入ルヲ拒ム遂ニ事破レテ叫喚突
 馳ノ修羅場トナリ以テ戊辰ノ亂トナレリ
 幕軍遂ニ戰勝タズ大阪ヨリ船ニ乗ジテ江戸ニ至リ江戸城ヲ守ラント議
 スルモノアリタリシガ勝安房ハ之ヲ開放スルコトヲ主張シ慶喜全ク恭
 順ノ狀ヲ呈セリ事態既ニ斯ノ如クナレバ幕軍ノ中或ハ兵ヲ納メテ歸服
 ノ意ヲ表スルモノアリ或ハ隊ヲ組ミ所々ニ屯集シ所在薩長軍ニ抵抗ス
 ルモノアリ吾莊内藩及會津米澤ハ各藩ニ歸リ關門ヲ鎖シテ以テ薩長軍
 ニ當レリ
 吾藩是ニ於テ兵ヲ募リ士十五六歳以上ノモノハ皆爭ツテ軍ニ趨キ農民
 町人ヲ驅リテ是レ亦數多ノ軍隊ヲ組織シ四方ノ守門ヲ嚴ニシテ先ヅ兵
 ヲ新莊秋田越後ニ發シ向フ所前ナク新莊ヲ燒キ越後ヲ徇シ秋田城ノ陷
 ル將ニ旦夕ニアラントス然ルニ會津先ヅ破レ米澤既ニ歸降シ仙臺南部
 亦兵ヲ收ム莊内藩モ亦相次ギテ降ル實ニ明治元年九月ナリ藩主忠篤公
 致道館ニ避ケテ罪ヲ待ツ朝議敢テ深ク之ヲ咎メズ磐城平ニ轉領セラレ

ルノ命アリシガ事ナクシテ止ミ明治二年版圖ヲ奉還セシガ其年七月舊ニ復シ庄内ヲ大泉ト改メ忠篤公大泉藩知事ニ任ゼラル

編者曰ク戊辰ノ役今深ク之ヲ書セズ當章冒頭薩長幕ノ關係ヲ叙スルコト多キモノハ編者ノ心中少シク期スル所アレバナリ戊辰ノ役吾藩實ニ強硬戰陣大ニ雄武ヲ現ハセシモ既ニ錦旗ニ敵シ賊軍ト目セラレタル上ハ亦如何トモナスベカラザルナリ讀者戊辰ノ役ヲ尙詳密ニ知ラント欲セラル、アラバ戊辰出羽戦記ノ如キ書ニ就テ見ヨ其吾藩ニ關スルノ記事甚ダ錯誤スル所アレモ錯誤スルト錯誤セザルトハ今ニ於テ之ヲ問ハズシテ可ナリ

第十七章 明治維新

廢藩置縣

明治四年七月藩ヲ廢シテ縣ヲ置キ廳ヲ酒田ニ置キ酒田縣ト稱シ以テ田川飽海ノ二郡ヲ管ス是ヨリ先キ明治元年出羽ヲ分チテ羽前羽後ノ二國トナリ最上川ヲ以テ境トナシ以南ヲ羽前トシ以北ヲ羽後トナス又大泉藩士ヲ催フシテ後田山開墾ニ從ハシメ又別ニ壯丁ヲ募リテ北海道開拓ノ業ニ從ハシム今酒田縣治ノ統計ヲ掲ゲテ左ニ之ヲ示サン

酒田縣治覽表

Main data table with multiple columns: 縣廳 (County Office), 反別 (Reverse), 戶籍 (Household Register), 職員 (Officials), 歲入 (Income), 歲出 (Expenditure), 家祿 (Family Allowance), 藝印 (Arts/Printing), 學校 (Schools), 褒賞 (Honors), 囚獄 (Prison), 罹災 (Disaster), 堤防 (Dikes), 橋道 (Bridges/Roads), 神社 (Shinto Shrines), 大名 (大名), 大村 (Large Villages), 船銃 (Ships/Artillery), 宗門 (Religious Sects), 諸方里程 (Distances), 郵便所 (Post Offices), 陸運所 (Land Transport), 物産 (Products), 輸出入 (Imports/Exports), 管內物産 (Local Products), 管內費消 (Local Expenses), 外ニ陸運ノ物品 (Goods transported out of the county).

明治六年十二月調

北緯 三十八度五十四分 仙臺鎮 臺分
東山形縣 南新瀉縣 北秋田縣
經緯 三十三度三十七分

田川 二百三十八町三反三畝三厘
仙臺 二百三十八町三反三畝三厘
秋田 二百三十八町三反三畝三厘
新瀉 二百三十八町三反三畝三厘
北緯 三十八度五十四分
東山形縣 南新瀉縣 北秋田縣

米九百九拾一石八斗〇五合
米三百二拾五石七斗三升二合
金一千六百十圓
金七百九十五圓十二錢五厘

醫學 酒田 一
和學 漢學 洋學 學
大講義 一
中講義 二
小講義 以下十一人
少講義 以下十一人
教職試驗 一百十五人
長 百歲 一人
壽 八十八歲 三十三人

火災 四十四度
農商 六十三戶
船破 二十五艘
死男 一人
死女 一人
變男 二十一人
變女 八人

酒田下日枝神社 氣比神社 御嶽神社 春日神社 八幡神社
白山神社 二百八十四
三百四十一

赤川橋長八十間
日向川橋長四十間
日向川橋長四十間
湯澤山山崎二堰蓋ヲ築ク凡三里餘
湯澤山山崎二堰蓋ヲ築ク凡三里餘

酒田 山形 鶴岡 小名部 田澤 横山 松嶺 町村 飛鳥
酒田 山形 鶴岡 小名部 田澤 横山 松嶺 町村 飛鳥
酒田 山形 鶴岡 小名部 田澤 横山 松嶺 町村 飛鳥
酒田 山形 鶴岡 小名部 田澤 横山 松嶺 町村 飛鳥

最上郡ヨリ酒田及ヒ郷村へ川船ニテ材木并薪輸入管下田川郡海濱村ヨリ新瀉縣管内へ海船
一万二千三百六十四圓四十六錢九厘同管内ヨリ酒田港へ輸出米穀ハ未取調中 但輸出入ハ明治四年辛未ノ調

山形縣

町村制

明治八年、廳ヲ鶴岡ニ移シ、鶴岡縣ト改メ、其九年八月、山形縣ニ合併ス。爾來人文日々ニ進ミ、交通次第ニ繁冗トナルニ從ヒ、都邑ノ盛衰モ亦尠カラズ之ヲ要スルニ從來城下ニ依テ立チ別ニ地方ノ興業トシテ事業ノ富ヲ造ルモノコレアラザル地ハ自然ノ淘汰ニヨリテ次第ニ戶口ヲ減シ、繁盛ヲ減シ來レリコレ實ニ已ムヲ得ザルノ勢ナルベキカ

明治九年、田川郡ヲ分チテ東西ノ二郡トス

明治二十二年、町村制ヲ施カル、ヤ酒田、鶴岡、松嶺ヲ以テ町トシ、次デ大山、加茂モ共ニ町名ヲ名ルニ至ル新制實施ノ時ニ於ケル各分合ヲナシタル町村ハ實ニ左ノ如シ

飽海郡 二町 二十七村

町 酒田、松嶺

村 上郷、内郷、田澤、北俣、南平田、東平田、北平田、中平田、鶴渡川原、西平田、飛島、上田、本橋、一條、大澤、觀音寺、日向、西荒瀬、南遊佐、稻田、西遊佐、遊佐、藤岡、一郷、川行、高瀬、吹浦

東田川郡 二十六村

村 大泉、本郷、山添、黄金、齋、東、黒川、廣瀬、泉、渡前、横山、押切、廣野、長沼、八榮

島、藤島、東榮、手向、狩川、立谷、澤、大和、十六合、五七里、余目、新堀、榮、

西田川郡 三町 十三村

町 鶴岡、大山、加茂、

村 京田、榮、東郷、大泉、田川、福榮、温海、念珠、關、豊浦、上郷、西郷、袖浦、稻生、

是ニ於テ各町村議員ヲ撰舉シ各町村長ヲ互撰シ自治ノ機關大ニ備ル明治二十三年帝國議會ノ開カ、ルヤ東西田川飽海ノ三郡ヲ以テ山形縣第三區ノ撰舉區トシ第一期ノ衆議院ニハ駒林廣運、島海時、雨郎、二氏當撰シ此議會第二期ニ於テ解散セラレ第三期ノ議會ニハ本間耕曹、齋藤良輔ノ二氏當撰セリ近年各處ニ鑛山ノ發掘セララル、アルモ皆其設計ノ足ラザルガ爲比々トシテ閉鎖スルモノ相繼グ

莊内史上卷終

莊内史

下卷

藤山豊編著

第一章 大梵寺城考

地名 經始

東田川郡湯殿山ニ源ヲ發シテ諸他ノ水流ヲ合セ北流シテ最上川ニ入ル之ヲ大梵字川ト云フ世傳フ昔時此川水面ニ阿字ヲ畫キテ流ル故ニ之ヲ大梵字川ト云フト又俗或ハ之ヲ赤川ト云フアリ蓋シ湯殿山ノ瀑布ノ落テテ流ル、所ナレバ或ハ之レ阿迦ノ轉訛ナルニヤ此川ノ西岸ニ當リテ鶴ヶ岡アリ此地ハ固ト大梵寺ト稱ヘテ此處ニアリシ處ノ城ヲ大梵寺城ト云フ

今其由來ヲ考フルニ經始全ク明カナラズ或ハ曰ク後三年ノ役ニ當リテ源義家全ク出羽ヲ平定シ自ラ出羽國守トナリ最上郡ニアリシ處ノ國府ニ在テ國務ヲ處理セシ時ニ於テ藤原光廣ヲシテ此城ニ居住セシメ以テ一方ノ鎮トナス子孫三世ニ傳ヘ大膳亮廣利其子刑部大輔廣正父子ヲ鎌

武藤氏

倉ニ召致シ蝦夷ガ島ニ配流スト是レ王代古遷記ナル書ニヨリテ引證スル所ナリト云ヘ其王代古遷記ナルモノハ如何ナル書籍ナルヤハ殆ト知ルニ難ケレバ從テ其考證モナシ能ハズト雖モ然レモ義經記ニモ大泉莊大梵寺城ト記載アレバ其由來ノ久シクシテ既ニ王時代ヨリコレアリタルモノナルベシ此城固ハ郡司莊司等ノ居館ナリシナルベク武藤氏ノ大泉地頭ノ職ニ拜スルヤ此處ニ居テ以テ庄務ヲ處理シ兼テ羽黒山ノ別當ヲモ務メタリシナルベシ其季世尾浦ニ在城スルヤ大梵寺ニハ城代ヲ置テ以テ之ヲ鎮セシメタリ蓋シ前森氏ハ世々城代トナリテ大梵寺ニ在城シ越羽戰爭ノ起ルニ及ビ十五里原ニ出陣シ千安合戦ノ節戦没シ尾形ト共ニ前森ノ族黨悉ク滅亡ス或ハ曰ク藏人男アリ此役ニ逃レテ最上氏ニ歸ス義光其父ノ忠武ヲ彰シ本庄豊前守ノ部將トシテ以テ藏人ノ後ヲ立テシム是レ即チ後ニ前森近江守ト云ヒシ人ナリ其子筑前守氏永一万二千石ヲ領シ元和ノ初龜崎鶴ヶ岡ノ城代タリシト然レモ元和ノ初メニ鶴ヶ岡龜崎共別ニ城代アリ前森筑前ノ城代タリシト云フハ享ケ難シト雖モ義光ガ藏人ノ遺子ヲアゲテ之ニ祿ヲ給シ藏人ノ後ヲ立テシメシト云フハ或ハ事實ニ近キガ如シ武藤氏亡ビ莊内一面上杉ノ領下トナルヤ

上杉氏

檢地騷動

始メ義勝ハ尾浦ニ在城シタリシガ大梵寺ニ誰ヲ置キシヤヲ知ラズ此邊一面本庄繁長ノ所領トナリ檢地騷動ノ折ニハ其部將木戸玄齋ナルモノ常城ヲ守リ居リタレモ衆寡クシテ一揆ノ銳鋒ニ衝ル能ハズ横山藤島等ノ守將ト共ニ尾浦ニ退ク當城忽チ一揆ノ所有トナリシガ間モナク景勝ノ聲援ニヨリテ尾浦ヲ圍ミタル平賀ノ手兵大ニ敗レ一ビハ退テ當城ニ支ヘントセシガ上杉勢ノ迅速ナル襲來ニ由リテ備ヲナス能ハス追究セラレテ藤島ニ走ル是ニ於テ大寶寺領ヲ直江兼續ニ賜ヒ藤島ノ衝ニ當ラシム兼續之ニ據リテ遂ニ藤島ノ殘賊ヲ勦滅シ老臣穗村監物ヲシテ當城ノ城代トス城下長泉寺ニ判物アリ

於嶋島村二十石之處本領之外ニ令寄進候畢永可被所務者也

天正十九年霜月廿三日

長泉寺

直江山城守 花押

所々ニ代官ヲ置キ本賦ノ事務ヲ分掌セシム慶長二年上杉家會津ニ移サレ百万石ヲ給セラル、ヤ直江山城ハ米澤三十万石ヲ領シ兼テ庄内川南ヲ並領シ尾浦城代下次右衛門ヲ以テ旗頭トナス此時兼續米澤ノ下長井ヨリ大鳥村ヲ經テ莊内ハノ古道ヲ修メ以テ往還ヲ便ニス此道武藤氏ノ

頃ヨリアリシナルベク大鳥川ニ架セル橋ヲ今ニオ、ラノ橋ト云フハ或ハ尾浦ニ通ズベキ橋ト云フナルニヤ其五年上杉氏徳川氏ト兵ヲ構ヘ莊内亦大ニ亂レ武藤氏遺臣ノ所在潜伏セルモノ相糾合シテ藤島城ヲ襲ヒ添川ノ楯ニ據ル下次右衛門之ヲ討チテ漸ク鎮撫ニ歸ス即兵ヲ派シテ最上ニ突入シ直江兼續ト共ニ最上義光ニ迫リ連戦皆勝チ將ニ山形ヲ襲ハムトセシニ當リ上杉景勝關ケ原ノ敗報ニ接セリ兼續之ヲ秀久ニ告ゲズ暫クシテ之ヲ知リ大ニ兼續ノ不正ヲ憤リ義光ニ降リ兵ヲ反シテ莊内ニ亂入シ直ニ討チテ尾浦大寶寺ヲ畧シ翌年遂ニ東禪寺ヲ攻メテ之ヲ陷ル莊内全ク最上氏ニ歸ス是ニ於テ義光當城ニ住セントシ從來只牙城ノミナリシヲ二ノ丸ヲ造リ又本丸ノ殿舎ヲ修築シ山形ヨリ民ヲ移シテ以テ町内ニ住セシメ其町名ハ多ク山形ノ町名ニヨリテ命ズ故ニ今兩地其名ヲ同フスルモノ少カラズ蓋シ義光ノ移リシ頃ハ大梵字川未ダ城ノ南邊ニ通リ今ノ上肴町ヨリ元曲師町ヲカケテ内川ノ流域トハナリシナルベシ是レヨリ先キハ大梵字川殆ト城ノ四面ニ汎濫シ只東北ノ一隅今ノ高畑ヨリ大寶寺ニ通ズル道ノミアリタリシナルベシ舊記ニ武藤家ノ尾浦城ニ遷リシハ大梵字川ノ怒漲甚ダシク到底一城主ノ居住スベキ城郭ニ

最上氏

地勢沿革

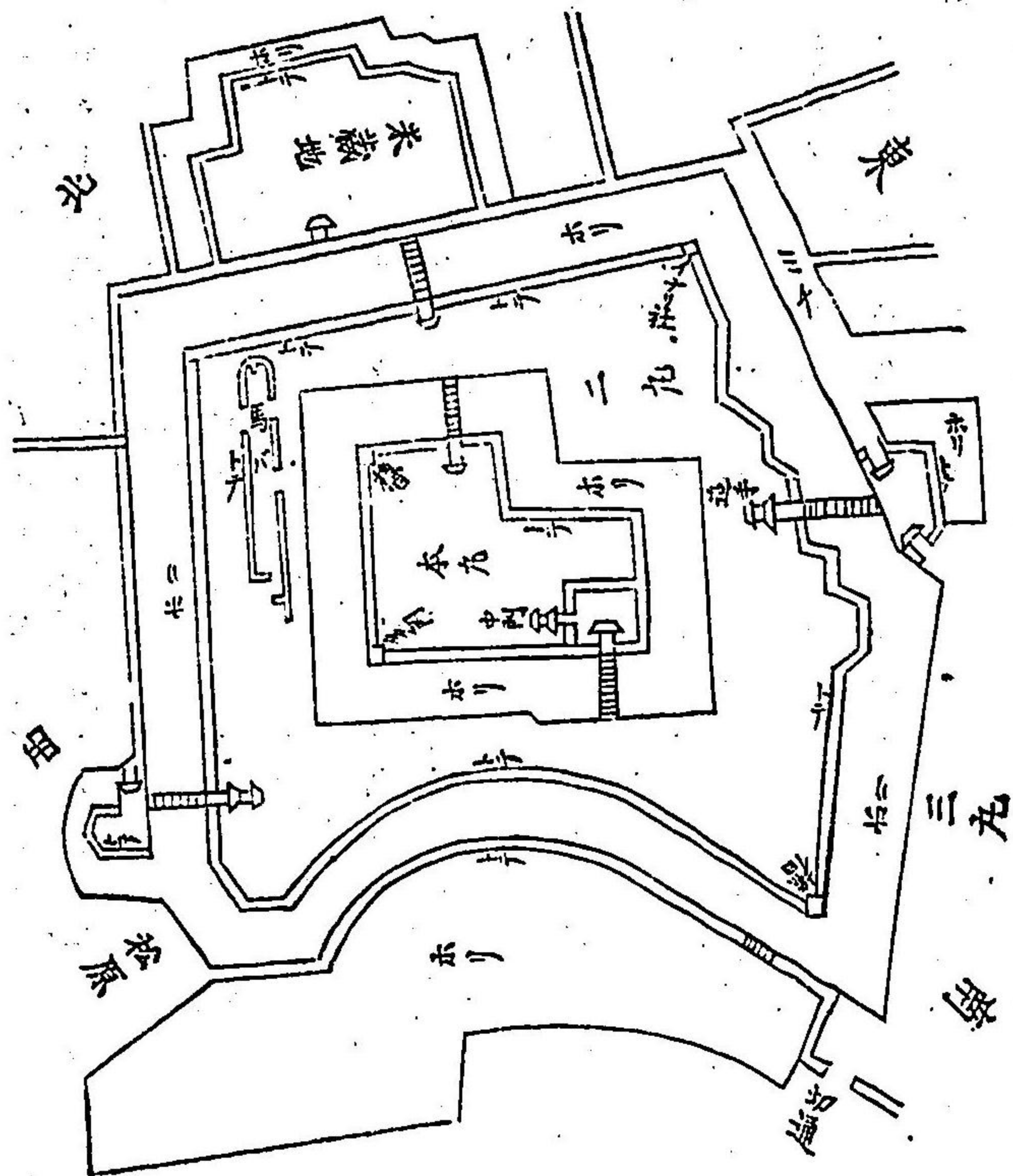
堪ヘザレバナリトアリ今地相ヲ見ルニ上肴町ヨリ元曲師町ニ通ジ百間堀ヲ押シテ馬場町ニ出テ新山田甫ニ至ルノ處通ジテ低地ニシテ川流ノアリシ證據確然タレハ武藤氏移城ノ頃ニ於テ此汎濫ヲナセシナルベキモ知レズ只當時ノ城趾ヨリノミ考フレバ到底戰國時代ニ適スベキ地理トハ云フヲ得ズ河流西方ヨリ東南ニ漲溢シ居リタルニ相違ナキヲ信ズ然レモ義光ノ時ニ於テ南方ノ川流漸ク其勢ヲ減ジ前記ノ如キ河流トナリシナラム何トナレバ後世酒井侯ノ封ゼラル、初メ今ノ馬場町ニ上肴町及七日町ノ町民ノ住居シタルアリタレド之ヲ今ノ所ニ移シ同シク上肴町及七日町ト名ヅクト云フコト古記ニ記載シアレバ義光ノ頃馬場町ニハ河流ノ汎濫シ居ザルノ證トナスベシ

義光當城ニ老後ヲ樂ミ慶長八年鶴ヶ岡ト改メ同十九年正月此處ニ卒ス城下ニ義光ノ判物ヲ有スル所ノ神社寺院少ナカラズ義光ハ能ク神佛ニ奉事シタリシト見ユ此時ハ鶴岡ハ城ノ東北ニ家居アリテ西南ニ亘ラザリシハ諸記録ニ徵シテ明カナリ酒井侯ノ入部セラル、ヤ即チ高畑ノ西端御花畑ト名ケシ處ニ假リニ殿舎ヲ營ミテ役ヲ促シテ本城ノ修繕ヲ急ガシム諸士百僚皆出デ、之ヲ督ス是ニ於テ移テ此處ニ居ル爾後或ハ町

鶴ヶ岡ト云フ名

酒井侯

鶴ヶ岡城 酒井氏ノ時



割ヲ直シ四方ノ往還ヲ修メ城中殿舎ヲ増築シ門樓ヲ造リ百間ヲ弘メ忠義公ノ時ニ至リテ漸ク今ノ如キ町割ノ形チツキタリシト云フ其後酒井侯ノ下ニ町内至ツテ靜穩ニシテ以テ明治ニ及ベリト云フ
 維新ノ後大泉藩トナリ藩主知事ヲ兼ネタリシガ明治四年藩ヲ廢シテ縣トナスニ當リテ當地酒田縣ニ屬シ同八年移應ノコトアリテ當地ニ移リ鶴ヶ岡縣トナリ其九年遂ニ山形縣ニ合併セラル

第一章 東禪寺城考

明治維新	經始	名稱	三十六人組
當城ノ經始儘カナラネバ種々附會ノ說ヲ逞フシ莊内昔雜談莊内要覽等ノ諸書ニハ或ハ府城ナルベシト稱ヘ或ハ桓武帝ノ代ニ村民ノ共同一致シテ取り建テタルモノナリト云ヒ殆ト抱腹ニ堪ヘザルコトノミナリ抑當城ハ其始メハ酒田城ト稱ヘ東禪寺氏ノ住スルニ至リテ自ラ東禪寺城ナル名稱トナリ後最上氏ノ時ニ於テハ龜ヶ崎城ト稱シ以テ酒井氏ノ代ヲ終フルニ至リシモノナリ			往時酒田ニ三十六人組ナルモノアリ傳ヘ云フ藤原秀衡ノ頼朝ノ爲メニ誅滅セラレハ其妹泉流尼白馬ニ騎シ三十六名ノ侍士ヲ從ヘ秋田ヲ經

酒田ト云フ名

テ莊内ニ來ラントス馬途ニシテ倒ル秋田ノ寺院ニ葬ル白馬寺是レナリ
 途ニ酒田ニ至リ庵ヲ結ビテ此處ニ居ル即チ泉流寺ナリト此時酒田ハ未
 ダ川南ニアリシト其後地勢ノ沿革ニヨリテ到底川南ニ居ヲ占ムル能ハ
 ズ酒田ノ民舍皆川北ニ移ルニ及ビテ三十六人ノ士先ヅ移ル即チ一町ヲ
 結ビテ住ス是レ即チ本町ナリト
 今熟舊史ニ徴シテ考フルニ田川郡大泉莊酒田湊ト云フ名稱ハ諸書ニ散
 見スル處ニシテ酒田林昌寺ノ鐘銘ニモ永祿三年華鯨一口令造鑄出羽國
 田川郡大泉莊酒田湊トアリ永祿ハ正親町天皇ノ時代ニシテ未ダ武藏氏
 ノ代タリシ時ナリ然ラバ昔時酒田城ト名クル處ハ何レナリシヤヲ尋ネ
 ンニ殆ト是レ想像ニ過ギザル臆説ナレト元來最上川ノ流域ハ幾多ノ變
 更ヲナシテ遂ニ今ノ銚子口ニ落ルニ至リタルナルヤ知ルベカラズ其初
 メ此川ハ今ノ鶴渡川原ノ東ヲ繞リ酒田ノ北ヲ流レテ海ニ朝セシモノナ
 リシガ其後或ハ文正ノ大水ノ頃ナリシガノ大洪水ニヨリテ所謂酒田ノ中央ヲ貫キ以テ酒
 田ヲシテ川南ト川北トニ分レシメテ向フ酒田トノ名稱モ起リシモノニ
 ハアラザルカ親任氏曰ク酒田即今川ノ北ニ在ト雖モ最上川往古五丁野
 ヨリ酒田ノ東ヲ北ニ向テ小湊ニ落チシ跡ノ見ユレバ其初酒田モ川南田

酒田沿革

川郡ニ孕レシ村立故後世天正頃川ヲ境シテ郡界又ハ領分境等ヲ改ラレ
 シ頃迄ハ田川郡ト唱來リシ處ナリシモ知ルベカラズト然レモ氏ハ向フ
 酒田ノ名稱ヲ解スルニ至リテ全ク此見解ヲ打テ消シテ元來酒田湊ト云
 フハ凡テ湊ノ總稱ニシテ其村落ヲ指タルニハアラズ故ニ酒田ハ地名ニ
 アラズシテ港名ナリト誠ニ牽強附會ト云ハザルベカラズ之ヲ要スルニ
 酒田ハ其初メ城下ニ内町組米屋町組酒田町組ノ三町アリテ多クハ川南
 笹原野即チ宮野浦ノ東方ニ部落ヲナセシガ固ト製鹽ヲ以テ邑ヲナス居
 タリシ處ナリシガ故近岸ノ樹木ヲ伐採シ盡シ住居ニ堪ヘザレバ遂ニ村
 ヲ舉ツテ川北ニ移住シ以テ今ノ埠頭ヲ開キシモノナルベシ安倍親任氏
 酒田沿革ノ大概ヲ叙シ盡セリ

酒田氏

人皇四十六代孝謙天皇天平勝實中夷賊ヲ征センカ爲ニ房崎ノ元徒卿
 始テ當城ヲ築キ是ヨリ下リテ寛治ノ頃佐藤某當城ヲ領シテ酒田二郎
 ト種ス太守清衡ノ幕下ニ在リ文治五年泰衡滅亡ノ折酒田家ハ鎌倉殿
 ニ謁シテ本領ニ安堵シ是ヨリ鎌倉家三代北條家九代ヲ經テ百五十年
 間奥羽ハ殊ニ靜ナリシガ足利家ニ移リ建武正慶兩朝ノ亂ヨリ本郡追
 々亂國ニ入り或ハ南朝ニ心ヲ傾ケ或ハ武家方ニ荷擔シテ隣領互ニ讎

東禪寺氏

ヲ磨ニ至リ既ニ川南ニハ大寶寺家起テ田川楯引二郡ヲ并セ酒田家ハ川北ニ跋扈シテ互ニ權ヲ爭ヒシカ幕府應安ノ征討一旦武家一統ノ氣運ニ乘ジ當郡モ暫ク無事ニ屬スト雖モ是ヨリ應仁以來猶百年間五畿七道穩カナラズ終ニ永享鎌倉ノ大亂ヲ釀シ關東奥羽再ヒ棟梁ヲ失テ更ニ割據ノ勢ヲ新タニス然ト雖モ猶文明中迄ハ奥羽ノ豪族未ダ足利幕府ノ餘澤ヲ忘レズ遙ニ洛中ノ亂ヲ憂テ東山殿ノ危急ヲ救ヒ奉ント最上政家カ出羽ノ軍勢ヲ催ニ當リテ川北ニモ酒田ノ一家川南ノ大寶寺政氏ト心ヲ合セ三郡ノ兵ヲ卒テ信夫郡ノ着到ニ付ク然ニ此時大崎ト伊達葦名思ノ外ノ矛盾起テ上洛ヲ果サハルノミナラズ却テ亂階ヲ釀シ是ヨリ兩國又戰國ニ陥リ混亂年ヲ亘ルニ及テ酒田家爰ニ滅亡シ大寶寺ガ一族東禪寺氏當城ヲ領シテ終ニ川南川北尾浦屋形ノ一領ニ歸セリ此人頗ル大將ニテ一時遠近ニ名ヲ舉シヨリ世押ナヘテ當城ヲサシテ東禪寺ノ城ト呼習セルコトニバナリヌ斯テ暫ク年ヲ經テ天正十六年秋越後ノ本莊繁長カ爲ニ尾浦ノ屋形滅亡ノ折東禪寺筑前守モ川北軍勢ヲ引卒シ千安十五里原ニ打テ出テ越後勢ニ驅負ケ主從數ヲ盡シテ討死シ跡ヲ守リシ城兵等モ其儘沒落シテ郡中更ニ亡國ニ至ル

甘粕氏

川村氏

是レ固ト莊内要覽ニ人皇四十六代孝謙天皇天平勝寶中東夷征伐ノ爲メニ房崎ノ元徒卿始メテ當城ヲ築ク云々ト云フニヨリテ當城ノ創始ヲ記シタルモノニシテ其後大寶寺家ト交渉ヲ始メシ時ヲ以テ足利氏ノ末世トナシ大寶寺家ヲ以テ北條ノ季世ニ秋田城介ヨリ大寶寺ニ封ゼラレタルモノトスルハ氏自ラ氏ノ見アルニテ編者ガ大寶寺家ニ就テノ僻見ハ上卷既ニ之ヲ盡セリ故ニ今此處ニハ之ヲ説カズ從ツテ酒田家ニ關スルコトモ自ラ相違アルヲ免レズ然レモ其大體ノ記述ニ就キテハ親任氏ノ考其當ヲ得タルナルベシ

東禪寺氏亡ブ上杉氏即チ川北ヲ甘粕備後守景繼ニ預ケテ當城ニ鎮セシム下リテ慶長二年上杉氏會津ニ移封セラレハヤ甘粕氏奥州白石ニ封ゼラレテ當城ニハ佐渡ノ郡奉行川村彦左衛門在任セシガ同三年ニ至リテ彦左衛門又佐渡ニ往ク是ニ於テ其子兵藏及志田修理亮胤宗等當城ヲ守衛セシガ上杉氏背反スルニ及ビテ志田修理ハ一隊ノ兵ヲ率ヒ下秀久ト共ニ最上ニ出陣シタリシガ事能ラズ秀久ハ最上氏ニ降リ兵ヲ背ケテ莊内ニ攻メ入り先ヅ松本信濃ヲ尾浦ニ襲撃シテ之ヲ陷レ使テ東禪寺ニ派シテ川村ニ降ヲ勸ム兵藏應ゼズ城廓ヲ修シ支城ヲ戒メ益戰備ヲ勉ム慶

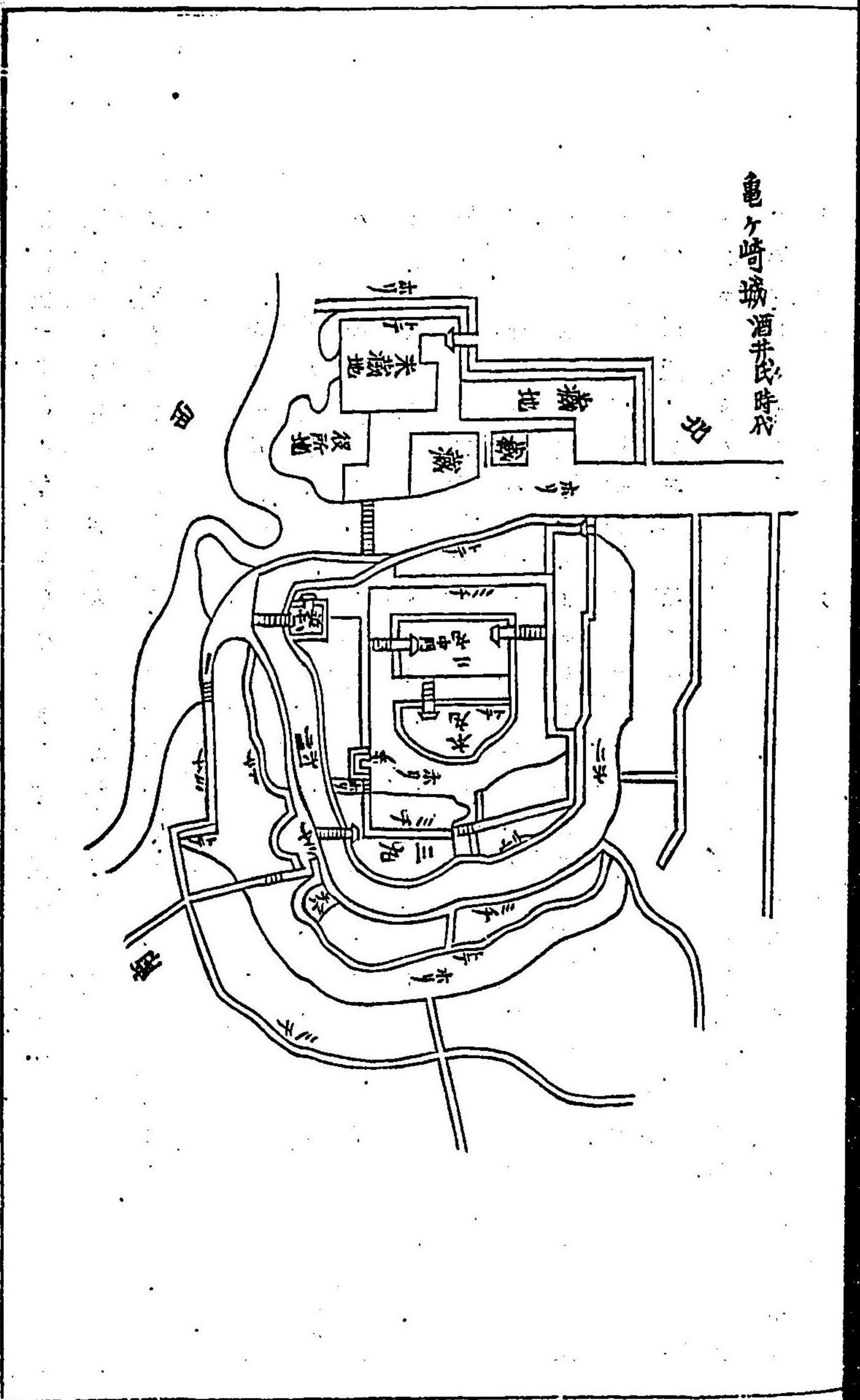
志村氏

長六年四月最上義光ノ子清水大内藏ヲ大將トシ志村光安下秀久等之ニ
 屬シ道ヲ分チテ東禪寺ヲ攻ム城兵能ク戰ヒ容易ニ屈スル色見エズ志村
 即チ川村志田等ニ書ヲ裁シテ降ヲ勸ム川村等大勢ノ遂ニ如何トモナ
 ベカラザルヲ悟リ互ニ質ヲ交換シ城ヲ渡シテ米澤ニ退キシト云フ莊内
 全ク遂ニ最上氏ノ手ニ歸セリ即チ志村伊豆守光安ヲ當城ノ主トナシ川
 北ノ地三万石ヲ賜フ慶長八年三月始メテ城ニ入ル令ヤ天下大ニ定リ亦
 干戈ヲ用フルノ虞ナシ光安即チ荒野ヲ開墾シ港口ヲ修シ埠頭ノ捷ヲ定
 メテ賦稅ヲ寬ニシ船舶ノ出入ヲ獎勵セシカバ當地繁盛ナル港トナレリ
 是ヨリ先キ慶長八年東禪寺ヲ改メテ龜ヶ崎ト稱シタリシガ酒田ナル名
 稱ハ古來區町ニ存在シテ東禪寺ト云ヒ龜ヶ崎ト云フモ只其城名ニ過ギ
 ザリシガ如キ觀アリシナリ慶長十六年八月光安卒ス子九郎兵衛光維繼
 グ其十九年一栗兵部ノ爲メニ鶴ヶ岡ニ殺サル時ニ年十九子無シ家斷ツ
 是レヨリ川北ノ郡領ハ最上氏本賦藏入トナリテ下ノ部將ヲシテ當城ヲ
 支配セシメタリ

元和八年最上家改易セララル、ニ及ビテ相馬大膳亮當城ヲ請取り同年十
 月ニ至ルマデ其部下ヲシテ之ヲ保管セシメ即酒井侯ニ之ヲ渡ス酒井侯

龜ヶ崎ト云フ名

酒井侯



爰ニ於テ一族松平甚三郎久恒ヲシテ城代タラシメ寄騎五十足輕百人ヲ率ヒテ之ヲ鎮セシメ爾後在番持ノ城トナリ維新ノ際廢城トナリ明治四年舊城趾ニ酒田縣廳ヲ置テ以テ田川飽海二郡ヲ管轄セリ

第三章 尾浦城考

武藤氏

武藤氏が大寶寺ヨリ移リシ以前當地ノ狀況如何ナリシヤ殆ト之ヲ知ルニ由ナシ或ハ武藤氏天文時代爰ニ移ルニ當リテ始メテ新城ヲ取リ立テ以テ住セシナリト云ヘド其以前トモ城郭ノ構ヘナキニセヨ幾分カ柵岩等ノ備ヘハアリタリシナルベシ案ズルニ相尾神社ハ其以前ヨリノ神社ニシテ武藤氏ノ此處ニ移ルヤ羽黒山ノ別當職ヲ兼ネ居タレバ春秋二季同社ニ於テ部内ノ名神及大小ノ神祇ヲ勸請シテ大祭典ヲ行ヒシト云ヘバ當時相尾社モ亦名アル神社ニテアリタリシニ相違ナシ然レモ當時ノ事ハ古記ノ徵スベキモノ一モナキヲ惜ム

義氏

義氏暴戾益甚シ前森東禪寺等相策リ逼リテ自殺セシム世傳フ義氏新山森ニテ自殺セリト新山森トハ城北馬町村ニアリテ正法寺ノ南方ニアル小丘ナリ野史ハ義氏最期ノ事ヲ記シテ曰ク東禪寺筑前由利郡ヲ征討セ

義興

ンガ爲メ兵ヲ率ヒテ尾浦城ヲ發シ米坂ニ至ル群士筑前ニ逼リテ義氏ヲ除カシム筑前之ニ從ヒ兵ヲ反シテ尾浦城ヲ攻ム義氏走リテ新山森ニ入リ自殺スト新山森ハ城北ニアリ城北ヨリ攻メ來リタルニ却テ城北ニ逃グ去レリトハ妄誕モ亦甚ダシト云フベシ此一事ニテモ野史ノ記述ノ大ニ錯誤スルヲ證明スルヲ得ベシ

落城

義興立テテ尾浦ニ居ル庸愚ニシテ士心ヲ得ルコト能ハズ天正十六年秋越後ノ本莊繁長兵ヲ率ヒテ小國口ヨリ亂入シ叨リニ沿道ノ諸壘ヲ陥ル義興援ヲ最上氏ニ請フ最上氏即チ中山玄蕃ヲシテ來リ援ケシム義興共ニ尾浦城ヲ守リタリシガ千安原ノ合戦ニテ屋形ノ老將前森東禪寺等皆戰歿シ越軍勢ヲ悉クシテ當城ニ逼ル義興遂ニ支フルコト能ハス玄蕃ト共ニ間道ヨリ走リテ最上氏ニ投ズ其終ル所ヲ知ラズト云フ繁長是ニ於テ城ニ入り其子義勝ヲ立テ、武藤氏ノ後ヲ建テシメシガ未ダ歲餘ナラズシテ義勝ハ信州ニ移サレ部内全ク上杉氏ノ有ニ歸セリ慶長十八年秋景勝領内ノ檢地ヲナサントシ先ヅ兵ヲ各所ニ配ス當城ハ島津淡路守矩久ノ守ル所タリ十月二十五日川南川北各所ニ一揆蜂起シ武藤氏ノ遺士ヲ糾合シテ大ニ郡邑ヲ掠奪ス川南ニ於テハ平賀善可ヲ將トシテ兵ヲ藤

檢地騒動

下兵

島ニ集メ一舉シテ城砦ヲ陷レ破竹ノ勢ヲ以テ横山大寶寺ノ諸城ヲ拔キ
 吶喊シテ尾浦城ニ逼ル城將矩久横山大寶寺ノ散兵ヲ集メ木戸栗田等ト
 共ニ堅ク之ヲ守ル然レモ一揆ノ兵甚ダ強悍ニシテ力敵スルコト能ハズ
 城ノ陥ル旦夕ニアラントス即チ急ヲ景勝ニ告グ景勝時ニ地ヲ檢シテ仙
 乏ニアリ急ヲ聞キ馳セテ莊内ニ入り先ヅ川北ノ一揆ヲ討平シ直ニ進デ
 平賀ノ後陣ヲ突ク平賀大ニ驚キ相顧ミテ潰走ス其軍途ニ藤島ニテ殲ク
 サル景勝是ニ於テ下治右衛門尉秀久ヲ以テ當城ノ主トナシ田川郡ノ内
 若干ヲ賜ヒ兼テ莊内本賦ノ勘定奉行タラシム是レヨリ以來部内少シク
 康ニシテ兵戈ヲ見サルコト數年秀久等ノ効多キニ居ルト云フ
 慶長五年上杉氏反ス九月下秀久川南勢ヲ率ヒテ白岩路ヲ取リテ山形ニ
 向ヒ連戦皆勝チ進ンデ山形ニ逼ラントス上杉家關原ニ大敗スルノ報ヲ
 聞キ直江兼續ノ之ヲ告知セザリシヲ憤リ終ニ最上氏ニ款ヲ納レ旗幟ヲ
 西ニシテ莊内ニ向フ此時ニ當リテ松本信濃等尾浦城ヲ居守セシガ秀久
 ノ急聲ニ遇ヒ支フルコト能ハズ右往左往ニ潰走シ尾浦城陥ル秀久即チ
 城中ニ入り以テ川南ノ大勢ヲ定メテ其翌六年四月志村等ト共ニ東禪寺
 城ヲ攻メテ之ヲ陥ル莊内途ニ最上氏ノ有ニ歸ス即チ下秀久ニ田川郡ヲ

大山ト云フ名

大山殿

城郭墟趾

賜フ秀久是ニ於テ下對馬守秀久ト改名シ尾浦城主トシテ越後口守衛ノ
 任ニ當リ有澤能登守ヲ小國ノ城ニ派シ三瀬城ニモ部將ヲ遣リテ之ヲ守
 ラシメ鼠ケ關小鍋關川ノ三道ニ備フ秀久卒ス次右衛門尉秀實繼グ慶長
 十九年六月鶴ケ岡ニ於テ一粟兵部ノ狼籍ニ遇ヒ傷ヲ被リテ歸リ翌日卒
 ス嗣子幼若ニシテ國除カル
 今此處ニ尾浦ヲ改メテ大山ト名ケシ時代ヲ考フルニ記ノ徵スベキモノ
 ナシト雖モ最上氏ノ莊内ヲ併領スルヤ慶長八年各地ノ名稱ヲ改易シテ
 東禪寺ヲ龜ヶ崎トシ大寶寺ヲ鶴ヶ岡トシタルノ跡アレバ當時莊内ニハ
 東禪寺大寶寺尾浦ト三城鼎立シ居リタル事實ニ考フレバ是ト同時ニ尾
 浦ヲモ改稱シテ大山トナシタルニハアラザルカ若シ其當時ニアラズト
 スルモ最上氏時代ノコトタルハ斷ジテ疑ハザルナリ
 元和元年最上家親其弟内膳正光因ヲ以テ大山ノ城主トシテ田川郡二萬
 石ヲ賜フ光因姓ヲ大山ト改メ筑前守ト稱ス大山殿ト稱スルハ是レナリ
 十一月枝城破壊ノ命アリ是ニ於テ大山城ヲ頽チ城跡二ノ丸ニ殿舎ヲ造
 リテ居ル現時殿町トノ稱呼アルハ即チ其居館ノ跡ナリト云フ今殿町ヨ
 リ太平山ニ至ルノ間ニ小堰アリ幅二三尺俗之ヲ御堀ト稱フ是レ即チ牙

酒井領

城ノ溝池ナリシト又西町ヨリ金剛山ニ至ルノ途次陣屋川ニ架シタル橋アリ笠取橋ト云フ大手ノ門前ナリシト云フ是等ニ就テ考フルニ盛時ノ大山城ハ今ノ大山町ノ西方田圃ノ中ヨリ正法寺境内ヲ掛ケテ二ノ丸ニシテ三ノ丸ノ外構ハ遠ク友江川ノ外部ニアリシモノカ

酒井備中守

元和八年十月酒井侯入部以來大山ニハ白井吉兵衛尉重敬ヲ代官トシ爾後酒田ト等シク在番持ニナシタリシガ下リテ正保四年十二月ニ至リ忠勝公七男木工之助忠解ニ大山領一万石ヲ賜フ忠解時ニ江戸ニ住セシガ寛文四年初メテ大山ニ至リ殿舎家中屋敷等ヲ築キテ居ル即チ江戸ニ往來スルニ本道鶴ヶ岡ニ依ルヲ避ケテ大山ノ北端ヨリ鶴ヶ岡ノ北方ヲ廻リ横山ノ南端ニ出デ以テ藤島ニ達スルノ道ヲ造ル備中街道是レナリ是レヨリ先キ万治二年忠解從五位備中守ニ任ズ故ニ此稱アリ寛文八年十一月二十八日大山ニ卒ス年二十六嗣ナシ領分公收セラル道林寺ニ墓アリ捐館道林院殿前備州大守覺英日慈大居士寛文第九巳年十一月二十八日卜前備州大守トハ後來凡庸ノ揣摩シタル稱呼ニシテ甚ダ其意ヲ得ザルナリ而シテ其寛文九年トアルモ是レ蓋シ八年ノ誤リナルベク寛永二十年十月二十二日ニ生レ二十六歳ニシテ卒セバ寛文八年タルベシ是等

公領

後世ヲ迷ハスベキモノ宜シク改置スベキナリ

天保騒動

爾後或ハ幕府ヨリ代官ヲ置キ所謂御陣屋ナルモノヲ建テ、莊内及由利郡ノ公領一般ヲ支配シタルコトモアリタリシガ多クハ酒井侯ノ預地トナリ居タリ降リテ天保ノ末年ニ及ビ所謂大山騒動ナルモノ起レリ是レ其原ハ酒井私領ノ藩士ガ其威勢ヲ逞フシテ素町人土百姓ヲ壓抑セシヨリ起リシコトニシテ大山ノ人民ハ我地公領タリ何ゾ私領ノ跋扈ヲ許サシヤトノ心ヨリ酒井家ノ御預トナルヲ厭ヒ遂ニ幕府ニ抗訴セシナリ此時大山ニ住シテ酒井家ニ縁故アルモノハ家宅ヲ破壊セラレ財貨ヲ棄却セラレテ殘酷ヲ極メラレタリト云フ然レモ遂ニ意達セズ主謀者ヲ誅シ不企ノ者ヲ誠メ以テ酒井侯ノ預地トナサレ慶應ノ初年ニ至リテ酒井領トシテ加増セラレタリ

酒造

當地酒造ヲ以テ現ハル然レモ如何ニシテ此酒造ノ紀元ヲ開キ如何ニ變遷シ來リタルヤ殆ト是ヲ知ルニ由ナシ蓋シ明治ノ初年ニ當リテ函館奉行ヨリ該地御用酒ヲ命ゼラレシヨリ一層ノ盛大ヲ來シ明治十三年ノ頃ハ其造石三万以上ニ及ビシ如ク見ユ自餘ノ事ハ絶テ世ニ其記載ヲ殘ササルナリ

武藤ノ遺臣

當時武藤家ノ遺臣ト稱スルモノ大山ニ薄衣傳右衛門武藤彈正アリ下川ニ東海林勘解由左衛門アルモ記録ノ徵トスベキモノナシト云フ

第四章 手向權考

手向繁盛

手向村ハ羽黒山ノ麓ニアリ僧侶山伏多ク此處ニ住ス羽黒山繁盛ノ折ハ郡内有名ノ大邑ニシテ其村領モ神領ト稱シテ威勢甚ダ高カリシヲ知ルベシ

諸説

今羽黒ノ由來ヲ叙セントスレバ其事甚ダ浩瀚ニ亘リ且ヤ諸説紛々トシテ到底之ヲ把握シ難シ故ニ其詳細ハ羽源記三山雅集出羽國風土記筆の餘リ等ニ譲リテ今此處ニ其大畧ヲ述ブルニ過ギズ固ヨリ莊内ニ於ケル式内神社ノ考證ノ如キハ微力如何ゾ之ヲ裁斷スルコトヲ得ン故ニ本卷末尾ニ後章トシテ各大家ノ所見ヲ讀者ニ紹介セントス讀者願クハ就テ想考ノ勞ヲ執レ

蜂子皇子

羽黒山縁起ニ曰ク三十三代崇峻天皇庶子アリ蜂子皇子ト云フ事ニヨリテ越ノ國ニ下向シ遂ニ羽黒山ニ來ラレ以テ當山ノ開祖タリ山上ニアル所ノ山陵ハ即チ太子ノ墓所ナリト今既ニ宮内省ヨリ山陵掃除ノ守衛ヲ

中興覺書

附セラレタリ謹デ日本書紀ヲ案ズルニ崇峻紀元年春三月大伴糠手連女小手子ヲ立テ、妃ト爲ス是レ蜂子皇子ト錦代皇女トヲ生ムトアルノミニシテ他蜂子皇子ノ記述ヲ欠ク又大日本史諸皇子列傳ヲ拜讀スルニ是亦蜂子皇子ト記述シ崇峻天皇庶子トアルノミニシテ傳欠ク凡テ是等吾人ガ見易キ所ノ書籍ハ全ク其記述ヲ欠キタレバ其入山ノ由來ハ之ヲ知ルニ由ナク又之ヲ知ルノ要モナケレバ今ニ於テハ本史モ全ク之ヲ闕如スベシ

羽黒山中興覺書

一當山往古莊内三郡社領ニテ衆徒所々方々ニ居住清僧修驗社人禰宜神子等都合七千餘坊アリト云フ大山タルニ依テ徒黨蜂起絶サレハ鎌倉將軍家出羽國司ニ訴ヘ惡事ノ奢侈有時ハ爵之西明寺時頼公廻國以後三ヶ年此山ニ來夏中本社ノ承仕役ヲ勤玉ヲ然ル間近年迄承

仕役ノ名ニ西ノ字ヲ付コト舊例也時頼公歸國ノ後當國探題トシテ
 梅津中將殿ヲ遣サル御子三人有リ中將殿へ鎌倉ヨリ御附人家老眞
 田氏吉舍氏兩人執權ス中將殿三子ハ長吏職ニ補セラレ一月十日代
 ニ仕置ヲ致サル因之衆徒山伏等上旬中旬下旬ト三長吏ニ配分ニテ
 伺公ス上旬家老太田氏中旬家老三澤氏神林氏下旬家老眞田氏吉住
 氏也上旬中旬子孫斷絶下旬末葉寛文中迄有之知行三十石ニテ女
 別當役ヲ勤メ神子社人ヲ支配ス常喜坊是也

一別當職武家持ニテ武藤氏也下大寶寺トテ今ノ鶴岡即居城也武藤末
 葉法名空山法山守壽慶壽ト號シ四代目ノ慶壽俗名義氏此時屋形號
 ヲ申請羽黒山領少分ニ宛行レ庄内寺社領面々ニ宛行レ自分放逸奢
 侈タルニ依テ惡屋形惡義氏ト國民之ヲ云

一武藤義氏屋形ニ改ラル、時別當職長吏職院主職夏一職寶前坊執行
 慶俊法印ニ附與兼帶ニ定ラル慶俊ハ九岡ノ城主武藤義興ノ子ナリ
 義興ハ義氏ノ弟ナリ依之別當職寶前坊ニ定ム

一院主光明院職ニ米澤直江山城守飯依ノ修驗養藏坊清順押ヲ移轉ス
 最上出羽守義光公莊内郡中ヲ攻取リ政道ヲナスニ依テ清順米澤ニ

出逃ス

一文祿ノ頃迄義氏時代天下大ニ亂テ越後景勝ヨリ莊内被攻奪武藤家
 滅亡莊内所々ニ景勝ヨリ城代ヲ被置^{時中}此山別當院主長吏夏一職等
 越後勢ノ大將直江山城守爲下知養藏坊清順ヲ押テ別當ニ定一山ノ
 執柄執行ス清順ハ妻帶タルニ依テ瀧水寺ノ内院主屋敷ニ移住ス麓
 ノ衆徒ニ課役ヲ掛米春普請等迄相觸ル衆徒修驗等法衣ヲ着威儀ヲ
 不亂相詰ル依之非義ノ新法ヲ止ム此年ノ前後此山越後ト最上双方
 へ被掠奪及滅亡本堂ノ内陣迄破リ寺ノ家財等被奪也

一義光最上郡中一統ニ及隨政道被行扱莊内ヲ攻取シハ天正文祿ノ頃
 也景勝勢終ニ敗北ス義光ノ命ニ依テ羽黒一統最上へ加勢義光莊内
 ヲ切取玉フ依之下治右衛門ヲ始所々ノ領主最上ニ降參ス下治右衛
 門ヲ對馬守ニ改ラル其刻米澤ニ逃タル養藏坊歸國ス

一慶俊執行遷化弟子有源等別當職等相續ス當山上坐タルニ依テ執行
 職共ニ兼帶也有源ハ義光ノ長子駿河守家親ノ長男最上源五郎家信
 御局ノ弟也其頃夏一職ハ寶性院尊良勤之

一慶長十年乙巳義光公羽黒本堂御修葺ノ事始有材木杣取ノ人夫六百

入山上運送最上莊内由利ノ人夫詰ル三月三日ヨリ十六日迄ニ引調
 普請惣奉行井上牛之助也此人下對馬守カ士也大工惣頭山形ノ住人
 小澤七郎後ニ若狹ト改名ス

一翌年四月十八日大工小屋ノ許ニ置シ繪馬數聲嘶ク此繪馬中古羽
 黒近邊ノ民圃ニ至リ青麥ヲ喰ト云フ略中是ヨリ近隣増川十二郷麥胡
 麻類ヲ不作舊例也此繪馬放レ馬タルニヨリ上遷宮ノ頃繫馬トス

一同年六月最上義光當山御參詣有供局上下膺數百人武士大勢供奉籠
 野道ヨリ荒澤へ登ル出羽奥州無双兩國ト云秘藏ノ名馬ヲ引セラル
 略下

一同年本堂ノ古材木ニテ荒澤地藏堂御影堂御修復其外羽黒荒澤堂社
 御破損有

一慶長十三平戊申瀧水寺塔修復人夫莊内中ヨリ詰ル大工頭小澤若狹
 也一ノ坂ヨリ塔ノ五重迄梯ヲ渡足代自由ノ真柱ヲ引上下シ立ル

一同年秋川欄干橋掛直ル大工頭小澤若狹也本堂修復ヨリ橋ニ至迄大
 工惣肝煎ハ石井羽度次郎荒澤大工孫右衛門
 以上

一説

右記録ニヨルニ或ハ時頼巡國ト云ヒ又最明寺ヲ西明寺トシ是ニ依テ承
 仕役ノ西ノ字ヲ用フル考證ヲ附會シ義興ヲ義氏ノ弟トシ慶俊ヲ義興ノ
 子トシ越後勢ト最上陣トヲ混同シ政氏ト晴時ノ法名ヲ顛倒スル等其誤
 謬ハ二三ニシテ止マラザルベキモ然レモ武藤氏以來最上氏ニ至ルマデ
 ノ沿革大要ヲ窺知スベキカ

或ハ曰ク當社ハ最行天皇廿一年六月十五日始メテ皇野山下ニ祠リ其後
 阿久谷ト云フ所ニ鎮坐シ後世ニ至リテ今ノ大堂ニ移シ本地佛トシ合一
 ニ祭シ祭ル神玉依姫命ト蜂子神社ハ即チ本神社ノ攝社トスト

明治ノ初メ迄ハ神佛混合ニシテ東叡山ノ支配ニ屬シ居リタリシガ混合
 ノ事禁ゼラル、ニ至リテ月山湯殿山ト共ニ社格國幣社ニ列セラレタリ

第五章 東田川郡廢城考一

藤島

藤島城 藤島村往來ノ西ニアリ土居堀跡等僅ニ存ス

其經始ノ年代詳カナラズ土俗云當城往古ヨリ土佐林氏之ヲ領シ羽黒ノ
 別當職ヲ兼テタリシガ後武藤氏ノ時ニ至リ政氏土佐林氏ヲ壓倒シ自ラ
 羽黒山ノ別當職ヲ務メタリシガ後土佐林氏武藤氏ニ歸參シ遂ニ之ガ長

臣トナリシト武藤氏ノ末世ニ於テハ義興當城ニ住シテ羽黒山ノ別當ヲ兼ネ居リタリシガ義氏ニ代ツテ武藤氏ノ後ヲ繼ギ尾浦ニ在城スルヤ同城全ク領主ヲ欠キ廢城ノ姿トナリ居リタルモノ、如シ其後本庄繁長庄内ニ亂入シ大寶寺勢千安合戰ニ敗軍シ尾浦大寶寺沒落シテ横山藤島等ニ引退ク越兵此夜横山城ヲ乘取リ藤島ニ押寄セタリシガ藤島ニ籠リタル散兵ハ皆荒川ニ退去シタルハ追撃シテ狩谷目ニ至ル是處ニ最上勢ノ武藤氏ヲ援ケント進軍シツ、アル一隊ト衝突シ黒瀬川ニ戰テ之ヲ敗ル是ニ於テ莊内全ク繁長ノ旗下ニ屬セリ天正十八年上杉氏檢地ノ事アリ上杉氏則チ藤島城ヲ修シ栗田刑部ヲ以テ之ヲ守ラシメテ不虞ニ備フ郡内大ニ騷擾シ人民洵々タリ栗田事ノ破レムコトヲ恐レ大寶寺ノ木戸左齋ト共ニ尾浦ニ走ル一揆之ヲ機トシ平賀善可ヲ大將トシ藤島ノ留守酒井新左衛門ヲ襲ヒ遂ニ藤島城ヲ攻メ陷シ進デ大寶寺ヲ襲ヒ破竹ノ勢ヲ以テ至ル所ノ城柵ヲ踏破シ全軍進デ尾浦ニ逼ル然レモ景勝ノ後援ニヨリテ尾浦城ヲ乘取リ能ハザルノミカ一揆ノ軍散々ニ破レテ大將平賀擒ニセラレ散兵藤島ニ逃グ此處ニ金右馬允殘兵ヲ集メ城郭ヲ増修シテ堅ク籠居ス上杉軍容易ニ之ヲ降スコト能ハズ上杉氏即チ直江兼續ヲ以テ

平賀善可

金右馬

新關因幡

因幡堰

大寶寺城ニ配シ以テ藤島ノ衝ニ當ラシメ木戸穂村等ヲシテ金ニ説キテ兵ヲ止メシメントセシガ右馬開カズ是ニ於テ兼續自ラ起證文ヲ草シ他ナキヲ誓ヒ質ヲ入レテ以テ右馬ノ心ヲ解カントス右馬意稍解ク天正十九年六月互ニ人質ヲ取カワシ右馬遂ニ城ヲ棄テ、去ル是ヨリ當城上杉領トナル

慶長五年最上家川南ヲ畧シ將ニ大ニ川北ヲ平ゲントセシトキ當城ニ部將安倍兵庫助氏重ヲ置テ守ラシム明年莊内全ク最上氏ノ下ニ歸スルヤ新關因幡守久正當城下七千石ノ地ヲ賜リ當城ヲ領シ兼テ大寶寺城代タリ是レ即チ慶長八年ナリ因幡後ニ鶴岡ニ移リ兼テ藤島城ヲ領ス元和元年支城破毀ノ命ニ因リテ遂ニ其城ヲ毀テ今僅ニ其跡ヲ見得ルノミ

固ト藤島領ハ只笹川ノ流ノ田畑ニ灌スルアルノミナリシガ故歲少シク旱ナルニ於テ民苦ムコト甚シ新關因幡之ヲ憂ヘ月山ヨリ黒川村ニ流出スル所ノ多藏川ヲ揚テ馬渡後田數里ノ間ノ山麓ヲ廻シ黒瀬ヨリ古郡迄堰臺ヲ築キ荒川ニ樋ヲ架シ以テ藤島領ニ引入ント企テタリシガ事終ニ成ラズ是ヨリ百餘年ヲ經テ貞享二年ノ大旱ニ及ビ再ビ此業ヲ繼テ治水ノ事ヲ舉グント歎願セシニ元祿二年ニ至リテ漸ク裁許ヲ蒙リ郡奉行皆

古郡

廻楯

余目

某往古ノ堰筋ニ從ヒ一郷ノ蒼生粉骨擢身漸ク其事ヲ竣ス即チ企業者ノ名跡ヲ取リテ之ニ命ズ因幡堰是レナリ然共未ダ細流水淺クシテ悉皆之ヲ灌沃スル能ハザルヲ惜ミタリシガ寶永二年再ビ之ヲ修シ鹽ヲ土ニ混ジテ以テ堰臺ヲ堅メ晝夜息マズ役ヲ督シテ終ニ全ク大成シ今ニ於テ其德ヲ蒙ルモノ僅少ナラズト云フ

古郡楯 藤島川渡場近所ニアリ

土人云土佐林氏始メ古郡ヲ領シ後藤島ニ移ル故ニ今藤島ニ古郡入作ナルモノアリト其真偽憶ナラズ

廻楯 堀形今僅ニ存ス

最上家臣相馬某住ス子孫今ニ當村ニ殘レリ奥州相馬家ノ一族ト云傳フ當地最上川跡ノ沼ニ倚タル究竟ノ要害地ナレバ安倍親任氏ハ其昔若也シヲ元和ニ掃ヒ捨ラレテ相馬家其儘爰ニ土着シ最上家斷絶ノ折浪々シテ郷士トナリシ家ナラント云フ

余目城 余目ノ内枋方新田ニ在リ楯村又楯野ト稱ス

同所八幡社ノ縁起ニ曰ク後冷泉天皇治曆中奥州信夫郡余目領主佐藤清郷男佐藤知基當所ニ居住依テ余目ト稱シ當社神領寄附

安保氏

同記ニ又曰ク後龜山天皇應安年中阿保肥前守男阿保太郎吉形余目館ニ住居當社八幡宮ヲ崇敬館内ニ遷座十六代ノ後天正八年爲最上義晃被亡乘慶寺ニ安保殿ノ位牌ト云フアリ實相院即翁鐵心大居士至德三年丙子霜月十六日安保太郎吉形トアリ安保太郎吉形ハ即チ位牌ノ施主ニシテ實相院トハ別ナルベシ

安倍親任氏曰ク足利將軍尊氏ノ執事高武藏守師直父子滅亡ノ折其臣安保肥前守忠實安保親王ノ末葉ニシテ壽永一ノ合戦ノ折當國ニ落來リ余目ヲ横領シテ庄内ノ一黨タリ至德三年寅十一月十六日卒實松院殿即翁鐵山大居士ト證ス當邑乘慶寺ニ葬ル是ヨリ子孫連綿十六代安保與太郎能形天正三年疫病ニ卒舍弟與次郎ハ田尻楯ニ住大浦屋形ト合戦シ助川ト道形村ノ間ニシテ流矢ニ當テ死ス妹小糸方ハ千河原殿ニ嫁ス爰ニ於テ安保家斷絶家臣梅木某其跡ヲ領スト然ラバ即チ梅木ナル人ハ主家斷絶後尾浦屋形ニ仕ヘ又上杉氏最上氏ニ歷仕シ酒井侯ニ至リテ梅木與右衛門梅木與助ノ兩家ハ餘目組ノ大肝煎ニ任ゼラレシモノカ

慶長五年最上家亂入ノ時一隊ノ兵ヲ余目ニ置テ以テ川北ノ上杉勢ニ備フ然ルニ翌年四月東禪寺ノ城兵出デ、余目ヲ襲ヒシガ固ヨリ敗軍ノ卒

千河原

遊摺部

ナレバ其勢力モ鈍クシテ目醒シキ對軍モナカリシナラン爾後最上領トナリ當所ニ岩ヲ置テ酒田城ノ繫トナセシガ元和元年破壊セラレシモノカ
 元和八年最上家改易酒井侯御入部ノ後連枝酒井左近忠俊ニ余目領五千石分知セラレ陣所ヲ建テ、土着セシガ其嗣絶ユルヤ公領ニ沒收セラレ千河原楯 館跡僅ニ殘レリト云フ
 余目ノ安保與太郎ガ妹小糸ノ方此千河原殿ニ嫁ト云フ此女美人ニシテ丈ニ餘ル髮ハ糸ヲ引タルガ如シ故ニ名クト或ハ附會ノ説ニシテ信ズルニ足ラズト雖モ暫ク記シテ異聞ヲ廣ム此方千河原ニ嫁スル時化粧料トシテ前方野串形野ト云ニ場ノ谷地ヲ進ゼラル故ニ今ニ地先ハ余目分ナレ毛上ハ千河原ニテ所務スト安倍親任氏ハ云ヘリ
 遊摺部楯 余目東最上川ノ端ニ在平城ニシテ古川泓沼ニ寄リシ要害也又由摺部トモ書ク
 當城尾浦屋形一門武藤萬歲丸住セシガ後川ヲ越ヘテ砂越城ニ移レリト云フ安倍氏曰ク尾張義氏川南ヲ平定シ猶川北ヲ手ニ入ント暫ク万歲丸ヲ爰ニ移シテ砂越ニ手遣セシナルベシト

宮會根

新井堀

此村天保以前ヨリ最上川突當リテ住居ナリ難ク嘉永五年ニ至リ川北五町野ノ内置上地ニ移レリ故ニ其城趾モ今ハ川中トナレリ
 宮會根楯 其跡田畑トナリテ殘レリ楯主姓名ヲ傳ヘズ土着ナルベシ
 村内ニ金沼ト云フアリ土俗金峯權現此沼ヨリ現レ給フト云フ古金峯山ノ社領有リテ宮會根村トハ稱シケルニヤト進藤氏ハ云ヘリ
 文久二年水野郷右衛門カ振人當村某ノ咄ニ近頃楯ノ近所作田手入ノ爲メばね土二三尺掘起セシニ底ヨリ脇差二本其外瀬戸類ヲ掘出セリ瀬戸物ハ痛ミ脇差ハ一本無銘ニテ一本銘アリシト云フ又此者ノ咄ニ同村ノ何某モ此邊ヨリ有銘ノ脇差一本ト古錢多ク掘出セリ此古錢ヲ其儘家ニ運ビ坐敷ノ板ノ間ニ莖八枚ヲ廣ゲテ乾シ置タリシニ其夜此坐敷終夜馬ノ騒グガ如キ音セシカバ家内恐レテ元ノ如ク埋メタリト云フ如何ナル馬ニヤ
 當村ノ佐藤某ハ佐藤嗣信ノ後裔ナリ固ト松山ニ住セシガ當地方ヲ開拓センガ爲メニ同志ヲ率ヒテ住シ以テ當村創始ノ基ヲナス家傳アリ歷々事蹟ヲ徵スベシト云フモ未ダ考證セズ
 新井堀楯 村ノ西南楯村ト云フハ即チ其跡也楯主姓名ヲ傳ヘズ土着ナ

ルベシ

當村代々肝煎又三郎先祖ハ掃部助或ハ加賀ト稱下對馬守原美濃守等ノ皆濟狀慶長七年分々同十九年分迄數通ヲ傳フ

科澤

第六章 東田川郡廢城考二

科澤楯 立谷澤ノ内科澤村川東ノ山下下扉ニアリ

秀衡ノ妹德尼此處ニ隱居セリト云銀杏ノ大木泉水等今モ殘レリ川向ニ

モ楯跡アリテ近年土中ヨリ風鈴ヲ掘出セリ土人云昔此所ニ寺院多カリ

シ所ナリシト蓋シ羽黒山盛ナリシ頃裏口別當杯アリシ所ナランカ下扉

ノ地名ハ古羽黒大堂ノ扉ニ造リシ大材ノ出タルヲ以テ名クト云フ楯跡

ハ後世土著ノ侍ノ寄居搔上ナルベシト安倍氏ハ云フ

三ヶ澤

三ヶ澤楯 村北上ニ在小坂楯ト稱ス梨ノ古木殘レリ

當村ニ按察使澤ト云フ所アリ後圓融天皇康曆中出羽國司兼頼陣ヲ取テ

當郡ノ夷ヲ退治セシ所ナリト稱ス澤及ヒ深田ヲ取廻ハシ少シク要害ノ

丘陵ナリ慶長十九年六月一票兵部添川ニ落來リ爰ニ楯籠リシ所ナリト

云フ

當村ニ善光寺ト云フ禪院アリテ閻浮檀金ノ如來ヲ本尊トス佛丈一吋八分葉坐坐ノ中ニ酒井藩士栗田家はヲ守護セリ家傳ニ曰ク忠勝公信州ヨリ庄内御入

部ノ折栗田氏善光寺ノ本尊ヲ守護シ來リテ當村ニ一寺ヲ建立シ善光寺

ヲ模シテ如來ヲ安置シ奉ルト然レモ栗田刑部ノ當村ニ入りシハ慶長年

間ニシテ上杉氏ノ代ナリ

或云中昔信州善光寺ノ衆徒等如來ノ本躰ハ庄内ニアリト云フヲ忌ミテ

江戸ニ出訴ス老中聞テ今若シ衆徒等ノ云フ所ヲシテ實事ナラシメバ訴

訟ノ起ルモ亦止ムヲ得ザル事ナレモ聞ガ如クハ古來別當タリシ栗田家

今猶庄内ニ在ト今是等ヲ正シテ若シ證據彼レニ存シ却テ善光寺ノ敗訴

トナラバ需メテ滅亡ヲ招グナリト仰セ諭サレシカバ衆徒グニモト同ジ

テ公事ヲ却下セリト云フ

添川

添川楯 羽黒山長吏梅津氏居館

何代ノ頃ヨリカ梅津氏此處ニ住シ羽黒山ノ長吏タリ

天正年中上杉氏莊内ヲ領シ櫛引郷ヲ直江兼續ニ賜フヤ當村モ兼續ノ所

領トナリシガ慶長二年上杉家越後信州ノ所領ニ換ヘテ會津ニ移リシ折

川中島善光寺ノ栗田刑部當城ヲ賜ヒテ移ル居ルコト四年慶長五年不慮

狩川

ノ事起リテ栗田ノ一門斷絶ス上杉氏背叛スルニ及ビ武藤氏ノ遺臣等最上氏ノ煽動ニヨリテ所在蜂起シ添川城幸ニ空主トナリ居リタルバ此處ニヨリテ下秀久ノ衝ニ當リタレド固ヨリ烏合ノ衆ヨク爲スナク一戰シテ下秀久ニ破ラレタリ冬秀久兵鋒ヲ變ヘ莊内ニ攻メ入り次デ最上氏全ク莊内ヲ討平スルニ及ビテ當城ハ其部將一栗兵部角丹ノ有ニ歸シ當村千石ヲ領シテ鶴岡ニ在番ス兵部異圖アリ最上家親ノ弟清水大内藏ヲ立テントス慶長十九年六月朔新關因幡鶴岡城ニ於テ志村光維(光安ノ子)下秀久ヲ襲スルノ事アリ兵部事ノ覺レタルヲ慮リ光維ヲ殺シ秀久ニ傷ケ走テ添川城ニ據ル北楯大學等討テ之ヲ殲ス兵部ノ族黨悉ク滅ス酒井侯ノ入部セラレ、ヤ寛永八年添川村ノ郷士伊藤帶刀ヲ擢デ大肝煎トナス狩川城 村中往來ノ南ニ在ル山城ナリ

本丸ハ奥山ヨリ峯續ノ尾崎ニシテ奥ニ長ク左右狹シ二三ノ丸モ狹ク後ニ深山取續キ大手東ニ清川海道ヲ眼下ニシテ川南過半一目ニ見晴シ誠ニ要害ノ地ナリ本丸切岸峻岨ニシテ輒ク登ルベカラズ搦手西ノ麓ニ園ヒト呼テ町敷三四丁アリ此處昔ノ侍屋敷ナリト云フ其外馬場等ノ地名モ殘レリ

北楯氏

出羽郡司小野某ノ居住シタル所ニヤ當村東外ノ熊野權現ノアル所ヲ小野ト云ヒテ古ハ小野千軒トテ大邑ナリシト云ヒ傳ヘリ其後裔小野長者或ハ旭長者杯稱シテ狩川楯主旭齋藤新九郎俊氏ガ家ナリト云フ

慶長六年莊内悉皆最上ノ領ニ歸スルヤ北楯兵部少輔ヲ以テ當城ノ主トナシ三百石ヲ領シ狩川清川立谷澤ヲ支配シ以テ清川ノ關ヲ守ル其子大學和長ノ代ニ至リ狩川組荒撫ノ地ヲ再興センガ爲慶長十七年春立谷澤川ヲ上ケテ大堰ヲ企テ大業成就シテ水下新田殘ラズ所領ニ賜フ是ニ於テ秩祿三千二百石トナリシト云フ

大學塚

大堰由來ノ記 (拔萃)

一北楯大學儀御當地狩川楯ヲ預リ狩川清川立谷澤支配仕狩川住居仕候此處毎年干損仕候間大學工夫仕大分ノ御普請ニ候ヘ共清川山ノ腰新堰ヲ立清川山ヲ切割立谷澤川ノ水ヲ取候ハ、本田以不及申新田モ出來可仕旨出羽守ヘ申立候處大工棟梁若狹ト申者被遣水ヲ盛候處十分水ノリ可申旨申ニ付申立通被仰付慶長十七年子三月五日方普請取懸申候其節奉行は酒田ノ志村伊豆大山ノ下治右衛門其外莊内大身ノ者共被申付候

豐樂志村伊豆ハ慶長十六年ニ死シタルハ、此處ニ伊豆トアルハ九郎兵衛ノ誤リニヤ

一 堰ノ長清川堰口ヨリ三ヶ澤迄五千九百六十間此間山切割ノ處有之奉行共間敷ニテ請取并見立普請申付人足ハ最上莊内油利仙乏々相詰狩川ニ大分ノ假小屋ヲ立罷在候右扶持方ハ莊内藏前ニテ可爲取旨被申付候親任兵云此折由利島崎鶴岡大山御引御入部合十二万三千七百石此人足一日ニ七千四百二十一人宛夜二十一日ニテ出來ト云ヘリ此時清川村下最上川端懸葉崩レテ悉難儀ニ至大學龍神ニ祈願シ秘藏ノ鑿ヲ掘ニ沈メテ祈ク此難ヲ成キ成脱セシト云テ今モ此處ヲ背敷淵ト唱ヘ願ハ難儀ナリ云々

一 志村伊豆大身故丁場多請取候處何ト存候哉申付様惡敷成就ナリカタク見候間大學以訴狀新堰ノ儀乍憚拙者指圖次第ニ仕候様惣奉行共被仰付御目付ヲ被下候ハ難有仕合可奉存候ケ様ノ儀申立御領内ヲ騒シ大分ノ普請自然成就仕兼候ハ拙者切腹可仕候此段被仰上可被下段家老共迄申立候處具ニ違御耳則御目付武久莊兵衛乙坂六左衛門大津藤右衛門ノ三人罷下リ奉行共ニ被申渡候趣今度普請之儀大學見立ノ事ニ候間諸事同人存分ニ可任旨被仰渡候

一 其節大學の書狀を以今度追て訴訟尤ニ候委細之義は目付共の申渡候通今度之普請何様にも其方次第と申付候間心儘に可仕人足等はは何萬入候共不苦旨被申渡候間大學見立通差圖仕候へは殊之外早ク成就水も十分に通候右ノ普請申立候時成就迄三年と相極候事

清川

一 右之段々目付共三人最上ハ登義光へ具に申聞候處殊之外大悅被申其後義光ハ以書狀今度其方一命よかけ大分之普請見立通成就仕大分水參候由扱々手柄殊に末代領分ノ重責任候右之爲褒美此用水にて出來致候新田何万石出候共其方知行に結可爲取候事

清川橋 長者屋敷ト云フハ即橋跡ナリト云フ

義經記ニモ出デ居ル所ニシテ義經等ノ一行五所王子ノ社ニ通夜シタリト云ヒ傳フ五所王子ノ事別ニ記メベシ羽黒舊記ニ清川片町ハ平賀殿御分同片町ハ砂越殿御分トアリ

或云清川村ハ昔川ノ北ニ有シニヤ古水帳ニ豆腐山抔云下名殘テ川向ニ御高モ付ケリ今ノ村立ハ御高モナキ河原地ト見ユト親任氏曰ク往古ヨリ元村ハ當所ナカラ上杉時代最上時代ニモ清川向ニ關ヲ居テ出入ヲ改メタリ其後南北一領ニ歸シテ此番所ヲ廢サレテ民家モ皆元村ニ引シ故川向ニ御高地モ殘レルナランカト

元和御入部ヨリ當所最上川ヲ浜リ新莊領清水ニ上陸最上ヲ通り檜下峠ヲ越へ伊達ノ桑折ニ出ル之ヲ東都ノ往還ト定メラレンシ殊ニ繁華ノ船着トハナレリ

戊辰役

清川ノ東森林鬱蒼タル所ヲ御殿林ト云フ林ヲ繞ル川ヲ立谷澤川ト云フ川ヲ隔テ、腹卷岩屏立シ板敷山陣ヶ峯等ノ峯巒相連リ北方ハ最上川ヲ挾ンデ黒岩岬有リ田川飽海二郡ノ咽喉タリ

明治元年四月二十三日薩長ノ軍新庄ニ着シ即夜參謀大山格之助二小隊ヲ率ヒ本合海ヨリ乗船シ土湯ニ上陸腹卷岩ニ陣シ立谷澤川ヲ隔テ、發砲ス庄内兵御殿林ニ陣シ之ニ應ズ二十四日砲擊酣ナルノ時薩長軍數騎清川ノ南方ノ丘陵ニ現ハレ庄内勢ノ後ヲ襲ヒ苦戰數時互ニ殺傷アリ薩長ノ軍利アラズシテ退ク

三嶋通庸山形縣令タリ盛ニ土木ヲ起ス明治十年清川新道開鑿ノ事アリ立谷澤川ニ東雲橋ヲ架シ腹卷岩ノ北麓ヲ削リテ最上川ノ南岸ニ沿ヒ坦道直行最上郡古口驛ニ達スル通路ナリ民其便ニヨル妙カラズ

第七章 東田川郡廢城考三

丸岡

丸岡城 當村肥後守館跡共四ヶ所ニ在リト云フ

初押切備前守在城セシガ後横山ニ移リ天正ノ頃武藤義氏ノ弟兵庫頭氏高在城ス故ニ又武庫屋形トモ云フ此城前ニ内川ノ流ヲ控ヘ後ハ青龍寺

加藤忠廣

川ヲ帶ビ中昔城ノ近傍赤川縦横ニ貫流シテ要害無双ノ地ナリシト云フ故ニ最上ノ松根海道及米澤口ノ大鳥海道ヲ扼シテ古來廢スベカラザル要地ナレバ時代々々ノ城跡モ殘レルナリ義光物語ニ云フ義光讒言ヲ信シ長男修理太夫義康ヲ追放シ紀州高野山ニ趣カシム義康越後ニ出デ北國ヲ登ラントテ大網口ヨリ庄内ニ入ル義光密ニ下秀久ノ與方土肥半左衛門ヲシテ道ニ要シテ是ヲ討シム半左衛門即チ丸岡ニ於テ之ヲ襲ヒ鐵砲ヲ以テ討取ル近習ノ士十四五人枕ヲ並ベテ討死ス其跡ニ塚ヲ築テ修理塚ト唱フト今一里塚ト唱フルハ即チ是レナリ

寛永九年肥後守加藤忠廣事ヲ以テ庄内ニ配流セラレ酒井侯ノ御預トナリテ近村一萬石ヲ以テ之ガ食邑トナス承應二年卒ス其落胤加藤主計新井堀村ニ住シテ豪族タリ爾後丸岡公領トナル忠廣莊内下降ノ時詩アリ

高坂

人間萬事定不定 身似明星西亦東

三十一一年如一夢 醒來庄内破籠中

高坂城 下高坂村洞春院門前山ノ尾崎ニ在リ

土俗此處ヲ赤剝ト云フ稻荷ノ小社有リ是ヨリ北ニ押シ廻シ手廣ニシテ

楠氏遺聞

本丸ハ一段高ク近邊ヲ廣ク見渡シ前ニハ青龍寺川ヲ控テ要害ノ地ナレド後ハ新山村ニシテ今ハ開ケタル田圃ナレド其以前ハ如何ナリシモノニヤ土俗云フ當城昔ハ赤川ノ流ニヨリテ今金峯海道畑中天王社邊ニ在シガ赤川突當テ保チガタク當所ニ引シト云フ親任氏曰ク屋形時代迄赤川筋此邊ニ向テ縱横ニ流レシ跡顯然タレバ實ニ左モアリシナラント當村洞春院ハ楠氏ノ落人ノ開祖ナリトテ紋章ハ菊水ヲ用ヒ又正成湊川討死ノ時其兒正行ニ遺リシ書翰ヲ傳フ其文ニ曰ク

尙々卷絹一疋公ヲ拜受具足一領祖方我等迄
若古し候へども長き形見と遺候

今度軍人指下候事不別儀我等最後近候と覺候願は貴殿成長之器最見
届度候得共義之重處難默止候勤學無懈怠成長之後我等心中可被察候
謹言

正月二十四日

兵衛

楠庄五郎とのへ

ト此邊赤坂金峯山河内山等大和河内ノ邊ノ地名ヲ用フルコト多ケレバ或ハ楠氏ノ正統ノ盤居セシ處ナルヤ計リ難シト雖モ是レ亦充分ノ考證

瀧澤
金谷

アルニアラズ敢テ大方ノ考證ヲ待タンノミ
義光記ニ高坂ノ城主高坂中務ナルモノアリ其愛惜ノ幼子義氏ノ爲ニ殺害セララル是ニ於テ義光ノ計ニ同シ草薙備前ニヨリテ山形ニ内通シ遂ニ義氏ヲ殺シタタルニアラザルコトハ本史上卷既ニ之ヲ述ベタリ況ンヤ一子ヲ殺サレタルノ故ヲ以テオヤ蓋シ高坂中務ハ前森藏人東禪寺筑前等ト共ニ武藤氏股肱ノ臣ナリシナラン其後武藤亡ブニ及ビテ高坂玄蕃ナルモノ上杉家ニ仕ヘ又最上領ノ時ハ高坂三郎二郎ハ楯主タリシト見ユ後世醫ヲ業トシ姓ヲ松山ト改メ以テ酒井侯ノ藩醫トナルト云フ
瀧澤楯 楯跡金峯山麓瀧澤村ニアリ其沿革詳ナラズ
金谷楯 母狩山ノ麓金谷村ニアリ寄居ナルベシ
武藤家ノ臣押切某住ス其子又藏繼グ又藏ノ子某ノ時武藤氏亡ビ上杉領トナルヤ浪々シ鶴岡長泉寺ニ僑居シテ餘生ヲ送り其男押切名兵衛最上氏ノ代ニ地侍タリ妻ハ大山ノ地侍山本利左衛門ノ女也女子一人ヲ生ム名兵衛寛永後郷中收納ノ小役ヲ勤ム翌小原玄庵ノ家ニ生ヲ送り七十二歳ニシテ死ス女ノ玄庵ニ嫁セシモノ玄碩松達ヲ生ム玄碩天ス松達家ヲ

熊出

繼グ姓ヲ武藤ト改ム後酒井侯藩醫ナル武藤良大ハ即チ其子孫ナリト云フ
熊出楯 熊出村船ノ臺ト云フ所即チ大鳥川ト梵字川ノ落口ニアリ羽源
記之ヲ佐藤楯トス

名川

楯主本郷氏子孫廻楯村ニ殘レリト云フ風土記之ヲ本間某トシ假名諱等
詳ナラズト記ス奥羽永慶軍記ニ義氏時代熊出半太同半治ト云フ士見ユ
或ハ當村ノ住人ナリシニヤ親任氏曰ク當所ハ尾浦海道熊出ノヘツリト
云フ難所ヲ固メタル岩ナルベシト
名川楯 熊出村ノ對岸名川村
當村ハ小地ナガラ後ニ深山ヲ負ヒ前ニハ大鳥川八苦和川ノ落合ヲ控テ
要害ノ地ナリ此處モ尾浦海道米澤口ノ固場ナレバ最上家時代ニハ別テ
人數ヲ置レシ處ナルベシ

田澤

館主姓名詳ナラズ慶長中出羽守義光ノ兵士千人計リ籠リケルニ越兵柴
井樓ヲ揚テ攻メ落シタリト云フ事或書翰ニ見エタリ
田澤城 大鳥村ノ内下田澤ニ在リ
安倍親任氏城主田澤家先祖書ヲ解シテ曰ク

田澤氏先祖覺書

此書先祖書ヲ云フ不文ニシテ讀ムベカラズ其意ヲ解スルニ田澤越前守
ハ從來小國ノ一家ニシテ旗下也田澤郷一萬三千貫ヲ領ス田澤ノ城主タ
リ豊島城ト並立テ互角ノ如シ當城後ニ大山ヲ負ヒ切岸高ク登テ堅固ノ
要害也家紋鷹羽指物ハ白熊馬印ハ抱澤瀉ヲ用ヒ天正ノ初最上義光日向
守某并莊内黨ノ某ト兩將ヲ以テ攻寄ル受二天正ノ初トシ末ニハ越前討死テ元龜トス幼兒ノ
形ニ亡サレシ家ナルベシ越前守即鶴田丹後ヲ始敷百騎ヲ從ヘ自ラ戈ヲ執テ先陣
ニ進ミ舟津民部左衛門ト鎗ヲ合セ終ニ之ヲ討取ト云ル城中反忠ノ者ア
リテ燒立シカバ終ニ落城シテ越前守自害一族郎等モ或討死又ハ自殺シ
テ悉ク亡ス鶴田丹後ハ敵舟津次右衛門同作右衛門蟹才藏鹿兒才藏後編島家ニ
仕テ名ヲ得シ士ナリ
等ト渡リ合ヒ疵ヲ蒙リ圍ヲ切拔テ落去ヌ子孫今戸澤家
ニ在リト云フ又越前守ガ弟ハ白岩
家ヲ經テ白岩兵庫ト稱ス後戸澤右京亮ニ仕ヘ右京ガ姉ニ配偶シ二千五
百石ヲ領ス寛永初年百九歳卒其子ヲ彌十郎ト云フ又庄内七組ト唱ルハ
六郷兵庫本藤伊勢藤ハ堂ノ假
字實ハ本堂白岩兵庫二鎗某梅澤右衛門柏岡左馬助戸澤右
京ナリ此内本堂六郷白岩ハ其元田澤ノ一家ナリ此七組共上杉ガ爲メニ
亡サル云々

親任云是ヲ庄内七組ト云フハ不審也六郷戸澤ハ仙乏黨ニテ慶長中迄

六郷ハ仙乏六郷楯戸澤ハ同角ノ楯ニ在リ本堂ハ由利黨也白岩ハ最上ノ白岩家ト見ユ梅澤ハ藤澤ノ楯主ニヤ其餘未ダ考ヘズ殊ニ上杉家ノ爲ニ亡ト云フモ覺東ナシ天文以前ヨリ慶長迄ノコトヲ取交テ云ヘルモノカ

其後天正十八年秀吉小田原陣ノ折戸澤右京ノ男箱根山中ニ於テ秀吉ニ謁シ本領ニ安堵ス依テ六組ノ一族郎等多ク戸澤家ニ仕フ白岩田澤兩家ノ子孫モ猶ホ彼家ニ殘レリ但田澤氏後ニハ柳ニ改ム案ニ此後ト云ヘル文モ當ラズ又田澤没落後越前守ガ幼息三歲園ヲ出デ後ニ最上家臣又羽州ニ移リシ家ナリ又田澤浪々後此兒醫ニ隱レテ大坂ニ住シ淀殿ノ侍醫ト爲リ元和元年大坂落城後幕府ニ召サレ食邑ヲ賜ヒ田澤清雲院法橋道賀ト號ス是レ則チ官醫田澤宗伯莊内藩田澤伯珉ガ祖ナリト云フ
今田澤ノ地勢ヲ見ルニ深山ノ澤合其地狹少近境ノ助ケ乏ク要害ノ地ニアラザレ直江兼續ガ米澤ヨリ大鳥海道ヲ披キシ折ハ山中十餘里ノ難所ヲ凌ギ漸ク莊内領ヘノ取付キナレバ爰ニ繫ノ砦ヲ構ヘ一手ノ人數ヲ籠置テ尾浦橋ノ嶮ヲ守リシ處ト見ユ最上領ニ移リテハ此往來停止ト見ユレド猶守衛ノ人數ハ置レシナラン

大鳥

大鳥橋 在所未ダ判明セズ

里俗云大平村一社有リ安倍殿ヲ祭ルト村中多分安倍姓也近年迄此村ニ古代ノ丸木弓其外武器又ハ古代ノ梳家具類ノ珍シキモノ傳ヘタリ此山中里俗ノ言葉温和古風ヲ存シ字義ニ叶ヒ世俗聞馴レヌ言葉多シ前九年合戰安倍貞任滅亡シ一族正任大鳥山ノ太郎頼遠ガ許ニ隱ル又頼時ノ弟僧良照モ初爰ニ隱ルト或ハ然ラン
里俗又云深山朝日嶽ノ谷合モ昔平家ノ落人一村ヲ立テ住ス世ニ知レザルコト數百年偶用ヲ調フルニ越後村上ニ出ヅ道遠カラズ此村藍ヲ産セザリシヲ以テ以前ハ皆白布ヲ着シタリト
當村ハ鶴岡ヨリ七八里ノ山中大鳥川ヲ挾デ五六ヶ所ニ分レタル村ナリ其最河内ナル鱒淵村ヨリ大鳥池ノ流ニ添ヒ朝日嶽ノ麓ヲ經深山幽谷數十里ニシテ米澤領長井郷草岡村ニ出ル徑路有リ是レ昔尾浦屋形ノ時代開キシ故ヲ以テ今ニ尾浦海道ト云フ又當村ヨリ北熊野山ノ峯ヲ越レバ山濱郷越澤村ニ出ル其奥ニハ又越後領電村ニ出ル間道二筋計リアリ何レモ一峯ヲ越テ程遠カラズト云フ文祿元年直江山城ガ内ノ山奉行等尾浦海道ノ記殘リテ工藤半三郎ノ家ニ傳ハレリト云フ此半三郎ト云フハ

工藤左衛門尉祐經ノ次男ノ後裔ナリトノ家傳アリ

第八章 東田川郡廢城考四

松根

松根城 松根上村街道ノ西側ノ大部ニシテ此邊ノ小名ヲ城ノ内ト云ヒ搦手ハ赤川ノ切岸高ク登ヘ大手口ニハ昔谷川流レシト見エ北ノ方ニモ堀形殘レリ

最上家老臣松根備前守當郷一万石ヲ領セシ城跡也最上家繼嗣ノ爭擾ニ備前主家ノ爲メニ義ヲ謀リ逆臣能延越前楯岡甲斐ヲ關東ニ訴フ是ニ於テ徳川氏此事ヲ糾問セシニ終ニ其跡ヲ認メ得ザリシカバ備前ヲ以テ主ヲ經フルモノトシ筑後國ニ配シ立花家ニ預ケラル後ニ越前甲斐等ノ非謀顯ハレ最上源五郎義俊終ニ近江國ニ改易セラル、ニ至レリ嗚呼古來忠臣義士ノ怨ヲ吞ンデ泉下ニ隕スルモノ幾何ゾ備前ノ忠魂義膽蓋シ虛空ニ向ツテ逍遙セシナルベシ

前楯

楯ノ内最上院ト云フアリ備前守配流ノ折家老某主君ニ代テ切腹セル遺骸ヲ楯ノ内ニ葬リ小院ヲ取立同僚某法鉢シテ此墓ヲ守リシガ後正保三年ニ至リ本住職ヲ置テ一寺ヲ取立タリト云フ此上村一村四十軒計皆最上士ノ跡也ト云ヒ傳フ村立ヲ見ルニ元和元年備前守當所ニ岩ヲ取立テ與力郎等ニ屋敷ヲ割リ與ヘ此村ヲ立テシガ同八年斷絶ノ折是等其儘當所ニ止リ新墾ノ田畑ニヨリテ農民ニ隠レシモノト見エタリ

前楯 同下村ノ東山手十王峠坂口ノ北尾崎ニ在リ
土俗云フ昔長者爰ニ居館ヲ構ヘ村立モ其麓ナリシガ當所ノ地勢神樂獅子ノカタチセシ其頭ニ長者居館ヲ構ヘ四方堀ヲ廻ラシ首ノ邊ヲ堀切リシニ村水濁水シテ住居シガタク今ノ澤口ト云フ地ニ村ヲ引シト親任氏云フ當所ハ最上ヨリノ往來月山六十里越ノ險難ヲ凌ギ大綱ヨリ十王峠ヲ下リテ庄内領ヘノ取付ナレバ屋形時代ヨリ上杉領ノ折ニハ東荒屋邊ニ根城ヲ構ヘ此山中通り所々ニ岩搔上ヲ取立テ人數ヲ籠メシ處ナルベシ左レバ此長者屋敷モ全ク岩跡ト見エタリト

東岩本

東岩本楯 當村小名ニ楯村ト云フハ即其跡也楯主判ラズ

西岩本

西岩本楯 道程記ニ出ツ

越中山

六十里越 固ノ岩ナラン
越中山楯

四荒屋
東荒屋

越中山村ハ古來廣漠タル原野ニシテ殆ト不毛ノ地タリシガ元祿ノ末村
民大館藤兵衛ナルモノアリ治水ノ利ヲ起サント金剛山川ヲ分疏シ三粟
屋一口ヨリ溝渠ヲ鑿リ三里餘ニシテ鳥帽子形ニ至リ一大瀑布ヲナシ煙
見瀧ト號ス其開墾スルトコロ百町歩餘正徳四年ニ至ルモ其功未ダ缺ク
ル所アリ七世ノ孫市右衛門後ニ藤兵衛ト改ム遺志ヲ繼ギ大ニ修築シテ天保三年ヨ
リ同八年ニ至テ成ル堰幅七尺深サ三尺屈曲環流スルコト六千九百間餘
其水五ヶ村ニ灌漑シ開拓二百十町歩餘ニ及ブ世之ヲ稱シテ天保堰ト云
フ

西荒屋楯 江口ノ切ノ近所水無川ノ端ニ有楯村ト云フ是レナリ

東荒屋楯

當村ハ當今川ヲ挾テ松根ノ西ニ在リ地勢ヲ考フルニ其昔當所ハ六十里
越堅ノ根城ニシテ一手ノ侍大將ヲ籠メ置シ處ナランカ道程記ニ最上家
ニテ築キ出ラレシ熊出江口ノ土手切拂フ時ハ是ヨリ鶴ヶ岡迄ハ湖ノ如
クナラン依テ松根東荒屋西岩本ノ小城ヲ取立備ナル人ヲ被召置敵ニ此
堤切ラレヌ様被成度事也尤此三ヶ所ニ人數ヲ置タラバ十王峠ヨリ内へ
敵越スコトアルベカラズト云ヘリ

黒川

黒川楯 三ヶ所ニアリ

當村小割ニ分レテ拾餘ヶ村凡テ黒川ト稱ス其小名ノ内楯村又古楯村ア
リ何レモ古來ノ楯跡ナルベシ今田畑トナリテ不分明ナリ親任氏云フ大
郷ニシテ高モ多ケレバ昔ヨリ相應ノ大身搔上岩ヲ構ヘテ六十里越固松
根ノ二ノ身ヲ持シ處ナラン但瀧ノ上ハ地侍上野源左衛門ノ小屋敷ナル
ベシ家傳ノ古記アリ

今度莊内一揆蜂起之處立屋喜兵衛吾等以介法身上無異儀相濟候事神
妙ニ候因茲自今傳馬宿迄普請棟役等永代免許者也依如件

天正十八年十一月十日

直江山城

黒印

上野源左衛門とのへ

當所宮ノ下村四所大明神ハ山ニヨリテ社ヲナセリ麓即宮ノ下村也宮居
古ク物サビテ正面ニ武藤氏ノ紋章六目結ヲ彫付神前ニ舞臺ヲ設ケ社家
三人社僧一人神事正月三日夜ヨリ四日朝迄猿樂能有リ社家百姓其役々
各家ニ傳フテ是ヲ役ス邊土斯ル風流ヲ殘ス美談ノ一也土人云古へ遠流
ノ公卿猿樂ヲ好ミ土人ニ教ヘテ神事ノ式トスト親任氏猿樂ハ東山殿ニ

勝福寺

起レリ左レバ最上家時代當村領主ノ物好カ子ヒソカニ思フ寛永中酒井氏久ク當村ニ蟄居ス若クハ此人ノ慰ニテ神事ノ式トナセシニ非ズヤ流人ニ云ル是ニ近シ裝束等ノ中古代結構ノ品モ有リシ殊ニ翁ノ面ハ作物ニテ稀世ノモノナリシヲ修復ノ折取替ラレシ杯云中昔以來鶴ヶ岡ニ召レテ折々御覽モ有テ其時々御裝束等夫々下賜ヒ今ニ結構ノ品々調ヘリ此神事ノ折見物ノ人衆鳥氣ヲ堅禁ス若シ之ヲ犯セバ即坐ニ氣絶ス夫ヲ境外ニ出シ捨置バ頓テ蘇生スト云フ又當村ニ牧童院ト云フアリ又百姓ノ苗字ニ劔持清和蛸井齋藤旭難波秋山杯色々ノ姓氏交レリ其内劔持ハ其實監物ニテ假名ヲ後世苗字ニナセシナランカ當村此氏ノ殘ルヲ見レバ寛永中當所大肝煎ノ劔持氏ハ即先亡土着ノ地侍ナルベシ

當村ニ王子塚ト云フアリ近年或者之ヲ發掘セシニ中ハ石棺ニシテ其内ニ財寶等アリシヲ窃ニ出セシ事ノ現ハレテ刑罰ニ處セラレタリ其後直ニ之ヲ埋メ遂ニ深ク研究スベキノ跡ヲ絶テリ

勝福寺楯

村ノ表ニアリテ大畑ト唱フ堀ノ内杯ノ下名モ殘レリ楯主詳ナラズ松根海道ナレバ是モ柴ノ跡ナルニヤ

松尾

當所泉山村ニ泉大明神アリ
松尾城

後田

貴船ノ社ハ即チ其跡ナラン武藤家先代松尾小次郎師氏此處ニ居住シタリシト口碑ニ傳フ

後田楯 村地方三ヶ所ニ在リ

其内一ヶ所五郎太夫殿楯貴船社ト楯村トノ間高ミノ畑地即其跡也

黒瀬川筋ノ大泓ヲ要害ニ形取シ所也後田林ノ内明治開拓ノ本陣ヲ取建シ經塚山ハ此楯主ノ葬地也トテ當村ノ寺院ニテ是迄祭リ居リシ所ト云フ

又一ヶ所ハ猪ノ俣新田ニ近キ山手ニ在リ山楯ト呼ブ木立林也楯主傳ヘズ

又一ヶ所ハ羽黒海道黒瀬川橋ノ南山手邊ニ有ト云フ是ヲ黒瀬楯ト云フ楥本讚岐守居城ト云ヒ傳フ千安合戦ノ時最上ノ先鋒ト上杉勢ト一戦爭アリシハ此處ナリ益ノ名所ニシテ種々ノ傳説アリ早田氏家傳ニ云フ先祖理右衛門ハ新關因幡ノ與方ニシテ鶴ヶ岡六軒小路ニ住シ天神ノ社人タリ慶長十九年一粟ノ狼藉ノ折手柄ヲ願ハシ後田晝田中島ノ地ヲ賜テ

狩谷口

領セリト云フ
狩谷口

細谷

村中ニ其跡殘レリ寄居ノ類ト見ユ楯主詳ナラズ千安合戦後越後勢最上勢ヲ追ヒ當村ニ陣シ黒瀬川ヲ挾テ戦ヒシ古戰場ナリ

赤川

往昔寛永頃迄ハ鶴岡ヨリ藤島ニ通ズルニハ細谷ヲ經タリシモノニシテ上杉氏ノ頃春風右京進ナル人此處ニ住セシニヤ藤島大洞寺縁記及大淵記杯云フ書ニハ種々ノ妄説アリト云フ

助川

赤川楯
西村ノ中川端水神ノ邊ハ即其跡也楯主姓名傳ハラズ是モ寄居小屋ノ跡ナラン此古川端ノ水神ヲ里俗禹王神ト云フ古來此處梵字川突キ當テ難義セシヨリ水道ヲ利センガ爲メ禹王ヲ祭リシモノナルベシ

城主助川圖書頭法名靈中院殿道兼大禪定門文龜元年辛申三月十日或ハ三月十五日卒ス當村禪院ニ葬ル文龜ハ足利義澄時代大寶寺屋形澄氏時代也親任氏云此圖書ガ卒セル年號モ其實天正慶長頃ノコトニテ上杉家ガ最上

荒川

家侍ノ寄居搔上ノ類ナランカ但シ往古ノコトハ羽源記ニ云フ推古ノ御宇大泉庄國司助川縣主彼侵病醫陰ノ兩道驗ナシ座臥足跡リ運歩スルコト能ハザルコト三年ニ至リケレバ官任ノ上洛ヲ怠リ諸卿疑フ云々ト出セリ渡會幹正曰ク往古出羽ノ目ノ居所ニテ彼ノ圖書頭モ史官ノ名ナレバ其後孫ナルニヤト風土略記ニモ當所ハ往古朝ヨリ官人ヲ置レシ所也ト論セリ里俗云フ當村ハ小野小町ノ地ニシテ小町ガ産湯ノ水ヲ汲ミシ池ナリトテ今ニ殘レル等ヨリ見レハ先代由緒有シ村ナラン

谷地

荒川楯
東荒川村ノ東羽黒街道小山ノ林入口左ニ八幡ノ禿倉アリ是レ村ノ鎮守ニシテ楯ノ八幡ト稱ス楯跡ナリ城主姓名ヲ傳ヘズ只最上ノ臣北五右衛門ノ覺書ニ當庄ノ内荒川村ニテ成敗者五人家ニ取籠リ候ヲ下對馬守ノ處ヨリ我等ヲ始メ二三十人越被申候時拙者モ一人討申候證人梅津善右衛門爰元ニ居申候ト見ユルノミ地勢ヲ見ルニ左右笹川荒川ノ流ヲ帶ビ小川ノ出崎ニシテ相應ノ要害ナレバ天正ノ頃ハ相應ノ大身ヲ置テ專ラ羽黒口ヲ支ヘシ砦ト見ユ

柳久瀬

和名川

平形

楯主姓名明カナラズ武藤氏時代ノ楯ナルニヤ地侍菅原左馬助書留ニ我等十六年ヨリ谷地楯弓矢ニテ高名仕候云々ト親任氏云フ左馬助十六歳ハ天正ノ末ニ當ルベシト

柳久瀬楯

村東黒瀬川ヲ越テ向ニ在リ里俗殿屋敷ト呼ビ楯主姓名ヲ傳ヘズ寄居播上ノ跡ナルベシ

和名川楯

事跡明カナラズ田地下名ニ楯前興屋ノ前抔云フアリ即チ楯跡ナリトコレモ寄居ノ類ト見ユ

第九章 東田川郡廢城考五

平形楯 村東藤嶋川ノ近所ニ在リ土居形其儘殘レリ

里俗云フ藤嶋城ノ家老金野氏ノ居館ナリト楯ノ内墳墓アリ文字消滅ス其外首塚ト云フモノ七ツアリ其縁故ヲ傳ヘズ當村龍門寺ニ祭ル法名平形院殿立林大禪定門朔日トアリ又或ハ藤嶋家老工藤七郎ト云フ人ノ楯ナリトモ云ヘリ

金野家傳ニ曰ク野ノ字ハ實永以後ヨリ加フ其先祖金右馬允ハ其先出羽國人金爲時ガ後裔ナリ元ヨリ庄内侍ニシテ屋形義氏ニ仕ヘ度々武功ヲ顯ハシ須走一村ヲ賜ヒ領ス天正十六年庄内崩壞ノ節潜伏シ其十八年一揆ノ折一手ノ大將トシテ藤嶋城ニ楯籠リ上杉氏ニ抗シテ武名ヲ顯ハセシガ後佐渡ニ移ル後最上氏代ニ至リ二代目右馬允故郷ニ歸リ先亡地侍ト稱シテ最上家ニ仕ヘ新田ヲ開キテ當村ニ土着シ最上家滅亡後寛永四年名ヲ源太左衛門ト改メ高力但馬取持ヲ以テ二百石ニテ酒井侯ニ召出サル小荷駄奉行ヲ被命長柄頭タリ其後代官ヲ勤ムト金右馬父子ノ武勳ニ就テ諸他ノ文書アレドモ今ハ畧ス或ハ曰ク猪俣村ノ金野氏モ亦此右馬ノ末葉ナリト

西袋

西袋楯 村内西袋山流泉寺境内ハ即チ楯跡ナリト云フ

横山

横山城 村中ニアリ

當村地藏堂縁起ニ曰ク享保ノ頃此寺ノ法普栴引郷九岡村ノ館主押切備前守後横山村ニ移リ當城ヲ築キ住ス後年當城沒落ノ折押切家日頃信仰ノ地藏

菩薩モ、押切沼ニ捨ラレ玉ヒ昔押切村邊ニ大沼有テ其跡今ニ下ケ名ニ殘レリ後年出現アリシヲ當村ニ一

宇建立シテ安置セリト云フ

羽源記ニ曰ク屋形義氏謀ヲ以テ横山城主横山大膳余目城主安保與太郎

ヲ大浦ニ招寄セ毒殺シテ兩家ヲ亡シ横山城ヲバ門葉ノ武藤茂兵衛ニ賜

フ此武藤茂兵衛天正中卒法名常光院殿ト號シ泉藏寺中石碑有リ此外ニ

自照院殿寛永八年未九月六日卒去廣覺院殿寛文四年辰五月九日卒去此二靈俗名ヲ誌サズシテ當寺過去

帳ニ殘レリ方今津輕藩醫辻道宅其弟横山孫太郎是常光院ノ子孫也トテ

近頃横山村ニ來リ板戸村在住ノ昔ノ一類共ヲ招集テ先祖常光院ノ百五

十回忌ヲ吊シコトアリト安藤親任氏ハ此ノ俗名ヲ帯セザル位牌ヲ以テ二代三代トシ此同忌ノ時合セテ此處ニ同向セシモノナルベシト云ヘリ莊内物語

ニ云フ天正十六年秋千安ナクレノ莊内勢藤島横山ノ城々ニ引退ク越兵

其夜横山ニ夜討シ藤島ニ押寄シガ最上方後田ニ引ト聞テ狩谷目ニ押詰

黒瀬ニ於テ一戰ニ最上勢ヲ討退ケ莊内三郡繁長ノ手ニ入ルト土俗曰ク

此折當城燒討セラレテ没落スト二代目茂兵衛ノ浪々セシハ此時ナルベ

シ

風土記ハ羽源記ヲ據トシテ横山館ハ武藤家ノ支族別居セシ館ナリ没落

ノ年季詳ナラズ天正年中迄武藤茂兵衛ト云フ人居住セシトゾ泉藏寺ハ

牌所ニシテ構ノ内ニアリ茂兵衛戒名常光院殿月深自照大居士茂兵衛嫡

子津輕土佐守殿家士トナリ寛永八年未九月六日死ス戒名自照院殿歡貞

心公大居士其子同彼地ニ於テ寛文四年正月九日死ス戒名廣學院殿楢

山玉松大居士其子孫今ニ土佐守殿家中ニ有リト云々本家ハ醫家ニテ祿

四百石支別ハ横山ヲ名乗リテ祿百石先年泉藏院ニ來リ常光院ノ百五十

年忌修行セシトゾト云ヘリ

天正十六年屋形滅亡シ上杉領ニ轉シ十八年一揆等横山城ヲモ襲取タル

コトハ夏日記ニ見ユレド合戦ノ趣城將等ノ事委シカラズ是ヨリ以來上

杉領中ハ勿論最上領ニ移テモ前後數十年間當城ノコト凡テ所見ナシ左

レド當今ノ荒川組モ昔ハ横山組ニ孕レン所ナリト云フハ上杉時代ノコ

トニテ此時代ニハ一万石前後ノ大身在城セルニヤト思ハル其後最上領

ニ移リテハ分限帳ニ三千三百石横山大學ト見ユルハ即チ當城主ナルベ

シ在住ノ地名ヲ名ルハ都テ此頃迄ノ習慣ナリ今此城趾ヲ見ルニ本丸土

居堀等迄其儘存在シテ元和破壞ノ跡ナルコト顯然タレバ最上家時代ニ

モ内郷通新井堀筋繋ノ岩ナルコト疑ナシト安倍親任氏ハ云ヘリ

當城横山村中程東側民家ノ裏ニ在テ東九東西四十間計南北五十間餘大

城墟

大淵

手西ニ向フ南北ニモ虎口アリ堀モ深ク土居モ崩レズ土居ノ上サイカチノ大樹ノ本ニ小社アリ中頃堀ヲ浚ヘテ脇差鎧等ヲ得タリト云フ大手脇角堀ヲ升堀ト云フ小キ中島アリ東搦手ノ堀ハ今菅田トナリ其外二ノ丸ハ皆田トナリ其沖ニ細流ヲ帶ブ是レ外構ノ堀跡ナラン此沖ハ往昔渺々タル大淵ト見ユ西南北三方二三ノ郭今民家或ハ畑トナリ其形ヲ殘サズ泉藏禪刹モ此南郭中ナリ此郭中民家ハ昔ノ與力郎等ノ子孫ナルベシ東南備中街道ノ出口モ今ニ小屋口ト唱フ此邊モ外構内ナルベシ凡テ南ヨリ西ニ折廻シ村外ニ赤川ノ流ヲ帶ビ北東ハ渺々タル菅原淵沼多ク古來屈竟ノ要害ト見エタリト筆の餘リニ記セリ今ハ次第ニ土居堀跡等ヲ類シテ畑畑トナル處多シ

大淵橋 大淵村渡リ手前廣野村中往來ノ傍ニアリシト
心耕録ニ曰ク今ノ大淵村ハ山本五左衛門ノ家ニテ開發セシトテ今既ニ神明ニ祭テ村中ニ社アリト聞ケリト又曰ク酒井家臣大淵氏ハ余目ノ安保太郎義郷ガ家老ニシテ大淵ノ城ニ住シ余目乘慶寺ニ先祖十六代ノ位牌ヲ祀ルト云フト親任氏曰ク當今大淵家此事ヲ傳ヘズ先祖大淵勘右衛門ハ越後ノ上總介殿ニ奉仕シ彼ノ家ニテ事アリシ折直ニ高田ニ於テ御

金沼

家ニ出シ人也左レド上總介殿越後ニ封ゼラレ給ヒシ折ハ東國侍上杉最上ノ浪人等多ク立入シコトナレバ前文ノ趣ハ先祖以前ノコトニテ其元ハ庄内地侍ニテアリシニヤト

金沼橋 大淵村東金沼ノ近所ニ有リ俗ニ治部屋敷ト云フ
土俗云フ此橋主滅亡ノ折城主ノ弟出家シ此橋跡ヲ領シテ藤嶋村大洞寺ノ開山タリ是レ心耕録ニモ記スル所ニシテ黒印地同様無年貢ニテ地元藤嶋村上町分大洞寺附ノ田地タリ方十二丁四面四十坪平均米百四十二俵上ル後年度々ノ公事起リシヨリ藤嶋村ヨリ訴テ年貢十八俵宛上納スト云ヘリ

親任氏大淵記ヲ批判シテ一ノ斷案ヲ作り左ノ如ク云ヘリ
治部屋敷ト唱ヘテ大洞寺ニテ領スルヲ見レハ最上家時代大淵治部大輔此砦ヲ領シ慶長中迄ハ最モ岩橋ナルヲ元和ニ屋敷橋ニ改メシ所ナラン元和八年最上家改易ニテ治部大輔モ浪々セシカバ子弟ノ大洞寺ニ住持タリシモノニ此屋敷ヲ讓與セシモノカ又ハ開山大洞寺開山玄文ハ治部大輔ガ事カトモ見ユレバ此人流浪ノ折直ニ浮屠ニ隱レ藤嶋ニ移住シテ一寺ヲ開基セルモノカ猶考フベシ

(大淵記參考)

編者曰ク大洞記トハ藤島大洞寺縁起ヲ翻案シテ俗間ニ判リ易キ様
面白可笑シク書キ綴リタルモノナレバ信ヲ措クニ足ラザルモ
ノナルベシ此書ハ天明ノ頃ニ出テ五十嵐某ノ書セシモノナリ
ト云フ

第十章 西田川郡廢城考一

田川

田川城 田川村ノ北方山ニ沿ヒタル所ニアリ
當城ノ創始遼遠ニシテ之ヲ知悉シ難シト雖モ寛治中源義家武衛家衛ト
戰ヒタリシ戰場ナリト云フハ妄誕ナルベシ上卷第四 章發着從ツテ當時ニ於ケル
遺蹟ハ殆ト全ク考證シ能ハザルナリ然レドモ明治ノ初メニ至ル迄當地
大庄屋タリシ佐藤氏ハ田川太郎行文ノ後裔ナリト云ヒテ其祖ハ藤原清
衛ヨリ出ヅルト稱スレバ或ハ藤原氏ノ縁故アルヤモ未ダ知ルベカラザ
ルナリ
義經記ニ田川太郎實房アリ是レ藤原氏ノ郎等ナリト云ヘリ東鑑ニ田川
太郎行文アリ秋田三郎致文ト共ニ宇佐美比企等ノ軍勢ヲ支ヘテ遂ニ討
死セシコト見エタリ是ニ由リテ考フレバ田川ハ實ニ北越ノ衝ニ當リ陸

出張坂

奥出羽ノ干城トシテ屈強ノ要地ナレバ藤原氏ニ於テモ或ハ其支族ヲ派
シテ當城ヲ守ラシメシモ文治年中ニ遂ニ宗家ト共ニ滅亡セシモノナル
ベシ
頼朝天下ヲ平定スルニ及ビテハ大泉ノ地頭ヲ置テ以テ莊内ヲ管セシメ
タレバ田川城モ從ツテ廢城ニ歸シタリシガ守護地頭ノ次第ニ勢威ヲ逞
フスルニ至リテ武藤氏先ヅ川南ヲ橫領シ是ニ於テ部將ヲ田川ニ衛シテ
以テ南口ノ扼タラシメシナラン其後天正ノ亂本莊氏小國口ヨリ攻メ入
ルニ及ビテ關根及當地方ニ於テ數回ノ討争アリシナルベシ親任氏ハ當
地方八幡太郎ノ戰場ナリト云ヒ傳フル古趾ハ大概天正時代ノ戰場ナル
ベシト云ヘリ
當地ト清水村トノ間ニ馬場山ト云フアリ土俗云フ文治ノ頃田川太郎居
館ノ蹟ナリト又村内宅地ノ中ニ古墳ニアリ田川太郎及武衛ノ妾ガ墓ナ
リト其他田川氏及藤原氏ニ關スル遺蹟近傍實ニ尠シトセズ往昔郡内屈
指ノ都邑タリシニ相違ナケレバ尙深ク探究ヲ要スベキナリ
出張坂 下清水村山ノ尾崎ニアリ俗豆腐山ト呼ブ
大手南ニ向ヒ楯形出丸ノ跡等僅ニ存ス搦手麓ニ土俗デボウ小屋ト呼テ